

**IMEMGS**

**Research Papers : Muslims in Japan No.5**

**全国モスク代表者会議 II**

—第2回会議の記録 2010年3月7日—

店田 廣文

岡井 宏文

**IMEMGS**

**Institute for Multi-ethnic and Multi-generational Societies  
WASEDA UNIVERSITY, Tokyo, Japan**

**October, 2010**

早稲田大学人間科学学術院

アジア社会論研究室

〒359-1192 所沢市三ヶ島 2-579-15



## 序

本報告書は、2010年3月7日、早稲田大学において開催した第2回モスク代表者会議「日本におけるムスリム・ネットワークと日本人ムスリム」（早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室主催）の報告書である。昨年2月11日に開催した第1回モスク代表者会議に続くものである。

2010年3月現在、日本には、外国人ムスリム約10万人、日本人ムスリム約1万人が居住しているものと推計され、全国各地にモスクも60カ所以上設立されている。ムスリム・コミュニティのプレゼンスはますます高まってきているが、それと呼応するように、生活に根ざした問題群—教育・墓地・その他日本社会とのかかわり等など、今後乗り越えなければならない課題は多い。われわれは、2009年度より日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究「滞日ムスリムの生活世界における多文化政策の影響と評価」（基盤(C),課題番号 21530567)を開始して、岐阜市において滞日ムスリムと日本人と日本の地域社会との関係を視野にいれた研究を進めている。今回の会議も、そのような研究の一環として開催し、滞日ムスリムの方々にとっては、各地の活動の現状や問題への対処方法などの情報を共有し、今後の活動に生かしていただくことも念頭においた。

この報告書は、前述した科学研究費補助金による調査研究の成果の一部として刊行するものであるが、モスク代表者会議の実施にあたっては、人間文化研究機構「イスラーム地域研究」における「アジア・ムスリム・ネットワーク」の助成も受けた。

今回の会議にあたっては、各地域のモスク代表者の方々をはじめ、滞日ムスリムの方々、また一般参加の方々など多くの人たちから多大なご協力をいただいた。改めて皆様に厚く御礼申し上げる次第である。

2010年9月

早稲田大学人間科学学術院 店田 廣文

電子メール：[htanada@waseda.jp](mailto:htanada@waseda.jp)

## 目次

序.....	I
会議プログラム.....	3
主要参加者一覧.....	5
会議録.....	6
セッションⅠ「ムスリム・コミュニティの課題」.....	20
セッションⅡ「日本におけるイスラーム」.....	41
セッションⅢ「マスジド・ネットワーク」.....	63
質疑応答.....	84
参考資料：会議への招聘状.....	97
参加者一覧.....	98
編者・会議録作成者・会議運営者一覧.....	99

会議プログラム

イスラーム地域研究・早稲田大学拠点「アジア・ムスリムのネットワーク」

早稲田大学人間科学学術院・アジア社会論研究室 主催

第2回モスク代表者会議

2010年3月7日(日)

於:早稲田大学・22号館201教室

「日本におけるムスリム・ネットワークと日本人ムスリム」

10:00-10:10 開会の挨拶

早稲田大学社会科学総合学術院 小島宏

基調講演

10:10-10:30 「地域社会におけるイスラーム認識」

早稲田大学多民族・多世代社会研究所 岡井宏文

10:30-11:00 「ムスリム・コミュニティからの眺望」

金城学院大学 シェル・アフザル・レカ

テーマ・セッション

総合司会：モハマド・アンワル・メイモン

11:00-12:30 セッション1 「ムスリム・コミュニティの課題」

(問題提起：クレイシ・ハールーン)

12:30-13:30 昼食休憩

13:30-15:00 セッション2 「日本におけるイスラーム」

(問題提起：前野 直樹)

15:00-15:30 休憩と礼拝 ( 15:10 サラート (ASR) )

15:30-17:00 セッション3 「マスジド・ネットワーク」

(問題提起：浜中 彰)

17:00-17:25 総合討論

17:25-17:30 閉会の挨拶

早稲田大学人間科学学術院 店田廣文

参考： MAGHRIB 17:40 ISHA 19:00

**Program on Muslim Network in Asia, Islamic Area Studies Center, Waseda University  
Laboratory on Asian Societies, Faculty of Human Sciences, Waseda University**

## **“Muslim Network in Japan and Japanese Muslim”**

**The Second Meeting of Representatives of Masjids in Japan, 7 March 2010**

**Venue:** Room #201, Bldg. #22, Waseda University (Waseda Campus)

### **Program:**

10:00-10:10 Opening Remarks Hiroshi KOJIMA, WU Faculty of Social Sciences

### **Lecture**

10:10-10:30 "Perceptions of Islam in Japanese community"  
Hirofumi OKAI, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

10:30-11:00 "Overview from Muslim communities in Japan"  
Sher Afzal Reka, Kinjo Gakuin Univ.

### **Roundtable Discussion**

Chair : Mohammad Anwer Memon

11:00-12:30 Session 1 "The Challenges for Muslim communities in Japan"  
(Presenter: Qureshi Haroon)

12:30-13:30 Break/Lunchtime

13:30-15:00 Session 2 "Islam in Japan"  
(Presenter: Naoki MAENO)

15:00-15:30 Break/Salat (ASR 15:10)

15:30-17:00 Session 3 "Masjid network in Japan"  
(Presenter: Akira HAMANAKA)

17:00-17:25 General Discussion

17:25-17:30 Closing Remarks Hirofumi TANADA, WU Faculty of Human Sciences

Notes : MAGHRIB 17 : 40 ISHA 19 : 00

## 主要参加者一覧

### (1) モスク代表者など

オバリ・アブドゥル・カーデル	徳島マシド代表
クレイシ・ハールーン	日本イスラーム文化センター (JIT) 事務局長
シェル・アフザル・レカ	金城学院大学講師
須見 啓司	北海道イスラミックソサエティ・墓地管理組合代表
浜中 彰	新居浜マシド代表
樋口 美作	日本ムスリム協会元会長
前野 直樹	日本ムスリム協会布教委員、ICOJ 宣教・教育部門代表
モハammad・アンワル・メイモン	PAKISTANI dot JP ( <a href="http://pakistani.jp/">http://pakistani.jp/</a> ) 編集者

### (2) 主催者側

小島 宏	早稲田大学社会科学総合学術院・教授
店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院・教授
岡井 宏文	早稲田大学多民族・多世代社会研究所・客員研究員
石川 基樹	早稲田大学人間総合研究センター・客員研究員

## Name of Participants

### (1) Representatives of Masjid etc.

Obari Abdul Kader,	Tokushima Masjid
Qureshi Haroon,	Secretary General, Japan Islamic Trust,
Sher Afzal Reka,	Lecturer , Kinjo Gakuin University
Keiji SUMI,	Member of Hokkaido Islamic Society
Akira HAMANAKA,	Niihama Masjid
Mimasaka HIGUCHI,	Former President, Japan Muslim Association
Naoki MAENO,	Member of Da'wah Committee , Japan Muslim Association Head of Da'wah & Tarbiyah wing for Japanese, Islamic Circle of Japan
Mohammad Anwer Memon ,	Editor, PAKISTANI dot JP ( <a href="http://pakistani.jp/">http://pakistani.jp/</a> )

### (2) Promoters

Hiroshi KOJIMA,	Professor, WU Faculty of Social Sciences
Hirofumi TANADA,	Professor, WU Faculty of Human Sciences
Hirofumi OKAI,	Researcher, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies
Kiju ISHIKAWA,	Researcher, WU Advanced Research Center for Human Sciences

## 会議録

### 開会挨拶

小島：

どうもお待たせして申し訳ありません。当初の予定を3分ぐらい過ぎておりますが、第2回モスク代表者会議を始めさせていただきたいと思っております。早稲田大学社会科学総合学院の小島と申します。開会のあいさつと基調講演の司会を務めさせていただきます。今日は天候の悪中、これだけ多くの方にお集まり頂き、どうもありがとうございます。私は挨拶をすることを考えていいなかったので、去年、店田先生が仰ったことをお借りしてしまおうかと思っております。これはあそこに積んである去年のモスク代表者会議の記録ですが、お持ち方は5ページを開いていただきますと、真ん中あたりに、去年はちょうど100年前の1909年の2月に、当時来日していたアブドゥルレシト・イブラヒムというトルコ系タター人ムスリムと早稲田大学の創設者である大隈重信公が面会したということがあったわけですが、今年は同じくらいにエジプト人のアフマド・ファドリが早稲田大学の講堂でイスラームに関する講演を行ってから100年ということで、また記念すべき年でもあります。早稲田大学はイスラーム圏を含むアジアとのつながりが歴史的に深く、現在は人間文化研究機構の早稲田拠点ということで、本部のような役割をしておりますし、文部省認定のイスラーム地域研究のセンターにもなっております。その前者の方の活動の一環として、ここにおります店田が代表者会議を企画致しました。本日はお越しいただきありがとうございます。去年、今年とお越しいただいた方には更に厚く御礼申し上げます。私自身は人口学者でムスリムの人口を数量的に研究させて頂いております。特に非イスラーム諸国のムスリムの方々に興味がありまして、東アジアやヨーロッパのモスクも周ったり、本を読んで勉強したり、統計をとらせて頂いております。実は今日も夜からソウルへ行って、火曜日にはインドネシア人のムスリムが集中している、アンサンというソウルの郊外に行き、そこにあるハンヤン大学のアンサン分校で韓国中東学会のヒ・スー先生とお会いして、韓国でムスリムの方を対象とした調査をやれないかということで、お話に行くわけですが、韓国と日本で似たような状況もございますので、ただ韓国のほうが多文化政策というのは進んでおりますので、いずれは日本は韓国からいろいろ学ばなければならないかもしれませんが、日本の中では皆様のこういうネットワークを通じて、日本の中のムスリム社会が順調に発展していくようにしていくことが必要だと思われまして、そういう点で、この会議は意義深いことと思われまして。またこうして皆様にお集まりいただいたことは、非常にありがたいことであると存じます。ヨーロッパの場合は政府の肝煎りでムスリムの団体ができたり、アメとムチでコントロールしようというところがありますが、日本はそういうことではないので、それはそれで結構なことだと思います。ムスリムの方々がお互いに支援し



あったり、日本人と交流関係を深めたりすることが大事ですので、まあこういう機会を、来年もやってくださるか分かりませんが、非常にそのような期待はあると思います。また、今日の会議の成功をお祈りさせて頂きたいと思います。とりあえずこれで、挨拶を終えさせていただきます。どうもありがとうございました。

それでは午前中の司会ということで、早速基調講演のほうに入らせていただきたいと思います。まず多民族多世代社会研究所の岡井宏文の方から「地域社会におけるイスラーム認識」というタイトルで、報告をさせていただきます。岡井さんとは6年ほど前に伊勢崎モスクと一緒に行って、その伊勢崎モスクがまだ今みたいな立派な建物ではなかったのですが。岡井さんよろしくお願ひします。

## 基調講演

岡井：

みなさん、おはようございます。今回基調講演をさせていただきます、早稲田大学の岡井と申します。まずはじめに、今回の代表者会議にお集まり頂きました各地の代表者の皆様、今回の会議への出席をご快諾くださり、誠にありがとうございます。そして今回の会議にご出席くださいますオブザーバーの皆様も、朝早くからありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。

では、早速基調講演に入って参りますけれども、私のテーマは「地域社会におけるイスラーム認識」と致しました。今回の会議では、各地のコミュニティや団体が最前線に立って活動されている方々のお話がこの後聞けると思っています。そのようなコミュニティの中のことではなく、私自身は日本社会の側のことについてお話していきたいと思っています。なぜ日本社会の側からのことをやるのかということですが、そのヒントは、実は昨年度の第1回モスク代表者会議にありました。第1回の代表者会議、去年2009年の2月に行われたわけですが、その時に何をお話頂いたかと言いますと、現在の活動状況について、各地の代表者の方に特にお話を頂きました。教育や墓地のこと、あるいは日本社会の関係なんかについても詳しいお話を頂きました。今回の会議もそうなんですけれども、(前回の代表者会議では) 会議の終盤には本年度と同じようにセッションを設けておりました。その会議の終盤のセッションでチラッと出てきたことがいくつかありました。それを簡単に纏めますと、まず一つが次世代の育成をしなければならないということ、そして日本でムスリムとしての人生を全うできる基盤作りをしていかなければならないということ。これは墓地なんかそれがそれにあたると思います。各地、課題が発生する現場をつなぐネットワークのようなものがないかということも少しお話に上がりました。その他には、日本社会、非ムスリム社会との共同、相互理解関係の構築なんかも必要になってくるのではないかということ。このようなお話が出てきたわけですね。それで、特に私どもの中で、おっと思ったのがですね、(スライド2) この下線を引いてあるところ、「日本で」というようなタームや「非ムスリム社会」といったようなタームが出てきたところです。こういった事柄が、ムスリムの方々の側から出てきた時に、じゃあ、(スライド2の) 下の部分、日本社会、非ムスリム社会の側というのは、いったいどのようにイスラームだとかムスリムというものを眼差しているのか。その辺り、このように日本社会という言葉が頻繁に出てくるにもかかわらず、実はあまり明らかにいなかった。実際何を考えているのか、今一つ分かりづらい部分があったということです。それで私達は、去年お話頂いた内容から、じゃあこのイスラームやムスリムに対する意識というものを深く探索してみようというふうに考えたわけです。

(スライド3) 実際に行った調査というのがあります。それが右に書いてある通り「外国人に関する意識調査」というものでした。この調査自体は、外国人に対する意識ということ

ですので、外国人の方全般を対象にしているんですが、その中に、(スライド3の) 目的の赤い部分に書いてあります通り、対ムスリム、イスラームに関する意識というものについての質問項目をかなりたくさん設けております。そこからイスラームやムスリムに対する認識について探索してみようと思いました。調査地域なんですが、これは岐阜県の岐阜市で行いました。具体的にはバーブ・アル=イスラーム岐阜モスクという、この後お話されるレカさんが活動なさっていたと思うんですけども、このバーブ・アル=イスラーム岐阜モスクの周辺地域で、調査を行いました。対象者は日本人の住民です。その中で 443 人の方に回答を頂きました。今回の調査、大変申し訳ないんですけども、外国人に関する意識調査としてやってしまいましたので、外国人のムスリムというような話になってしまう部分も若干ありますけれども、その辺りはちょっとご了承ください。

(スライド4) これがバーブ・ア=イスラーム岐阜マシドということで、岐阜県の岐阜大学の近くにできました、かなり大きな規模のモスクですね。この周辺地域で調査を行ったわけです。具体的な調査の内容なんですけれども、時間がありませんので手短かに見ていきますけれども、「イスラム教は教えが厳格である」とか、こういった意見について、実際に自分はどう思うかということをお答えいただいています。

(スライド5) 「イスラム教は教えが厳格」であるという意見について、一番多いのは「ある程度そう思う」の人たち。次に多いのがそう思うが「とてもそう思う」の人たち。これを合わせて大体 60%ぐらいの人が、イスラム教は教えが厳格だと思っている、ということがわかるわけです。

続いて、「イスラム教は攻撃的な宗教である」、しばしば取り立たされることですけれども、こうした攻撃的な宗教なんだと思っている、「そう思う」という人とですね、「そう思わない」という人は大体半々に分かれるんですね。「ある程度そう思う」と「ある程度そう思わない」も同じような数で、大体 Yes、No で半分に分かれるという結果になりました。

(スライド6) 次に、「イスラム教は平和を重んずる宗教である」ということについては、「あまりそう思わない」という人が 50.4%で半分以上を占める結果となりました。次に多いのが「ある程度そう思う」ということになります。

次に、「イスラム社会は世界社会の重要な一員である」というような質問をしてみました。そうしますと、これも「攻撃的」の質問と同じで、大体半々で分かれるという結果になりました。「そう思う」グループと「そう思わない」グループが大体半々ずつということになります。

(スライド7) 次です。これはですね、外国人に関する意識調査でしたので、外国人全般とムスリムにことを限定した場合にどうなるかということ、同じ質問をした時の、票の動きと伺いますか、それを見たものです。まず、「あなた自身は外国人一般と上手く付き合えると思いますか」と伺いますと、「ある程度そう思う」という人がほぼ半数いるというような結果になります。ただ「あまりそう思わない」という人も 37.5%いたということになります。じゃあそれをムスリムに限定すると、どうなるか伺いますと、「あまりそう思わな

い)、これが半数を占める結果になりました。

(スライド 8) 次に「日本に外国人が入ってくることにどう思いますか」あるいは「増えることについてどう思いますか」この比較をしたわけですが、そうしましたら、どちらの回答についても多いのは「どちらとも言えない」という人が一番多かったんですね、ただ、ムスリムの話になると、「どちらとも言えない」と態度を保留する人が若干増加するというようなことがあります。また、この「反対」と考えている人と「ある程度反対」と答えている人も、こちらと比較して少し増えるような状況があります。

(スライド 9) 駆け足で見えてきたわけですが、簡単に纏めると、どういうことかと言いますと、特定の、まあ先ほどの外国人との比較なんかもそうですけど、特定の質問項目におけるネガティブな回答への偏りが若干みられたということです。もう一つ、一般の外国人とムスリムを比較した際には態度が曖昧になったり、ポジティブな回答というのが若干減少するような傾向があります。ただ、ここで注意をしておかなければならないのが、こんな感じでしたという風に言ってしまうと、元も子もない感じがします。これが実は非常に重要なところで、Q24「ムスリム（イスラム教徒）の知り合いはいますか」という風に聞いてみると、なんと 89.6%、90%の人がムスリムの知り合いがいなかったというようなことがありました。だから、確かにイメージとかそういったものが作られているんだけど、実際にそれはその知り合いとかを介してつくられたものではないということが若干わかってくるわけです。

(スライド 10) それに加えて、一つ一つの質問項目は今見ていったんですけど、それだけだと、一つ一つバラバラにみるとですね、実際その日本人が何を考えているのかという風に、日本人が考えているイスラム像とかムスリムに対する態度というのは、なかなかちゃんとした形になってこないということがあります。バラバラにみても分からないというのはですね、例えば、イスラム教は厳格だと思っているが、うまく付き合えらと思っっている人もいますし、厳格だと思っているが、うまく付き合えないと思っっている人もいます。こうした、いろんなものを複合的にみないとちょっと日本人のイスラム認識というのはわかってこないなというのがありまして、次に何をしたらかと言いますと、回答傾向によるグループ化というものをやってみました。どういうことかと言いますと、さっきまで見てきた全部の質問項目を一つに纏めます。全部の回答を纏めると、回答傾向によって大体 443 人の人が 4 つのグループに分かれたというような結果になりました。この表の見方なんですが、黄色がそれぞれの質問項目について肯定的な態度を取っている人、青が否定的な態度を取っている人です。

練習で見えていきますが、グループ 1 は、イスラム教は攻撃的な宗教ではないと思っっていて、むしろ平和を重んずる宗教だと思っっている人、さらにムスリムが入ってくること、増えることも歓迎しているし、ムスリムともうまく付き合えらと思っっている人達、こういうグループ 1 というのがあります。次にグループ 2、イスラム教は教えが厳格だと思っっていて、かつイスラム社会は世界社会の重要な一員であると思っっていて、かつムスリムともうまく付

き合えるという風に思っている人達ということですね。グループ 3 はグループ 1 と対照的なグループで、イスラム教は攻撃的な宗教であると思っていて、ムスリムが入ってくることに反対だし、ムスリムとはうまくつきあえないかなという風に思っているグループであるということになります。グループ 4 なのですが、こちらはちょっと解釈が難しいので後に回しますけれども、厳格じゃないと思っていて、攻撃的じゃないとも思っていて、平和を重んじてないとも思っていて、世界社会の重要な一員でもないなと思っている。これはなかなかちょっと難しいんですけど、後でご説明します。

こういったグループというのができてきて、さっきの一元的な見方からはちょっと発展したかなという感じがします。さらに、これだけだと説明くさくてわからないので、回答傾向、各グループの特徴から名前をつけてみました。まずグループ 1、これはですね平和・寛容型という風に名付けました。グループ 2 は厳格・評価型という風に名付けています。グループ 3、これは攻撃的・拒否型という風に名付けました。グループ 4 は、お察しの通り、曖昧で、態度も中間的な態度を取るといようなグループになります。それで、この○の大きさ（スライド上）、これがですね、それぞれのグループが何人ぐらいいるかというその人数に対応しています。つまりこのグループ 3 の攻撃的拒否型が 1 番多くて、次に厳格・評価型が多いということになります。

こういったグループができたんですけども、まあイメージ、平和イメージ、そして寛容な態度、これはイメージと態度なんですけれども、まあこうした態度があるんだということはわかったんですけども、じゃあこの人たちはどうやってその態度というものを決めているのか。思い出して頂きたいのですが、ここでムスリムの知り合いがない人が 9 割、ほぼいない、ムスリムの知り合いがないながらも、このように 4 つのグループに分けることができました。じゃあこの人たちがどうやって、このイメージをつくり出してきたのかということなんですけれども、それを検討してみたのが、この次です。

（このスライド 11 は）最も耳にする情報との関係で、こういう質問文があります。「あなたがイスラムについて最も耳にする情報は何ですか」、という風に質問してみました。そうしますと、それぞれの回答グループ、この 4 つの回答グループがありますけど、4 つのグループそれぞれに特徴的な、最もよく耳にする情報というのが、グループで違ってくるわけですね。まずグループ 1 に関しては、どんな情報かということ、歴史や文化の情報が特徴的なグループで、紛争や事件なんかの情報というのは、あんまりほかのグループと比べて、特徴的でないグループであるといえます。グループ 2 に関しては、その社会についての情報というのを、他のグループと比べて摂取しているグループになります。グループ 3 は、まあそうきたかという感じなんですけれども、紛争やその事件に関する情報というのを、イスラム情報として受け取っていることが特徴的であると考えられます。逆にここが対応しているんですが、歴史や文化といった情報にはあまり触れていない人達なんだということがわかります。最後、曖昧・中間型の人達なんですけど、やはりかということ、あまり情報を耳にしていけないというようなところが特徴的だということになります。

これが最も耳にする情報との関係なんですが、じゃあこういった情報というのをどうやって、それぞれのグループの人達は耳にしたり、受け取ったりしているのかを示したのが、こちらです（スライド 12）。イスラームに関する情報ソースとの関係。やはりこのような質問項目があります。「イスラームについての情報ソースは何ですか」、という質問です。これを見ますと、グループ 1 に関しては、テレビを重要視していないグループということになります。あまりテレビからの情報というのが特徴的でないグループ。厳格・評価型のグループに関しては、その他、つまりテレビや新聞や本や雑誌、インターネット、学校の授業、講座、以外の何かから情報を得ている人達が、厳格・評価型であるということになります。これはちょっと後々検討が必要になってくると思いますが、こうだったということになります。グループ 3、攻撃的・拒否型の人に関しては、どういう情報が特徴的かと言いますと、情報ソースはテレビと新聞というのが最も特徴的であるグループだったということになります。さらに言うと、情報を得ていないというのが少ないですよ。つまり、情報は一杯持っていて、しかもテレビとか新聞から情報を得ている人達だということになります。グループ 4 ですが、この曖昧・中間型は、やはりそう来たかという感じですが、情報を得ていないという人たちになります。ただ新聞なんかも読んでない、イスラームに関する情報を新聞から得ていないということも特徴的なので、これにも注意が必要です。今まで、ムスリムの知り合いがいない中で、どうやってイスラームに対するイメージやムスリムに対する態度というものを決定してきたのか、決めてきたのかということを見てきたわけですが、どうやらそのグループごとのイメージ・意識、平和・寛容ですとか厳格・評価とか、こういったグループごとに特徴的な接触している情報と情報を得ているソースの違いというものがあるんだなと、そのような関連性が見えてきたと。最初の単純な見方だと、ネガティブな方に寄っているという感じだったんですけども、蓋を開けてみるこういう風な違いも出てきたということになります。

（スライド 13）これがですね、それぞれのグループがどのような位置関係にあるのかというのを示したものです。この縦軸がイメージ、イスラームに関するイメージの軸、横軸がムスリムに対する態度の軸ですね。それぞれのグループを割り振ってあげると、まずポジティブで協調的なところにグループ 1、平和・寛容型で歴史や文化の情報に親しんでいる人達が入っているということです。逆にそれと対応する形で、ネガティブで拒否的な態度を取っている人達が、ここに入っていて、それが攻撃的・拒否型で紛争や事件、テレビや新聞から情報を得ている人達が多かったということですね。その間にグループ 2 の厳格なことを評価している人達で、社会から情報を得ている人達。それでこのあたりが、所謂浮動票になるかと思うのですが、曖昧中間型もこのあたりに入って来るということになります。これが今回、代表者会議から出発してちょっと日本社会についてどうなんだということで、我々がやった調査の 1 部の結果なんですけれども、まあイメージや態度によってその分類がいろいろできた。一元的な見方から出発して、ちょっといろんなタイプが出てきたなということがわかってきました。必ずしもどちらかに寄っているわけではない。拒否に寄

っているわけでもないし、平和に寄っているわけでもない。そのどちらかに全員がかたまっているということもないですし、それぞれこれから動く可能性もあるということです。今も情報を得ているわけですから、日々の生活の中で、だんだん形作られるイスラームやムスリムに対する認識というものもある。ただし、生の接触というのが非常に少ない。「ムスリムの知り合いなし」が 89.6%の中で作られてきたイメージ。ここで代表者会議に立ち返るんですけども、代表者会議の際に、「日本社会との」とか、あるいは「日本社会の問題を踏まえてアクションを起こす」というようなことも出てきたわけですけども、逆にそういったことがあった場合、日本社会の側のイスラームイメージというのが、いわゆる今現場で起こっていて、これから代表者会議でお話いただくような、リアルなイスラームだとかリアルなムスリムの姿、日本に暮らしているリアルな姿とのリンクが必ずしもあるわけではありません。今回に関しては他の情報からイメージが構築されていたということになります。そのことは、ひいてはですね、ムスリムが暮らしているというこの当たり前の基本的な事実認識すら、ちょっと危うい部分とかもあるなと感じています。ここまでが結果です。

今回の会議では、代表者の方々にお集まり頂いておりますので、各地の最先端の議論、情報を共有していただくこともあると思いますし、何かどこかで課題があった場合に、それに対する具体例の提案なんかもあると思います。そのことは、ひいてはですね、ムスリム社会、ムスリム・コミュニティの将来を考えることにもなるかと思います。

それともうひとつ、外側から見たこういったお話をさせていただいた者としてではなく、こういった熱い議論を通じまして、生のイスラームの情報を外側に発信することにもなるのではないかなという風に考えています。これが今回の代表者会議の側の話なんですけど、最後に書いた、生活に根差した生のイスラームへの視座をとというのはですね、是非日本社会の側をお願いしたいことです。今回こうやって発信される情報というものから、よりリアリティのあるイスラームに親しみを持っていただきたいなど、この会議がそのきっかけになればいいなというふうに思っております。ちょっと駆け足でお話しましたが、私の基調講演を終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

小島：

時間がないので早速次の基調講演の方へ移りたいと思います。金城学院大学講師のシェール・アフザル・レカさんによる「ムスリムコミュニティからの眺望」といことでお願いします。

レカさん：

まずはじめに、店田先生の研究室のスタッフの皆さんと早稲田大学全体に、このような機

会を与えて頂き感謝します。岡井さんの発表のような立派な発表ではないですが、私の発表はただ一人のムスリムとして、どのような難しさや問題を感じているかということについて、少しまとめて話をしようと思っています。中身は日本に住むムスリムのコミュニティとその問題点について少しまとめました。ムスリムとの付き合いという点に関しては、日本より、アジアそしてヨーロッパの方が、少し歴史がありまして、かなり日本と状況が違いますので、ヨーロッパとほかのアジアの国々に学ぶべきところはたくさんあります。

主な問題点は、日本に住むムスリムの人たちが、どのような状況にあるかということです。まずは教育が挙げられます。日本に住むムスリムの人たちの教育です。その教育は2つに分けることができます。ひとつは大人の教育、もうひとつは子どもたちの教育です。大人の教育においては、日本語の理解というのが1番重要だと思います。日本語を理解することができれば、当然、地域の住民の方々と話ができますし、うまく付き合うことができますと思います。もうひとつは第3世代と第2世代の子どもたちが生まれて、日本で生活しているわけですが、その教育は学校にいろいろ問題があつて、例えば食事の問題だとか、それからムスリムとして他の学生がそれを受け入れるかどうか、あるいは日本の社会がその学生たちを受け入れるかどうか。これが1つ目の問題です。

2つ目の問題は、食文化の問題です。ご存じのように、ムスリムは豚肉や他の宗教の方が屠殺した肉を口にしないと、あるいは酒を飲まないとか、他にもいけないものがたくさんあります。とにかく、食文化についての違いが問題になっています。

3番目の問題は、岡井さんの発表にもありましたように、墓地の問題なのですが、これも知っている方がたくさんいると思います。日本と違い、また仏教や他の宗教と違ひまして、イスラームの場合は亡くなった後に、遺体を土に埋葬するということになります。これも大きな問題で、私達も名古屋とか東海地区で結構頑張つて、あらゆるところに、山を探したりして、買ったりする段階まで進むのですが、残念ながら市や県は許しても、地域の住民は絶対それには反対するということになってしまいます。これもムスリムの人たちが抱えている大きな問題なのです。

4番目は、あまりこういう機会に触れないような問題なのですが、改宗されたムスリムに関する問題です。ムスリムの人たちは、ボーンムスリムという言葉を使いますが、彼らは一人の日本人が改宗してイスラームに入っても、ほったらかしにしてしまうというのが1つの大きな問題であると、私は考えています。以上の問題点について、それからその解決の方法について、私が考えて書きましたので、述べていきたいと思っています。

まず教育の問題なのですが、日本語が理解できないと地域の人々との付き合いが非常に難しくなります。自分の文化を紹介できない、当然その日本人は外国人の文化を理解できない、ということが現状なのです。つまり日本語ができないと地域の住民との付き合いが非常に難しい。そうすると、逆にイスラームに対する理解力が低くなってしまふ。今、岡井さんの発表にありましたように、情報不足が大きな問題の1つだと思います。つまりイスラームに関して情報が非常に少ない。ですから、日本に住むムスリムの人たちが、日本



語の理解力が高いほど、地域の住民との付き合いが増え、地域の住民のイスラームに対する理解力も高まるのではないかと思います。これがひとつ目ですが、日本語の勉強が一番重要だと思います。

それから次は子どもたちの教育ですが、子供たちの教育も同じように、学校の給食などが一番大きな問題です。それからイスラームの教育は、学校では全く行われたい。日本はご存じのように政教分離の国ですから、宗教を学校で教えたりすることが非常に難しい、というより不可能です。ですから解決する方法は、ちょうど日本で塾のようなものをつくることだと思います。学校が終わってから、各地域のムスリムの社会が、そのムスリムの子供たちにイスラームの勉強とか、イスラームの教を子供たちに教えるためには、塾という形でイスラームを子どもたちに教えるべきだと思います。ただし、そこには大きな問題があります。日本政府だとか治安の方々の中には、他のムスリムの国々、例えば具体的に言いますとアフガニスタンやパキスタン、インド、バングラデシュのように塾がマドラサ化されるようなことを心配している方もたくさんいらっしゃるのです。それで、イスラームの塾を作ったら、おそらく子どもたちが、多少イスラームに関する勉強をできるのではないか、これが、私が考えている方法です。学校ではイスラームに関する勉強は、日本では許されておらず、まず不可能です。

2番目の問題は、食文化や食べ物の問題なのですが、ヨーロッパと違い、日本はイスラームの歴史がかなり浅いものですから、当然イスラームに関して、なぜ豚肉を食べないか、なぜ酒が入った食べ物を食べないか、やはりイスラームに関して理解力が不足しているということが大きな問題です。たとえば私達も、お昼ごはんや晩御飯を食べる時に、いろんなレストランを周って純和食のようなレストランがないかということ結構探しますが、なかなか見つけることができず、結局コンビニのおにぎりだけで我慢して、1日を過ごすことがよくあります。あるいはハラルのレストランがあっても、例えばインド系のレストランしか現在日本にはなく、それが合う人もいれば、インド料理が食べれない人も結構たくさんいますから、口に合わない。ですから、ムスリムの人たちにとって、ボーンムスリムにしてもあるいは改宗されたムスリムにしても、これが大きな問題です。とくに日本人の場合は、その酒だとか豚肉といった食べ物は日本の食文化ですから、その改宗されたムスリムの人たちが、非常に大きな問題を抱えている。外ではおにぎりでも我慢できるのですが、その家に帰ったら、親が作ったとんかつやラーメンを、当然断ることはできません。なぜかというのは、内緒に、あるいは親に許されてムスリムになった人たちも結局自分の家庭の中に、大きな迷惑をかけて生活しているわけですから。これも大きな問題です。こういう問題についても皆さん、私も含めて、考えるべきだと思います。

次は墓地の問題です。さっきの岡井さんの発表にもありましたように、岐阜の地域では、特にイスラームのイメージはあまりいいイメージではないようです。とくにマスメディアを通じて得た情報しかありませんし、それも **Negative Publicity** がものすごく多いです。イスラームというのはテロリズムと同じようにパックして紹介されているような状況です

から、そうすると、そのイスラームといえはすぐに、テロをイメージが浮かんでしまう。とくに 2000 年代に入ってから、イスラームのイメージは以前よりも悪くなってしまいました。同時多発テロ、それからアフガニスタン、イラクの戦争が主な原因だと思います。結局イスラームと言えば戦争だとかテロだとか、そういうイメージしか与えていない状況がある。つまり、国際のマスメディアをはじめ、日本のマスメディアにおいても、イスラームはたたかれているような状況です。つまり間違っただ情報や誤った情報がかなり多いということが現状です。マスメディアが非常に悪いイメージを与えているのが現状ですから、もうひとつのそれを解決する方法は、私は専門が社会学ではないですから、生物学的に考えてしまえばあたりまえのようなものなのですが、おそらく皆さんの耳には漫才かあるいはジョークのような話に聞こえるかもしれません。生物の社会を見ますと、例えば昆虫にしても、あるいは植物にしても、あるいは他の動物にしても、自分が住んでいる場所や環境に、自分を合わせるようにしているわけです。例えば、昆虫は鳥に食べられないように、自分の色を木の色と同じように、あるいは葉の色と同じように変えてしまう。この法則は海の生物でも全く同じです。当然人類も同じように生物ですから、その住む社会に自分を合わせなければならないということが私の考え方なのです。つまり私達はマイノリティー、よその国から日本に来て暮らしているわけですから、できるだけ自分を日本の社会に合うような格好にしなければならない。別にイスラームには、コーランには、鬚は 60 センチだとか 50 センチでなければならないということはどこにも書いていません。あるいはハディースにもそういう教えはないです。テロ直前に名古屋でみた光景なのですが、マスメディアがネガティブプロパガンダをしている最中に、名古屋モスクに集まるムスリムの人たちは、その姿を見てみますと、オサマ・ビンラディンに負けないぐらい長い鬚を生やして礼拝に来ている。当然、地域の人たちから見れば、昨日テレビでみたオサマ・ビンラディンと同じような姿の人が自分の地域に住んでいる、自分の隣にも住んでいると思ってしまう。つまり、悪いイメージを余計に悪くするようなものです。当然日本人の場合は、日本の社会の場合は、イスラームについて情報が少ないですし、それから間違っただ情報が多いですから、私達も余計に自分の恰好や姿を少し変えなければならない、いいイメージを与えなければならない、ということが私の考え方なのです。つまり生物学的に、カモフラージュというか、そういう環境に自分を合わせるということが、正しい方法ではないかと思いません。

それから次は、ムスリムの人たちは日本人に認めてもらうように、自分たちの行いを良くしなければならないということです。例えば日本は、台風や地震のような災害が多い国ですから、そういう災害が起きた場合には、一番最初に助けの手を差し伸べるのがムスリムの人たちでなければならないと思います。つまりメディアが悪くしたイスラームのイメージをムスリムの人たちは自分の手で良くしなければならない。つまり災害のある時に、ムスリムの人たちは、よその者よりも、日本人よりも、先にその地域に飛んで、そこで出来る限りの助けやボランティアをしなければならない、日本人の心を奪うような行為をし

なければならないというのが私の考え方です。

それから日本では自殺が大きな問題となっています。年間3万人以上の方が自殺するという事です。イスラームではムスリムは自殺を禁じられています。つまり、神様に与えられた命を自分で断つというのは、いけないことだということをムスリムの人たちはよく分かっている。こういうことに関して、北海道から沖縄にまで住んでいるムスリムの人たちは、地域の自殺の問題に関して、いろんな方法を考えて、できるだけ、一人でも二人でも日本人の方々を、自殺から守るようにしなければならないというのが私の考えです。とにかく私が言いたいのは、マスメディアと争うように日本人の心を奪って、日本人と仲良くするような方法を我々は考えなければならないということなのです。ですから、地域の住民と付き合いをよくする、それがこの国のイスラームのためによい方法ではないか、それが私の考えです。

それから各地域に、日本では、行事の多い国ですから、祭りなどがたくさんありますが、ムスリムの人たちは、これは仏教のものでありますから、あるいは神道のものでありますから、我々はそういうところに行ってはいけない、そうではなく、多少ディスカウントして、多少自分たちも下りて、日本人の地域の皆さんと、同じような行事に参加したり、彼らの文化を理解して、自分たちの文化を彼らに紹介するようなかたちで、できるだけ仲良くする、ムスリムのコミュニティに閉じこもったままではいけないと思います。

それから次は、日本の文化とか習慣とかも、ムスリムの人たちは理解しなければならないということなのです。日本にはいろんな文化・習慣がありますから、そういうことを理解して、自分たちのものも理解してもらうように、ギブ&テイクのようなかたちにしてはどうでしょうか。つまり、イスラームの文化を知ってもらうために、日本の文化を理解しなければならないということなのです。

最後は、改宗されたムスリムの方々の問題なのですが、ボーンムスリムの方々、例えば私たちはよその国から来た、ムスリムの親から生まれた人間が多いのですが、その人たちは、一人の日本人がムスリムになった時、非常に喜ぶのですが、喜ぶのがその時だけで終わってしまう。その先、ムスリムになった方の面倒をどうやってみるか、教育をどうやってするか、彼らが自分の家庭の中でどれだけの大きな問題を抱えているか、ということを私達は全く触れずに、そのままほったらかしにするケースがものすごく多いです。それから、日本ではムスリムになる方々は、ほとんどムスリムの方と結婚するというかたちでムスリムになるのがほとんどです。80%や90%はそうなのですが、そういう方々は、自分で勉強しなさいと言われるのですが、自分で勉強しようにも、その勉強の仕方がわかりません。ですから、彼女たち、あるいは彼らの教育に関して、イスラームの教えや、これからどれだけ難しい生活を迎えるかなど、そういうことに関して、まじめに考えなければならないということなのです。

それからムスリムになった方はご存じのように、孤立してしまうケースが多いです。自分の親からも捨てられるような形になり、社会に食べ物やその他の習慣で、他の一般的な

日本人と全く違うような行動をするので、周りの人から違う目で見られるケースが多い。この問題についても、(外国人の) ムスリムの人たちもそうですが、日本人のムスリムの方々も考えなければならないと思います。

私の話はだいたいこのぐらいです。あとの事は、質問の時に、何か不明な点がありましたら、また説明したいと思います。とりあえず時間の問題もありますから、私の話はこれぐらいで終わらせて頂きたいと思います。

小島：

どうもありがとうございました。これからテーマセッションに入るのですが、その前に店田の方から事務連絡を。

店田：

今日は多くの方にご参加頂きありがとうございます。これからテーマセッションに入りますが、一応テーマセッションの資料は入口の所に並べてあります。ただ、早い時間に来た方はお手元に行っていない可能性がありますので、もしお持ちでなかったら、あちらの方からお取りください。

それから少し、時間的には早い進行になっていますので、今のお二人の方に簡単な質問がございましたら、お受けします。

岡井さん、レカさんの発表に、簡単な質問が、もしございましたら、今お受けしたと思いますが。

会場：

〇〇と申します。基本的な質問なのですが、調査について、地域を岐阜に限定した理由とあと調査の内容についてなのですが、情報について比較されたと思うんですけども、調査に属性、例えば年代、職業、男女、というようなことは含まれてないのでしょうか。というのは、カトリック教会においても、外国人が日本人より圧倒的に多い、半分以上になっています。そういうコミュニティができていて、私も実は大学院で調査したのですが、年代、職業、男女、そういうものが非常に影響を及ぼしていたので、そのあたりについて伺いたいと思いました。

岡井：

ご質問ありがとうございます。まず最初のご質問、なぜ岐阜に限定したのかということですが、先ほど申し上げました通り、モスク及びコミュニティがそこにあるということが1つ、そしてある程度地区を限定することで、母集団を推定しやすくするというのもうひとつの理由です。後は岐阜市が多文化共生に関する施策について策定を目指しておりまして、そうしたこととの兼ね合いから、調査地域を選定致しました。

属性に関しましては、今回時間の都合上申し上げることができなかつたのですが、男女の比率が 50.1%と 48.1%で、無回答が 1.7%でした。平均年齢は 48.1 歳です。それぞれの地区ごとに、地区の人口比率に基づきまして、地区での調査票の集計を行っています。クロス集計に関しましては、特に男女において、有意な差が、かなり特徴的にみられるということはありませんでした。ただ今回行ったグループ化の中では、そのグループの中で、例えば平和寛容型だと女性が多いとか、そういったグループと属性のクロスの中で、特徴が見出されるということがあります。今回省略してしまったのでそこまで申し上げることができなかつたのですが、そういう状況です。

会場：

人口として、日本人のムスリムと外国人のムスリムがどれくらいであるか教えてくださいませんか。

小島：

いろいろな分析があるのですが、外国人のムスリムの方は今 10 万を切っているのではないかと思います。1990 年頃は 10 万をかなり超えていたと思います。それから日本人のムスリムについては、私は正確に推計していませんが…

店田：私の方で推計したところだと、10 万人を少し超えるぐらいの外国人のムスリムの方と、日本人の配偶者になっている方がいらっしゃるの、そういうところから推計して、それから今ここへいらっしゃるような男性の一般の日本人のムスリムの方も含めて、日本人は 1 万人ということで、合わせると 11 万から 12 万人ぐらいが、日本にいるムスリムではないかと推計しています。

質問はまだあるかと思いますが、時間の方がありますので、ここからはムハンマド・アンワル・メイモンさんに総合司会をお願いして、セッションの方に移っていきたいと思います。それではメイモンさんよろしくお願いたします。

## セッション I 「ムスリム・コミュニティの課題」

メイモン：

みなさんこんにちは。ただいま紹介に預かりましたムハンマド・アンワルと申します。これからパネルディスカッションの総合司会をさせていただきたいと思います。まずは、早稲田大学の方々に御礼を申し上げたいと思います。こういった機会は地域のイスラームコミュニティと一般の日本人の間の相互理解、お互いに共生社会を目指すという面では、非常に大事だと私は思っております。是非こういう会議などを通して、日本人の方々にもイスラームやムスリムについての理解を、そしてもちろんイスラームの方々が日本社会についての理解を深めていただければと思います。

これからのパネルディスカッションですが、こちらのピンクのレジュメにありますように、3つのセッションがあります。まず第1セッションは昼休憩の前までですが、セッション1は「ムスリム・コミュニティの課題」という題名になっています。昼休みを挟んで、第2セッションが「日本におけるイスラーム」、第3セッションが「マスジド・ネットワーク」についてです。パネルディスカッションに参加する方々は、北海道から四国までの方々なのですが、ちょっと紹介させていただきます。まず、徳島マスジドの代表であるオバリ・アブドゥル・カーディルさん、それから日本イスラーム文化センター大塚マスジドのクレイシ・ハールーンさん、先程のスピーチもしていただいた、金城学院大学講師のシェル・アフザル・レカさん、北海道イスラミックソサイエティーの墓地管理者である須見啓司さん、それから遅れて来られる予定ということですが、日本ムスリム協会理事の永井さん、新居浜マスジドの代表である浜中彰スレイマンさん、日本ムスリム協会の元会長である樋口美作さん、そして最後に日本ムスリム協会の会員であって、イスラミック・サークル・オブ・ジャパンを代表していただく、アハマド前野直樹さん。この方々で、今日のパネルディスカッションを行いたいと思います。

プログラムとしては各セッションが1時間半、その中で最初の20分から30分でひとりの方に問題提起をしていただいて、それについて他の方々が自分の意見を述べるという形で進めていきます。時間がある場合には各セッションの後の質問も可能ではあるのですが、基本的には3つのセッションが終わって、最後の30分にフロアからの質問を受けるという形にさせていただきたいと思います。

それでは第1セッションの方に入りたいと思います。「ムスリム・コミュニティの課題」クレイシ・ハールーンさん、問題提起をお願い致します。

ハールーン：

みなさん、こんにちは。イスラームではモスクは礼拝の場所だけでなく、生活の中心になります。自己紹介になりますが、私は1991年に留学生として日本に来た時に、日本には

神戸モスクしかありませんでした。その当時、東京ジャーミーもまだできておらず、神戸モスクだけで、そういう意味では、その時の課題としては、モスクの建設が一番の課題でした。また、その当時で言えば、ハラールフードの問題であるとか、モスクがなかったのでムスリムのネットワークもとても弱かった。しかし、この20年間で、アルハムドリッラー、100軒ぐらいのモスク、それからムサッラーができました。それはたった20年ということを見ると、かなりスピーディーだと思います。ただし、まだまだもっとムスリムたちは頑張らないといけないですね。

今現在のムスリムたちの課題としては、3つの事が考えられると思います。

1つ目は日本人のイスラーム理解です。これは1番残念なことだと思います。日本とイスラームのすばらしい歴史、戦争のない歴史、全然敵対したことがないのですが、情報メディアの影響、日本のメディアは西側の影響を強く受けていますので、それによってイスラームはテロ、戒律の厳しい宗教、女性差別、非科学的など、そういうイメージを与えられています。

まずテロについてですけれども、こちらにいる方にイスラームの意味から説明すると、多くの人をご存知かと思いますが、イスラームには2つの大きな意味があります。1つ目の意味はアッラーに従って生活すること、もうひとつは平和、平安という意味です。聖典クルアーンでもアッラーがおっしゃっているのですが、「一人の人間を殺すことは全人類を殺すのと同じ罪である。一人の人間の命を救ったことは、全人類の命を救ったのと同じ事である」。それがイスラームの根本的な考えです。それから最後の預言者様の教えには、「戦争の時でも、子どもや女性、年寄りの人、弱い人たちを殺してはいけない。それから果物のなる木を切ってはいけない」というものもあります。それから、例えば9.11の後、欧米に比べるとわずかですが、メディアの歪んだ情報がいろいろと悪い影響を与えています。例えば、大塚マスジドでは近所の人にある時、あなたたちはモスクにどれくらい武器を持っているのか、と聞かれたこともあります。また、私の近所の何年も仲良くしていた八百屋さんに、9.11の次の日に行った時、ちょうど犬がいて吠えんたんですね。そうすると「お前の髭を見て吠えている」と言われました。(9.11以前と)全然違うんですね。そのように、欧米に比べると少ないのですが、日本人のムスリマがスカーフを被っていて、ちょっと暴力を受けたとか、モスクへの嫌がらせなどが今も時々あります。残念ながら9.11の影響によって、そういうことがあります。

それから戒律が厳しいということに関してですが、日本人は何を食べてもいい、つまりこれを食べてはいけないという決まりはないんですね。しかし、我々ムスリムから言えば、食べていいもの、ハラールなもの、食べてはいけない、ハラームなものがあります。もちろん食べてはいけないものには、それぞれその意味もあると思いますが、例え意味がなくても、神様の命令に従うこと、その従うことによって、幸せ、楽しさを感じることができるんですね。それは信仰がないと感じることは難しいかもしれないですが、そういう幸せがあります。例えば、学校、私の子どもが通っている学校もそうですけど、学校の

先生は、これを食べてはいけないということによって、子どもがかわいそうという印象を持ってしまう。我々は、かわいそうではなく、それは神様の命令で、それに従う喜びを教えたいのに、かわいそうと言われてしまう。例えば私の子どもはお肉も食べていますし、野菜もなんでも食べているのですが、ある日学校で集中しない時は、先生は「栄養足りないからあなたの子どもは集中しない」と全く意味が無いことを言うんですね。そういうことを思っているから、またそういう目で見ているから、そう言われるんですね。戒律が厳しいと言われていますが、和食は、お酒以外は何でも我々は食べられます。

それからイスラームについては女性差別がよく言われています。女性は体を隠さないといけない、それからスカーフをしないといけない。それはイスラームに改宗した女性から見れば、例えば家内の例ですけれども、男性の目から解放され、自由に感じているんですね。今現在の日本ではそういうことはないですが、昔、古い日本では女性は子どもの時、父親に従う、結婚したら夫に従う、年をとったら子どもに従う、という話を聞いたことがあります。イスラームでは、ある弟子が預言者様に「私にとって一番大切な人は誰ですか」と聞いた時に、預言者様は「あなたのお母さんです」と答えました。「その次は誰ですか」と聞くと、「あなたのお母さんです」答えました。さらに「その次は誰ですか」聞くと「あなたのお母さんです」と言われました。また聖典クルアーンにも「親に対して大きい声を出してはいけないし、従うべきだ」書いてあります。我々にとって、失礼な言い方かもしれないけれど、西側の社会では、日本もそうですが、女性の事をおもちゃにしているんですね。そういう考え方もあります。また日本でも、昔、女性は財産を貰えなかったこともあるのですが、イスラームでは1400年前から、ちゃんと男性も女性も財産をもらうという決まりがあります。

こういったテロ、戒律が厳しい、女性差別といったイメージが残念ながら、日本の社会ではあります。また先程の岡井さんの調査にあるように、そういうイメージがあるのですが、それは全部メディアの責任ではなく、私はムスリム側に努力が足りないところがあると思うんですね。いろんなモスクで、いろんな活動をしています。例えば大塚マシドでは、地域のお祭りに参加したり、いろんな国の料理の紹介や、そういったイベントを開いてモスクに近所の人達を呼んだり、そういったイベントやっているんですけども、まだまだ努力が足りないのではないかと思います。

それから次の大きな課題は、次世代のムスリムの教育についてです。これは本当に頭が痛いぐらいの課題です。我々が50年前の日本にいれば、日本の学校、日本の社会について、そんなに心配はなかったのですが、今の社会には、もちろんいいところもたくさんあるのですが、悪い影響、それから学校の悪い影響もたくさんあります。現状としては、ムスリム学校はありません。大塚マシドがはじめてのイスラームの幼稚園をつくり、ひとつは幼稚園ができたのですが、小学校以上の学校はまだできていません。そのため、ムスリムの子どもたちは普通の日本の学校に通わなければならない。元々、文化の違いもありますけれども、それプラス、今の学校の悪い影響が課題になっています。もちろん、日本の学



校でもいいことをたくさん教えているはずですが、例えば、親を尊敬すること、先生を尊敬すること、近所の人を尊敬すること。でも我々から見ると、そういったマナーが足りないんですね。イスラームの学校がないので、仕方なく、今は近くの学校に多くの子どもが通っています。

それではなぜ学校ができないかという、ひとつ目の要素としてはムスリムがまとまって住んでいないことがあります。みんなバラバラに住んでいます。それがひとつの課題です。やっとモスクの近くにムスリムたちが引っ越して住むようになってきましたが、まだまだ足りません。

それから、もう 1 つの要素としては、人材不足があります。例えばパキスタン人の例で言えば、よく勉強した人たちはアメリカや欧米に行きます。日本に勉強のために来る人は少ないです。そういう人材不足も学校ができない理由のひとつです。また子どもの教育が専門の先生もいないんですね。

またモスクでは、まず子どもの遊ぶ場所が必要です。クルアーンを教える場所はありませんが、クルアーンを教えた後は早く帰らなさいと言われてしまう。クルアーンの勉強も大切ですけれど、ムスリムの子ども同士のコミュニケーションも大切ですね。それがまだまだ足りないですね。

最後の大きな課題はお墓についてです。ムスリムの人口が増えており、お墓が必要になっています。現在、山梨県の塩山というところのお墓を使っているのですが、足りなくなっており、そのうちまた別の場所を手配しなければなりません。現在、日本イスラーム文化センターの名義で、足利にお墓のための土地を買ったのですが、なかなか許可が下りません。最初は、近所の人たちも問題ないということで、同意のサインをもらったのですが、そのうち一人二人が反対すると、多くの人反対するようになってしまいました。役所にも、普通のお墓を作るために必要なこと以上を用意するように言われ、今度用意してみると、反対だということになりました。この間、足利の自治会の人たちから反対署名名簿を頂いたのですが、それによると、反対の理由は「閉鎖的な考え方を持っている」「異文化・異宗教に対して、理解が薄い」ため、そこにお墓をつくると、精神的に害があるということでした。

以上のように、大きく言えば 3 つの大きな課題があります。これからディスカッションの時間になりますけれども、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。ありがとうございました。

メイモン：

クレイシさん、ありがとうございます。日本にいるムスリムの人たちが、今どういう課題を持っているかについてお話してくださいました。主に 3 つのポイントを挙げられたのですが、日本人のイスラーム理解が足りないことにより誤解が起きてしまう、特に外国人ムスリムの文化に対する理解も足りないし、イスラームそのものについても、誤ったイメー

ジを持っている、ということが 1 つのメインポイントですね。これから日本人とうまくこの社会に住むには、相互理解が必要だということが 1 つの課題です。

もう 1 つの課題は、次世代の教育ということでした。ムスリムの子どもたちの学校教育をどうするのか、なぜ今までできていないのかという課題が出されました。

3 番目は、人間が暮らしていると当然人間が死ぬわけですから、その死体を埋葬するためのお墓の問題です。それも 1 つ目の課題に関係しているんですが、相互理解が足りないから、イスラームのお墓に反対されるとか、私は相互理解の問題があると思います。

こういう 3 つのポイントをクレシさんが挙げたのですが、これについてこれからパネラーの皆さんの意見を頂きたいと思います。

ではまず浜中さんの方からお願いします。

浜中：

墓地のことにに関して、最初のレカさんのスピーチの中で、岐阜の方で行政が賛成、許可をしたけれども、住民の反対にあっているということでしたが、具体的にどのような感じなのか説明していただきたいのと、それと札幌マスジドの方は、墓地を確保しているということですが、どんな状況なのかということを知見さんにお伺いしたいと思います。大塚マスジドは足利の方でかなりてこずっているようですが、宜しくお願いします。

メイモン：

浜中さんは意見というより、まずそのために情報が必要ということでの質問ですね。

浜中：

一応四国の方でも、高松市に少し場所だけは確保している、という情報は聞いたのですが、他の地域でどこまで進んでいるかによって、ひょっとしたら四国でも頑張らなければならいかと思うので、参考にさせていただきたいのですが。

メイモン：

ではレカさん、須見さん、少しそれぞれの地域の状況を話して頂けますか。

レカ：

私は直接その墓地の問題に関して担当ではなく、クレシさんという方が岐阜モスクと名古屋モスクの担当なのですが、残念ながら彼は今年参加できませんでした。聞いている話によりますと、岐阜では結構いいところまで進んだのですが、ただし住民の反対があり、地主、土地を売る方が自分の土地を売らなくなってしまって、話がそこで止まってしまい、今は全くゼロの状況、それ以上は全く進んでいません。主な問題は行政、つまり県や市ではなく、地域の住民が結局墓地には反対だということです。条件が非常に難しいです。そ

れは三重県と岐阜県両方で、いろいろ探しているのですが、なかなかうまくいかないという状況です。

メイモン：

ありがとうございました。須見さんは北海道にもうすでに墓地あるということですが、それについて少しお話いただけますか。

須見：

北海道の小樽の隣にある余市市というところに、余市霊園というところがありまして、ここは私達が買う前から元々土葬の許可が下りている霊園でした。元々土葬許可が得られたというのは、東京の方にあるキリスト教系のとある団体の方々が努力して、札幌の信者の方が亡くなった時に、なんとか土葬を北海道でしたいということで、その方々が一生懸命いろんな働きかけをして、余市町、北海道を動かし、周辺住民とも理解を深めて、土葬許可を取ったと聞いております。それでその場所を、私たちもお裾わけというか、販売していますので購入して、購入して4年ほど経つのですが、何とかトラブルもなく上手く運営しているのが現状です。

メイモン：

ということですね。北海道はうまくいっているが、他のところは住民の反対があるということです。それは墓地に関してなんですけど、まあ今日のセッションは墓地を含めて3つの課題についての話ということですが。樋口先生が手を挙げたようなので、是非ご意見ください。

樋口：

墓地のことが出ていますが、日本穆斯林協会が今、塩山市に認可された墓地を持っています。確かにみなさんが苦勞されているように、穆斯林協会もこの話は1961年からはじめました。そして規模は3450坪、山肌なのですが、11400平方メートルあるんですね。ここに関わる、地域住民の方が11人おられました。結論を申しますと、最終的にこの墓地を購入して、山梨県から墓地の認可を受けたのが1987年なんですね。このころは日本人穆斯林が少なかったから、そんな状況で耐えてこられたのですが、そのように時間がかかる。その間に日本人穆斯林として、現地の人達との話し合い、私も地権者の人たちとの話し合いに参加したことがありますけど、とにかく誠意をつくして我々の考えをお話して、理解してもらおう。そしてもう1つ大事なことは、その地域住民を説得できるような人がいるかどうか。幸い、ご存じのように、あそこには文殊院という曹洞宗のお寺があるのですが、その住職が非常に理解を示してくださいまして、地域住民にも働きかけた。はっきり言って私達も地域住民の地主の方々には手ぶらではないですね。日本的な習慣に従って、謝礼も

しました。そういった努力をして、ようやく土地を確保した。では土地を確保したら埋葬できるかという、そうではないんですね。まず、住民の理解を得たら、あとは行政の認可を得るだけです。ですから山梨県に墓地設定の申請をする。そこで必要なのが、宗教法人を持っているかどうかなんです。ですから北海道の方はどうか分かりませんが、今墓地を確保しようとしているところ、ハールーンさんがやられているところはもう宗教法人をお持ちですからいいと思いますが。宗教法人をとるためには、それなりの礼拝堂がないといけない。この辺が私ども日本ムスリム協会の場合は苦勞したわけですね、礼拝堂がないですから。ですから宗教法人を取るのにはなかなか難しかったんですが、これを東京都の方といろいろ折衝して、認可を受けたという経緯があります。そのように、ご参考になればと思いますが、とにかく誠意を持って説得して、地域住民の理解を得れば、行政は、地域住民が OK すれば、だいたい OK するわけです。だからその地域にムスリムが大勢住んでいけば、あまり問題にならないのです。私達がよく言われたのが「だって山梨県にはムスリムいなじゃないですか」とうことです。「なんでここに遺体を持ってくるのですか」と。悪く言うと、粗大ごみとかそういった物を持ってくるのと同じ考えをするんですね。ですから、そういう人たちを説得するのは大変なんです。それで記録によりますと、当初はあそこを誰が見ても美しいイスラーム霊園にすると。ですからあそこには桜が 100 本植えられているんです。そういう風に、地元住民のイメージを壊さないために、あそこを桜が咲いたらみんな訪ねて来られるような霊園にしますから何とかお願いしますと。そういう風な、所謂プレゼンテーション、ただ死体を埋めるのでない、地域住民に「国際都市にしましょう」と。ひとつのイメージ作りですね、こういう努力をしなければならぬと思います。そうしないと地域住民にはなかなか理解してもらえないですね。ご参考になればと思っています。

それでもう 1 つはみなさんに、今本当に足りないです。ですから私達は、全体の土地の約 60%を造成しているのですが、最初造成した時には、88年の時点で約 600 万円かかっています。ここで 100 人ぐらい埋葬して一杯になって、次の第 2 段階の墓地設定で、1500 万円かかっている。そのように日本の墓地は、管理するのに金がかかるということです。しかし利用者にしてみればただで埋めると。「イスラームがなんで金を取るんだ」そういう批判をずいぶん受けました。だから今は、ちゃんと日本ムスリム協会で規則をつくって、永代使用料ですね、日本の他の宗教に比べれば安いのですが、会員と非会員の区別をして、そこを利用する方には土地使用料として、お金をいただいております。しかし当初は「なんでイスラームが同胞を埋葬するのに金を取るんだ」ということでずいぶん我々は責められましたね。そういう利用する方も、非常に理解が必要だということです。また何か情報があればお話ししますけれども、ご参考になればと思います。

それともうひとつ墓地に関係することで申し上げますと、将来的にどうするかということです。先ほどムスリム人口について質問がありましたがけれども、これについても 2 世が生きているわけですね。2 世を入れるんですか、入れないんですかと。そういう数え方もあ

と思うんですね。2世を入れれば、1万人以上になるのではないかと私は思います。その辺ところをどうするか。日本人ムスリムは何人か。外国人ムスリムは入国管理の統計がありますから、10万人というのはかなり正確にあたっているとおもいます。日本人ムスリムについては1万人というのは全く推測にすぎません。

お墓は、土地の提供もそうですが、今の現実はずっと長く続くと思います。幸いムスリムは墓地の再生、再利用が認められています。これが1つの救いの道なんですね。何年か経ったら掘り起こしてそこに埋めてもいいということですが、もしそういう風な再利用をするならば、墓地を設定する時点で、それをイメージした墓地の設定の仕方にしないといけないと思います。日本ムスリム協会の限られた墓地の中で、今やっている方式は問題があると、私は提起しているのですが、今は個人個人で全く別のところに埋めていっています。ですから5人家族だったら5つ造らないといけない。これでいいのだろうか。これが問題なのです。少なくとも私は「夫婦は一緒に入った方ではないか」「子どもは一緒に入った方がいいのではないか」と。そうするのであれば、今のうちから、私の家では私が先に死ぬでしょうと。その後ワイフにお前が入りなさいと言ってある。子どもたちにも全部言ってありますけれども、それならば、私を埋める時にそういった埋め方をしないといけないですね。今の状況だと、一人埋めてしまうと、そこに機械が入らないんですね、じゃあ人で掘らなければならない。では掘った土をどこにやるのか。いろいろと問題がある。ですからこれから墓地を設置する各グループについて、将来的に限られた土地を有効利用して、イスラームの言う再利用ができる、そのためにはどうするか。この辺を考えてやればいいと思います。ご参考までにどうぞ。

メイモン：

はい。ありがとうございます。非常に参考になる情報だと思います。もちろん確保もいろいろ大変だし、手続きの問題がある、住民の説得の問題がある。それから確保できたとしたらお金の問題、再利用の問題もあるということです。浜中さんいかがですか、二人の答えと樋口さんの話を聞いて、ご意見はありますか。

浜中：

非常に参考になりました。この数で行けば、各地方にすべてに墓地をつくらないと、間に合わないと思いますので、こういう意見を参考にしていきたいと思います。それと、やはり墓地を買うときには、かなり日本人のムスリムが活躍しなければならないのではと思います。役所との交渉や、地域住民の方を説得するとか、やはり今の現状では、日本人ムスリムが活躍してないのではと思い、反省しております。

メイモン：

墓地もそうなのですが、ハールーン・クレイシさんが今挙げた、日本のムスリム・コミュニ

ニティの課題について、お二人はまだお話していただけていないので、前野さんのほうから、今日本のムスリム・コミュニティにどういう課題があるとお考えでしょうか。

前野：

セッション 2 で私がさせていただくプレゼンとダブってくるかもしれませんが、少しだけですが、私が強く課題意識として抱えているのは、教育です。お墓の問題も、足元の問題として存在しているのは、重々承知しておりますし、無視はできないと思っておりますけれども、言葉が悪いかもしれませんが、後ろ向きな課題意識が、次の世代の人に繋いでいけなければ、次世代の人たちにムスリムとして育ててもらえなければ、このお墓の問題が 10 年、20 年、30 年かかるものであったとしても、繋いでいって、私たちのあとに頑張ってくれる人たちがいないことになってしまいますので、そういった意味でも、お墓の問題を同時進行で進めつつ、やはり教育問題に一番集中的に取り組んでいきたいと私自身は思っております。

メイモン：

ありがとうございます。墓地の問題も大事ですが、やはり次世代の教育の方が問題だというお考えですね。オバリさんはいかがでしょう。日本のコミュニティの課題についてのご意見でも、ハールーンさんが仰ったことに対する反論でも、もちろん OK ですが。

オバリ：

ちょうど前野さんが言った通り、先ほど私たちが聞いた課題は、優先順位をつけると良いかもしれません。今一番解決しなければならない課題は、教育の問題だと思います。墓地の問題も、非常に大事ですが、少し時間がかかりそうです。手続きもありますし、近隣住民に理解してもらい、許可を得るには時間がかかると思います。今は教育の問題です。第 2 世代が育ってきています。緊急に解決策を考える必要があります。日々、子どもたちの考え、生活の仕方は変わっています。教育の問題が一番かと思えます。

メイモン：

先ほどの意見になりますが、優先順位というより、やはり同時進行ですね、確かに墓地の問題は長い時間かかるのですが、先に教育の問題についてムスリム・コミュニティが考えて、墓地がその後だったら、またその後、時間がかかりますから。優先順位をつけるのも大事ですが、やはり人によって、この人たちが教育、この人たちが墓地の問題、この人たちは他のというように、同時進行で良いのではと私は思うのですが。あるいは教育が先という二人の考え方は、それでもいいのですが、では例えば具体的に、ムスリム・コミュニティが次世代の教育のために何をすればよろしいでしょうか。そういったことをもう少しお話して頂きたいと思えます。

前野：

具体的には、レカさんも言われておりましたが、私も私塾の考え方に賛成です。イスラームの伝統的な教育の在り方と言いますのは、やはり師弟間、師について学ぶというものです。最近でこそ、20世紀になってこそ、イスラーム世界にも所謂近代のアカデミックな大学、イスラーム学部、イスラーム大学というのが続々と設立されて、そこで専門的にイスラーム育を受けるといったものも出てきたわけですが、それはそれで良いところも多々あります。しかしながら、その弊害のひとつは師弟間の交流が、薄れてしまうということにありまして、そうすることで、イスラーム本来の大切な、代々世代を超えて受けつがれていくべき、魂、精神の部分の継承というのが、薄れていってしまうのではないかと私は感じております。ですので、同時に、師弟間の関係を密にできる塾ですね、より小規模な形で構わないので、そういった伝統的な教育を提供する機会を模索していくことが必要かと思っております。

メイモン：

はい、わかりました。セッション 2 でも、前野さんが次世代の教育についてお話しされるということですから、ハールーンさんに問題提起の中で、第 1 の課題として出して頂いたことについて、みなさんから意見を頂きたいのですが。一般の日本人とのコミュニケーション、理解不足についてですが、特に日本人側が、メディアによってできたイメージとか、実際のイスラームのとは違う、例えば女性に関してもそうですし、食事に関しても、学校でハラールでないから肉を食べないだけで、他のところでは普通に摂取しているにも関わらず、イメージで栄養不足になるのではないかという、勝手な心配というか、やはりその裏には理解がないということですね。それは日本人の側に問題もあるのですが、ハールーンさんも言われたように、私達ももっと努力する必要がある。それについて、一般の非イスラームの日本人と我々ムスリムがうまくいくには、どういうことが必要かということについてお願いします。

須見：

少し先ほどのことに付けたしながら、お話したいと思えますけれども、余市霊園は先ほどお話した通り、販売している霊園でして、まだいつでも買えます。1区画4平米で、1平米あたり5万円、20万円ですべて買えますので、余市霊園の営業マンではないですが、一応皆さんにお伝えしておきます。

これを買った経緯の中で、僕が当初、札幌にいる日本人ムスリムが平成18年の9月に亡くなって、墓地を捜すために、たどり着いたのが余市霊園なのですが、最初に電話をかけて、相手の余市霊園の最初の言葉が、これは本当の話なのですが、外国人の方ですかと、まず聞かれました。いや日本人ですよと。それで色々とお話をして、うまくいって理解を

いただいて、私達ムスリムのために墓地を売ってくださったのですが、実は過去に、10 数年前に、やはり同じことがあったと聞いております。その時来た外国人のムスリムの方と、いろいろトラブルになって、それ以来、外国人には売らないようにしていたんだという話を墓地の方から聞きました。こういうことから、例の 1 つなのですが、やはり相互理解と言いつつも、言葉の大切さ、僕みたいに諸外国の人と付き合っていて、何となく意識して理解しようという気持ちがある人は別ですけれども、いきなり近所のおばあさんに会って説明しても、やはり日本語が流暢でなかったり、文化などがわかっていなかったら、うまくコミュニケーションがとれない、という問題があるのではないかと思います。次のセッションにも関わってくると思うのですが、私たちも日本人の方に、ムスリムを理解してくれというだけではなく、もっとムスリムの方から努力しなければならないのではないかと考えております。

メイモン：

ひとつ言葉の問題の話も出たのですが、レカさんも最初の話では、外国人側の日本語が足りないとか、それが問題になるという話もあったのですが、でも、日本人だとそういう問題じゃないんですね。それがやっぱり文化の違いという話も出てくるのですが、まあ確かに外国人の前だと、言葉の問題もひとつでてくるでしょうから。レカさんどう思いますか。

レカ：

今、仰った通りに、やはり、言葉が一番重要なものなのではないかと思います。言葉さえ理解できれば、日本人の考え方をよく理解できる。あるいは自分の言いたい事や自分の考え方を日本人に伝えるために、言葉が一番重要だと思います。残念ながら、私自身も非常に後悔していますが、日本には 30 年以上住んでいるのですが、日本語がまだまだ中途半端な状況です。できれば日本語を上手に学んで、それから日本人とよく付き合えば、日本人はヨーロッパの人たちと違って理解力がありますから、話しさえ通じれば、絶対にうまくいくと思います。ですから、教育というのは学校の教育だけではなく、親たちも日本語の勉強をよくした方がいいと思います。例えば、名古屋地域では、ボランティアの方々が、日本語の教育に、結構がんばっているのですが、私の経験として、私はそういう学校に行ったことはないのですが、私もかなり、あるいは他の方々が、ボランティアの日本語教室に顔を出したりするのですが、残念ながら 90%の方が中国人なのです。そういうところに学びに来る人たちは、他のブラジル、あるいはイスラーム諸国の方々は非常に少なく、それで中国人は、その漢字などがよくわかるものですから、進み方が全然違います。それでイスラーム系、アラブ、パキスタンといった地域の方が入りにくいのが現状なのです。結構日本人の奥さんたちが、ボランティアの方々が日本語の教育に結構がんばっているのですが、なかなかイスラームのところまでは、話が届かないです。



メイモン：

はい。前野さんどうぞ。

前野：

教育の考えについての捕捉で恐縮ですが、イスラーム学校の設定、これは議論を呼ぶ話であると思いますが、私自身はここにひとつもないというのは、まだ日本のイスラームといえますか、日本の中でのムスリム・コミュニティというのがまだその段階に達していないからだと思います。ですから、別の言い方をしますと、まだ必要ないと。むしろ、1つ目の課題に関わりますけれども、日本人のイスラーム理解を高める上でも、むしろまだつくってはならないとすら思っています。そうではなくて、各地域に住んでいるムスリム家庭が、それぞれの地域の学校に子どもさん達を通わせて、その中で、地域の先生や、地域の方たちとの交流をはかり、そうした中で、地域からの、日本人のイスラーム理解を高めていく試みをするの方が、語弊があるかもしれませんが、よほど生産的かつ将来に向けて大きな足掛かりとなっていくのではないかと思います。もし学校をつくるのなら、それはいわゆる師範校予備門といいますか、私は幸いにして、2000年から2006年まで、通算6年、シリアのダマスカスというところで、イスラーム留学をする機会に恵まれた人間なんですけれども、大阪の外国語大学で4年間アラビア語を専攻して、もう自分はアラビア語をできると思い込んで、行ったわけですが、到底、日本ではイスラーム教育は受けておりませんから、ついていけないわけです。すぐにはアラビア語の授業についていけない。アラビア語を専門にやってきた人間というつもりだったのですが、向こうのイスラームを学ぶためのアラビア語の授業ですらついていけない。ということで、向こうでは、その前の準備校、予備コースといいますか、予備門に通うのが普通とされております。ですので、アラビア語をゼロからはじめる人であれば、だいたい3年の過程を経て、いわゆる大学の専門課程に入って行くわけですが、もし日本にイスラーム学校を築くのであれば、これは私の提言ですが、その準備期間を少しでも短くできるような、日本でイスラームの大事なところはきちんと押さえておけるような、そういった師範校予備門みたいな、専門学校、そういった学校づくりの方が未来につながるのではないかと思います。

それからレカさんが言及されました、私塾をつくる上での、治安を担当している方からの懸念ですけれども、イスラームを教える人は一切隠しごとをしません。ですので、そういった私塾で教えることに関わっている、人たちの全ての言説を、どうぞ吟味してやってくださいと、一切隠すようなこと、恥ずかしいことは教えていないはずですので。

それから、今専門学校の話をしましたけど、もっと小さい子のための学校としては、今の現段階では、普通に平日週5日は日本の学校に通わせつつ、家庭教育はもちろんのこと、Weekend Schoolですね、土曜学校、日曜学校がそれぞれの地域で、できたらよいかとおもっております。そこでは、もちろんイスラームのこともそうですが、ムスリムの子ども

が、一同に会して、ムスリムの子がお互いに遊ぶことの大切さもここで説かれていますけれども、ムスリムといて楽しいという感覚を育てることが大事ですので、例えば、私の例で恐縮ですが、行徳に住んでおりますけれども、待っていても誰かがやってくれるわけはありませんので、この年明けから、ささやかながら、行徳ムスリムファミリーという土曜学校をはじめました。といったかたちで、現段階ではそういった試み、を考えております。

メイモン：

ハールーン・クレシさんにこちらで色々問題提起を、日本にいるムスリム社会の課題を提起して頂いて、それから、それについて賛成、反対という意見があったのですが、いかが思いますか。

ハールーン：

その前にイスラーム理解についてですけれども、日本人の遠慮する性格もあるのですが、我々ムスリムからもちょっと積極的に、声をかけていろんな場をつくるべきだと思います。ひとつ、私の課題もそうですけど、イスラームの国を旅行する場をつくることも大切だと思います。私が知っているたくさんの日本人の友人・知り合いは、イスラームの国を旅行して、イスラームについてかなり理解ができるようになったとか、改宗したとかいう方がいます。それがひとつ、これからムスリム各団体が考えるべきではないかと思います。

もうひとつは、今日本の経済も、世界の経済も良くないので、仕事がない人もたくさんいます。イスラームの考えとしては、ハディースでは、預言者様の教えによると、「あなたの近所が食べ物無く、お腹がすいたまま寝ていれば、あなたはムスリムではない」という教えがあります。でも、私達のたくさんの、ホームレスもそうですが、近所に日本人でもそういう人がいるんですね。必ずいます。大塚モスクでは最近、少しは始めているのですが、そういう活動を始めたら、びっくりするほど、宗教とは関係ないんですけど、そういう人がたくさんいるんですね。そういう活動をすれば、それによってイスラームの理解が、もう少しできるようになるのではないかと思います。

メイモン：

つまり、ムスリムが自分のことを積極的に宣伝するのではなくて、普通に日本社会で活動していれば、自動的にイスラーム理解も、日本人側に生まれるということですね。もちろんそれは大事ですが、先程ハールーンさんの話では、イスラームの学校も非常に大事であるということでした。これから小学校の予定があるというような話だったのですが。一方、前野さんが専門的な学校ではなくて、土曜学校で十分だというお考えもありますが、それについてどう思いますか。

浜中：

たぶんハールーンさんの大塚モスクのようなムスリムのたくさん住んでいる地域だと、今はイスラーム塾、コーラン塾みたいなものを作ってらっしゃるようですが、ひょっとしてイスラーム学校ができてもいいかなとは思いますが、まだちょっと早いかなという気がします。前野さんが言っていたように、今はそういう段階ではないと。それで前野さんが **Weekend School** のような、塾の形式でやっているのはすごくいいことだと思います。僕は四国に住んでいるのですが、イスラーム人口が非常に少ないんですね。1か所に集まるとするのは非常に大変なことで、子どもたち同士が触れ合うという機会がほとんどなくて、何かイベント1カ月に1回、食事会などをした時にやっと来る程度なんですね。年齢も上から下まで全然違うのですが、特に田舎の方で集めるのは非常に難しいので、ふと僕が考えていたのが、塾というよりは家庭教師も、こういった田舎ではありかなと思っています。僕の原稿の中に少し書いたりもしているのですが。ムスリムが結構多いというのが、関東と東海だと思うのですが、それ以外の地域だと家庭教師が良いかと思っています。留学生たちは非常に、そういうダーワとかに興味があります。日本語も一生懸命勉強していますから、マスジッドで家庭教師をやってみないかと言えば、快く承諾してくれると思います。どこかの家庭に行って子どもたちを教育する。もちろんイスラームの理解、礼拝の仕方、それからクルアーンの読み方もそうですし、普通の学校でなっている教科も教えればいいのではないかと思います。ちょっとした田舎のアイデアなのですが。

メイモン：

つまり地域によってニーズが違うから、東京と四国ではニーズが違うからそれぞれに合わせる必要があるということですね。樋口さんは手を挙げていらっしゃるのですが、いかがでしょうか。

樋口：

教育ですね。これは日本におられるムスリムの方ですね、一時的に滞在される家族と、ずっと日本で生活して、生活の基盤を日本に置こうという方もおられるし、そういう人とそれから前野さんのような若い日本人ムスリムの子どもに対する教育について、ちょっと提案して、またお聞きしたいと思うのですが。

幼児教育でイスラームを教えるというのは、イスラーム家族にとって大変だと思うのですが、問題はですね、いわゆる一般教養ですね。これも勉強しなければならないと思います。学校で教える国語・算数・理科・社会そういうものとの兼ね合いで、どういう教育をするかということを、私は1番にお聞きしたいんですね。これから若いムスリム家庭で教育する時にです。私の希望としては、幼児教育、日本の学校では道德教育がありませんから、何がいいのか何が悪いのかも教えないような日本の学校ですから、そうしたムスリムの幼児教育には、しっかりしたイスラームの倫理を教えたいと思うんですね。

もちろんそこでもコーランだとかを教えるのはいいのですが、それだけではなくて倫理、イスラームではこういう倫理、道徳があるんだ、それをしっかり教えてもらう。これが非常に、今の自殺の問題を解決するのにも、日本人ムスリムの生徒を通してでも、貢献することになると思うんですね。

でもですね、私が最近非常にショックを受けた、疑問を持ったことがあるんですね。それはたまたまムスリムの人と話している時に聞いた話ですが、二人の子どもがいたそうです。それで一人が紙にゾウさんを描いたそうです。そしたら隣の娘が、「あらそれは偶像崇拜だからいけないよ」と言ったそうです。そしたらその親は、娘を褒めたっていうんですよ。まずこういう点についてみなさんどう思いますか。これは私自身は、そういうその感覚で、学校で普通の勉強はどういう風にされているのだろうかと、非常に大きな疑問を持ちました。これについて前野さんあたりどうお考えになるのかなと。それからみなさんもお覧になっていると思いますけれども、幼児教育のために、イスラームかるたもつくりましたね。非常にいいことだと思います。いい文句がたくさんあるかるたなんですね。けどそこに出てくる人の顔を黒く塗りつぶしたんですよ。そこまでやらなければならないのでしょうか、日本社会において。これも偶像かということなんですね。日本では目も鼻も口もない顔っていうのはお化けなんですよ。だからそういうのはイスラームを非常に遠くしてしまうんですね、感覚的にも。そういう教育を子どもにしているのかどうか。子どもたちが学校に行って先生の授業をどういう風に受けられるのだろうか。そのへんを非常に感じるわけなんです。とにかくその豚を食べないと酒を飲まないというのはいいんですよ。ただね、豚の食事の出るところの、お酒の出るところもダメですよと教育する人もいます。これは子どもだけでなく大人にも。時々、外国から来たダーフの先生が我々を前にして話すのですが、サラリーマンが同僚とお酒の出る席に行っている、それは避けるべきだ、そういう説教をされる方もおられます。ですから、教育の問題というのは非常に基本だし、将来につながるものですから、その辺をどういう風に日本人のムスリムが、子どもに教えていくのか、その辺のところを問題提起したいと思います。

メイモン：

今の樋口さんの意見は確かにイスラーム世界ではいろんなところに出ているんですね。それはやはり、イスラームを厳格に守るべきか、地域や時代に合わせて調整するべきか、そして調整するならどこまでの調整が許されるのか。その辺はいろんな議論があるのですが、多分世代によっても異なって来ると思います。前野さんどうでしょうか。

前野：

ありがとうございます。まず忘れないうちに申し上げておきたいのですが、浜中さんが言われました、チューター制度の確立、大いに賛成です。

それから樋口さんが言われていたことですが、私自身は、例えば絵の問題とかに

については、イスラームの基本の教えに則って子どもの教育のためであれば、構わないという意見を持っております。ただし、大事なのは、これは日本の皆さんにもご共感いただけると思いますが、それぞれ日本の家庭も宗教の如何を問わず、家庭のルールと申しますか、それぞれの家族が持っている家のルールといったものがあると思っております。ですから、そのご両親が、そういう教え、考えに納得しているか。見解の相違がイスラームに豊かにあるのです。信徒はそれぞれが納得いくものを、自分の生活に実践できるよう努めていけばいいわけですし、その後家庭のご両親が、そういう方針で行きたいと思うのであれば、そのお子さんにそういうことを教えるでしょう。ただそこで願わくは、付け加えていただきたいのが、例えば私の子どもに言っているのですが、こうこうこうだけれども、でもこうといった見方をする人たちもいるからね。だから例え顔を描いている子がいたとしても、これが間違いだよと言ってはダメだよ、ですとか。そのイスラームの多様性です。イスラームにおける見解の豊かさもきちんと教えていくべきかと思っております。大事なのは、イスラームについて公で人前で語る人の姿勢として、私自身が自分に言い聞かせることですけれども、それはイスラームを表で語る人は、自分には厳しく、人にはとことん優しくありたいと思っております。ですので、厳しい考えを持つ人、それもその意見として尊重したいわけですね。そうするのが間違いではなく正解なので。ただ、問題は、いろんなノイズが起こってしまうのは、それをみんなに押しつけようとするか、これ1つしか答えがないというような姿勢、試みが現れて来た時に、困る、悩まされる人もいるということです。ですので、その辺の教育をしかと押さえておけば問題ないのではかと思っております。

それからイスラームの倫理についてですが、国語や算数、一般教養についてはどうするというところについてご回答しますと、先程申しそびれましたが、だからこそまだ日本でイスラーム学校を作る必要はないと思っております。なぜかと言いますと、まず日本語でイスラームを教えられる人材がない。そして人材が揃ったとしても、日本語でイスラームを教えつつ、かつそういった一般教養まで、クリアできる、同時に教えられるような人材がないんです。ですので、学校にふつうに通い、その一般教養を身につけさせつつ、イスラーム的な倫理というのは家庭のお父さんお母さんが家庭教育を中心に、Weekend Schoolなどでサポートしていく。そこで私塾なり、そういった中規模の学習サークルが大きな意味を持つてくるのは、イスラーム倫理の学びというのは1対1と申しますか、先生と生徒、人とのつながりの中で、学ぶものであると私は理解しております。教科書、文字化されたテキストを学んでも、それはインフォメーションに過ぎず、知識には結びつかないとイスラームでは考えられているからだと私は認識しております。

メイモン：

非常にわかりやすいお答えをいただきました。特にイスラームの多様性についていろんな意見があると、自分の意見も守りながら、人の意見を尊重するというようなお答えということですね。

教育に関しは、第2セッションでもとりあげます。ここでアドゥルカーディルさんはせっかく徳島から来ていただいているわけですが、そちらでは一般の日本人社会とのコミュニケーションでどういう問題や課題があるのかご紹介いただけませんか。

オバリ：

徳島に住んでいるムスリムは、ほとんどが留学生です。エジプト人、バングラデシュ人、インドネシア人、といった留学生です。最近になって介護で働きにインドネシアから来ている人も増えていますが、基本的に留学生です。そのため、4年ごとに変わっていくわけです。教育の問題は今まで徳島でそんなに考えられていませんでしたが、子ども達も増えて来たので、私達も考えるようになってきています。その問題はこれからだと思います。今徳島にはムスリムは少ないです。課題は、一般的な課題というより、個人的な課題になるのですが、私の子ども二人は、今、徳島市に日本人ムスリムの子どもは多分5人しかいません。だから、その問題に今から取り組まなければなりません。例えば、残念ながら1つの解決策は、東京に引っ越す。そうすればムスリム社会があります。大阪や名古屋に引っ越しすればいい。コミュニティがあれば、みんな教育できる。モスクで塾を行ったり。そして日本人にイスラームを理解してほしい場合には、まず自分である程度良いムスリムであったら、それは理解の道の50%かもしれません。まず自分で良いムスリムになる必要がある。私はいい人じゃなくて、良いムスリムじゃないが、日本人に理解してほしい、というのは難しい。小杉先生に聞いたことがあるのですが、日本人は見て理解する。どんなに聞いても、実際に見ないと、理解してくれない。まず自分で良いムスリムになれば、それは本当に道の50%かもしれません。その後、周りの日本人の友達、近所の方、もし大学だったら大学の同級生とか、みんなと良いコミュニケーション、良い関係をつくる事が非常に大事だと思います。例えば私は個人的に毎週、友達や近所の方を誘っています。一緒に晩御飯食べたり、時々私の家族と彼らの家族で旅行したり、どこか公園に行っておバーベキューをしたりとか、そういったことを一生懸命やっています。少なくとも、悪い印象を与えないようにしています。そしてその後、理解して貰おうと考えています。最近、例えばエジプト人が徳島市で、エジプト文化デーを作りました。たとえば、アナウンスして、会場を予約して、発表や食事会を開催しました。これはエジプト料理を、みんなを誘って友達、近所の方、知り合いの日本人を誘ってエジプト料理を出しました。エジプト料理を食べて、エジプトの文化について簡単な発表を行いました。その中に、当然イスラームのことも出てきますから、ある程度イスラーム理解にもつながるのではと考えております。以上です。

メイモン：

つまり日本人に理解を求めるにはまず、自分をしっかりする。自分がいろいろと努力することで50%の道がクリアだということですが、それは確かにその通りです。あとの問題は

残りの 50%、やはり内部葛藤の問題だということですが、時間もあと 10 分ぐらい残っているのですが、その 10 分はこういう話、先程のハーリーンさんの話の中にもあったのですが、日本での一般の日本人のイスラームについての勘違いの中で、メディアの影響がかなりあるというふうに提言されていましたが、特に欧米のメディアの影響が非常に強い。今の話にもあったように 50%は自分の性格でクリアできるけど、残りの 50%がほかのいろんなところから影響されています。それについていかがでしょうか、みなさん一言ずつお話していただきたいのですが。

レカ：

日本のメディアもそれからヨーロッパあるいはアメリカ、西側のメディアも、だいたい似たようなものなのですが、その日本のメディアは特にヨーロッパとアメリカのメディアの影響が非常に強い。アメリカやヨーロッパで発表された、映像化されたものはすぐ日本でも流すのですが、その影響が非常に強い。イスラームに関して、先程の私の話の中に、**negative publicity** といふか、評判を悪くするために、ヨーロッパの方で、昨日一昨日も、多分みなさんインターネットやテレビでご覧になった方もいらっしゃると思うのですが、そのワイルダーか誰かが、オランダの人なのですが、それはイスラームのイメージを悪くするために、コーランの悪口を言ったり、昨日か一昨日イギリスに入って自分の映画を作って、イギリスで上映されるという話、そのようなマイナスになるものがヨーロッパやアメリカでは非常に強いです。特にフランスやオランダあるいはデンマークのようなメディアが完全に反イスラーム的なそういうものを流すものですから、当然、日本のメディアもそこまで大々的には見せないのですが、ニュースとして流すんですね。まあとにかく何かがあった時に、日本メディアはそれをかなり大々的に見せたりするものですから、それでイスラームのイメージをかなり悪くするということがあります。さっきも、向こうの話にありましたように、日本の場合は、私の考え方なのですが、ムスリムの人達を見るのではなく、そのイスラームの原理とかイスラームの教えとかそれは日本人が勉強して、ムスリムはいつでもいいですから、イスラームの教えがどうかということが一番重要ではないか。私達は悪い例かもしれないから、そのイスラーム自体は自分達で勉強して、どんなものかという考え方もあります。

メイモン：

でも実際、私達が悪い例であったら、それも影響するのではないのですか。

レカ：

もちろん。私がイスラームであって悪いことをすれば、ムスリムなのになんでこんな事をするのと。例えば名古屋でも昔よくそういう事がありまして、私は酒は飲まないし、豚も食べませんが、大学には同じイスラーム地域の方でイラン人の方がいて、彼は酒を飲むし、

豚も食べるし、どこでもみんなに付き合う。なんでこの2つのイスラームがあるかと。どっちに従えばいいのか、どっちが正しいかというのはよくありますから、我々を見るのではなく、イスラームの教えを見る、どれだけすばらしいか、どれだけ悪いものかとみなさん判断すべきだと思います。

前野：

私達にとらえようによっては一人一人がメディアです。ですからその意味で、アブドル・カーディルさんがおっしゃられた、まず日本人にイスラーム理解を高めてもらうには、ムスリム個人が頑張らなければならないというのは正論ですし、レカさんがおっしゃるようにイスラームとムスリムは別物だというのはそうなのですが、ただその言い訳は言いたくありませんね。むしろ言うてはならない言い訳だと思います。そしてメディアに関して言いますと、これは褒め言葉なので名前を出しても構わないと思いますが、例えば私が知る限り、最近のNHKや時事通信などでは割と好感を持てるような報道の仕方、特集番組ですとかも組んでくれたりしますので、多少改善傾向にあるのかもしれませんが、ニュースに関しては、やはりまだまだ西欧の受け売りの所が否めないのではないかと感じております。日本の人達、世界の人達に共通して言えるかと思えますけれども、メディアの力というのは大きい。一方でイスラームも歪んだかたち、あるいは正しくとらえていない形のメディア力が強いならば、それを是正するようなムスリム側のメディア力というものを高めていかなければならない。これが今後の課題だと思っております。

須見：

考えていたことはすべて前野さんにとられてしまっただけなのですが、確かに私達が、メディアにならなければならないと思います。私達に興味を持ってもらって、そこからイスラームに興味をもってもらおうということは非常に非常に大切であり、一番簡単なことでもあるのかなと思います。少し体験談を紹介しますが、うちの母方の実家のおばあさんがひとり暮らしでいるのですが、2年前にGWを利用して一人で会いに行ったことがあります。一人暮らしなので泊って行きなさいと言われ、泊ってきたのですが、おばあさんは僕がムスリムになったということは以前から知っていて、全くイスラームに対して興味がない、逆にいうとあまりそういう話はしないでくれというバリアを張っていた人なのですが、僕が一晩泊って、おばあさんの家で、ちょっと礼拝させて下さいと言って、夜の礼拝をして、朝も夜明け前に起きて、礼拝をしたのですが、おばあさんも早起きで、夜明けぐらいに起きて、昔悪かった僕の変った姿をみて、おばあさんの方から、ちょっとイスラームについてどうなのという質問を、今まで嫌悪していた人からもらって、見せたりして、興味を持ってもらうことというのは、大切だし、簡単なことだなという体験談でした。

メイモン：



ありがとうございます。残り時間が少ないですが、一言ずつ日本のメディアの悪影響とそれを是正するにはどうすればいいか、みなさんの意見をいただきたいと思います。

樋口：

われわれムスリムとして確認したいだけなのですが、やはり本当のイスラームを見えなくしているのはムスリムだと思うんですよ。ムスリムがメディアが取りつくような問題を提供しているんですよ。国際的に見れば、一部の過激派によってイスラームのマイナスイメージを提供している。最近ではイスラームに関しての本は、良い本がたくさんでています。ああ、わかりやすい良い宗教ではないかと言って、ムスリムの所に行くと、これ誤解しないでくださいよ、そういう服装、髭を生やして帽子を被って、それをやらないとイスラームはやれないのかとかですね、これには私はとても付き合えないよとか、そういった人に対して十分説明もないし、だからそういう服装をしたりする人がイスラームじゃないんですよ。それは地域的な習慣であって、日本人は日本人の習慣の中で、イスラームを理解すればいいのであって、国際的にも国内的にも、誤解しないでくださいよ、多様性というのは私は同感ですからね。ムスリムでも背広を着る人はいますし、髭を生やす人、生やさない人、それは多様性でいいのですが、ここはイスラームに関心のある人がいるから別に違和感はありません。先程レカ先生の方からもありましたが、デモンストレーションに髭の生やしたのが来たら、ビン・ラディンと同じような者にしか見えなかった。そういうモスクが多いと思うんですよ。ですから、私が再確認したいのは、メディアを批判する前に、本当のイスラームを見えなくしているのはイスラーム自身であるということだと思います。これは私の個人的な考えかもしれませんが、私はそういうふうにはずっと考えております。

浜中：

良い意見がたくさん出ているので、何も申し上げることはないのですが、マスジドとかをやっている現場の人間としたら、意外とイスラームに好意を持っている人達も、結構いるので、そういった人達に集まってもらって、まあ僕らもアラビア語教室や、インドネシア語教室とか、そういうことをやりながら、結構イスラーム理解をして貰おうとか、イスラームをテーマに、一般の人達にマスジドに上がってもらって、おしゃべりをして、徐々にイスラームをわかってもらっているのですが、そういった人達が一人でも二人でも増えれば、僕一人でイスラームがこうだと言うよりは、たくさんの方がイスラームを理解して、ムスリムでなくても、周りの人に宣伝してくれれば、そういうものの積み重ねで少しずつよくなっていくのではないかと現場ではやっております。

ハールーン：

樋口先生も先程おっしゃったように、我々にも責任があるんですね。ただ、我々は良いムスリムでないから、本当の教えに従っていないから、良い性格がないから、髭があるから、

イスラームから離れるとか、それはないと思いますし、帽子や服装によってイスラームから遠くなる場合もないんですけれども、やはりもっともっと本当のイスラームを実行しなければならぬと思います。

オバリ：

ひとつ終わりに言いたいのですが、ムスリムとして時々残念なのが、情報不足などから、相手の文化を怖がってしまう。たとえば先程仰いましたが、日本人のお祭りとか日本人の活動に参加したくないムスリムが多い。なぜなら、仏教等とかかわりのあるもだから。それはいいですけど、でも参加しても自分の宗教は変わらない。それからフィクル、イスラームのルールで、参加していいかどうかきちんと習わなければならない。例えば、「日本人の友達の結婚式の披露宴に参加してもいいですか。ダメですか。そのパーティーでお酒が出されるのですが、参加してもいいですか」。このような質問をムスリムがわからなかったら、自分のイスラーム教則がないため、心配して、これもやめる、あれもやめる、自分の子どもを学校に行かせたくない、ということになる。自分の家庭の中にだけイスラームがあると知っている。それを変えなければならない。日本にいるムスリムに教えないといけない。例えばイスラームのフィクルで広いドア（解決）があります。心を開いて、日本人ともっと接すればいいと思います。

メイモン：

みなさんありがとうございます。これで第一セッションを終了させていただきます。第一セッションでは、「ムスリム・コミュニティの課題」という題で、クレイシ・ハールーンさんに問題提起をしていただいて、日本では特に3つの課題があると仰ったんですね。1つは非イスラームの、イスラームに対する理解不足。2番目にはムスリムの次世代、日本人も外国人も含めてなんですが、子ども達の教育はどうするかということと、3番目にはなくなった人達を埋葬する墓地ということを定義されて、それについて、意見や反論など、いろんなことを皆さんで話し合いました。なかなか1つまとめて結果が出るというものではないのですが、いろんな意見があって、いろんな考え方があって、というところではかまともようがないので、今日の参加者の方も意見や質問があるかと思いますが、それは最後まで残っていただいて、5時から5時30分の間に、みなさんからの質問も受けたいと思います。これから1時間は休憩です。昼食ズフルの礼拝をして、その後、セッション2を開始するということです。

## セッションⅡ「日本におけるイスラーム」

前野：

みなさん、こんにちは。ムスリムの方々にはアッサラーム・アレイコム。食後一番の担当時間ということで、みなさんお休みいただくには、とてもいいお話をすることもかもしれませんが、よろしく願い致します。私のプロフィールについての用紙は、渡っていないんですね。わかりました。私は前野直樹と申します。愛知県の東海市出身です。ムスリム名はアブー・ハキーム・アハマドと申しまして、実は大変喜ばしいことに、私が正式なイスラーム入信の信仰告白の儀式をした際の、証人のひとりがここにいらっしやっまして、レカさんです。もうかれこれ 17 年前、今 17 年目なんですけれども、の話になります。先程のコメントを申し上げた時に、お伝えしました通り、2000 年の 5 月末から 2006 年の 8 月末まで、シリアのダマスカスというところで、イスラーム学の留学をして参りまして、その前に、大阪外国語大学で 4 年間、アラビア語を専攻致しました。2006 年 9 月から、東京の日本の石油会社に勤めつつ、サラリーマン生活を送りながら、アラビア語で、イスラーム用語として、導師のことをシャイフというわけですが、僭越ながら、自分の精一杯のところ、サラリーマンシェイフを目指してがんばっております。

では、「日本のイスラーム過去から学ぶ教訓」という章題のもとでお話しさせていただきたいと思います。日本のイスラーム史というのはみなさん御存じの通り、もう 100 年ちょっと、120 年ぐらいいまで遡るとされております。1880 年代には、日本人で初めてのムスリムが現れたというふうに伝わっておりますし、少なくとも 1905 年には、オマル山岡さんという方が、初めて大巡礼、ハッジをされたということが伝わっております。

それ以降、数多くの一般の先輩方が現れてきていながら、今までの私がムスリムになって 16 年、17 年目、のささやかな経験の中で、一個人として感じて来たことを申し上げますと、非常に残念ながら、過去の先達の大先輩達からの、今に至る私達への繋がりが無い、あるいはすごく乏しいと申しますか、そこが私としては一番強く感じていることです。ですので、次世代教育に全力を尽くそう。本来ですと、もちろん様々な事情があることを重々承知した上でお話ししますが、本来ですと、勝手な理想ですが、私のようなものではなくこのような場に、先輩方の息子さん娘さん、日本人ムスリムの 2 世代、3 世代の方たちが、いわゆる布教活動、イスラームをよりよく伝える活動の最前線に立って、がんばってくれているのが、理想形だと私は思うのですが、そういったかたちで頑張らせてくださっているのは、数えるほどしかいない。もちろん以前は絶対数が少なかったというのはございますが、そういった、はじめての、日本人ムスリム大巡礼者第 1 号として、必ず日本のイスラーム史に記録される様な、山岡さんについても、ご家族としての、ムスリムとしての、曾孫さん、玄孫さんとかは、残念ながらいらっしやらないようで、とても一個人としては、さびしく、悲しく感じるんですね。そういったことから、ムスリム日本人の育成が肝要では

ないかと。あくまでも便宜的に、慣習的なところから英語でも **Japanese Muslim** とか日本人ムスリムという表現が、通っておりまして、私もそれに異を唱えるわけではありませんが、ムスリムとしての心構えからすれば、当然ムスリムであることが、アイデンティティーとして抱くべき最初のもので、そして日本で生まれ育っている以上、日本人というものがついてくる。またそうであってこそ、私が強く信じています、イスラームこそ日本社会が抱える様々な問題の解決策になりうるというですね、イスラームが持つ国際力、そういった救いというものを、達成していくことができると思っているので、日本人ムスリム…何かな、どうかな、わからないな…では、例えば私は、アルハムドゥリッラー、唯一の神様のおかげで、3人子どもがおりますけれども、私個人の話をしていただければ、3人の子が育って成人になって、「私は日本人ムスリムです」と胸を張って生きていけるような人に育ってほしいというのが、切なる思いです。それが、日本人であるのは確かだけれども、家内は日本人ムスリマですから、日本人であるのは顔を見てもその通りですけれども、「ムスリムかな、どうかな」と自覚がないようでは、今後の繋がりには、なり得ないんじゃないかと懸念しております。だからこそ、次世代教育に全力を尽くしたい、という教訓です。

それから新入信者養成教育システムを確立することにつきましては、みなさん御承知の通り、まあこれはイスラームに限った事ではないと思いますけれども、あるイデオロギーなり、考えなり、といったものを広めよう、それが広まっていく過程を考えてみると、まあイスラームに特化して言いますと、イスラームでは布教の在り方、イスラームをよりよく伝えるやりかたというのは3段階に分かれて行われるべしとされています。これは小杉先生の受け売りですが、まず「イブラール」正しい情報伝達ですね。それから、その正しい情報伝達、正しい情報を得た人の中で、それなりに興味を抱く人というのが現れる。そうした人に対して、「ダーワ」いわゆる呼びかけ、いざないかけです。布教宣教とされるころの段階です。そしてその中で、中には本当に、より深く関心を抱いて、そのムスリムになりたい、イスラームの仲間になりたいという人が現れてくるので、その最後の段階というのが、「タルビア」教育という段階になるとされております。そしてこのサークルが、正しく、円滑に回っていれば、もう自動再生産的に、いわゆる、まあ言葉は堅いかも知れませんが、布教者といえますか、イスラームをよりよく伝えていこうという人が、日本人ムスリムの中から、自然に現れ、増え、そのサークルはより大きく広がっていくはずなんですね。しかしながら、その教育の段階で、日本人ムスリムが新しく仲間が増えました、ただし残念ながら、今まで、先程他の方々も指摘しておりましたけれども、アフターケアのシステムが確立されていない。100年も経っておきながら、あるいは戦後だけをとっても60年も経っていないながら、まだ未だに新入信者養成のシステムが、カリキュラムが確立していないというのは、ゆゆしき事態だと思っておりますので、これにも大きな教訓として、取り組んで行きたいと思うわけです。

私は敢えて課題という言葉をお使っております。問題ではなくですね。これは言霊思想がある日本で生まれ育ったからではないですけれども、問題と言うと **problem** でして、や

はり challenge と前向きに課題として、捉えたいですので、敢えて課題とさせていただきます。

それからムスリムかつ日本人としてのバランス感覚を大切にすることですが、これは未来のための現在の課題というところで申し上げます。世代間ギャップにもつながるんですけども、今まで何人もの日本人ムスリムの先輩方がおられる中で、これも個人的な意見にすぎませんが、様々な流れがあったように窺いまして、いずれにしろ、今後私が大事な日本人ムスリムの在り方というのは、ムスリムであることの誇りと自覚と実践、かつ日本で生まれ育った人間としての、その日本人としての常識感覚といいますか、常識的な振る舞い、それを半々あるいは6:4の割合等でですね、バランス良く持っていく事ではないかと思っております。なぜそうかと言いますと、どちらかに偏ってしまえば、もちろんイスラームは中庸の教えである、中道の教えであるというのはみなさんご存知の通りです。どうして、現実には、具体的によろしくないかと言いますと、ムスリムの方に偏り過ぎてしまって、日本人であることを忘れてしまうと、いわゆる日本人を捨てて外国人になってしまう、そうなってしまうと、次の新しい新入信者が来た時に、私も個人的な経験で、初めてお会いした人がそういった方でしたので、「日本人ムスリムってみんなこんなに、言葉悪いですけども、変人ばかりなのだろうか」とですね、私が入信したのは18の若かりし頃です。そういった感じで、非常に大きな不安を抱きました。ところが次にお会いした二人目の日本人ムスリムの方が、先程忙しい中、お顔を出しに来られてました、イブラヒーム大久保さんという方で、ムスリムとしても非常にまじめに誠実に頑張っておられる。と同時に、日本人としての常識的なセンスも兼ね備えておられる。「ああ、よかった」とすごく胸を撫で下ろした記憶があります。といった形で、みんながみんな、外国人風になってしまえば、当然日本人はついていけないということになってしまいますし、日本人にイスラームを説く上で、外国人になれということをお勧めすることは一切ありませんので、それはおかしい。一方で、日本人であることに重きを置き過ぎることもまた、ムスリムとしてはどうかと思うわけです。外国から来る心あるムスリムの人達は、日本での同胞の現状と言いますか、日本のイスラームに少なからず関心を持ってくれます。そういった時に、やはり日本人ムスリムが中心となっている団体と、日本人ムスリムに着目するわけですが、その中で、ムスリムとしての教養、素養、実践の在り方、自覚の在り方が弱くて、日本人であることばかりに強調点を置いていると、何と言いますか、恥ずかしいと言いますか、世界の表舞台に立てないのではないかと。日本の中では、もちろん日本人ムスリムを立てられてしかるべきですけども、世界のムスリム同胞と対等にやっていけなくなるのではないですかという懸念がありますので、どちらも大切にしていかなければならないと思っております。

そして教訓としましては、新入ムスリム及び次世代の少年少女ムスリムのための生きたロールモデルをできるだけ多く確保することです。ムスリム世界には、様々な意見・考えを持った人がおります。それは、意見の、見解の多様性、豊かさということで、私は肯定

的に捉えておりますし、預言者ムハンマド様も「私の共同体の違いというのは、神様の慈悲です」というように肯定的に教えてくれている通りです。ですがそういった多様性豊かな社会でも、様々な意見があるところでも、誰もおそらく文句を言わないだろう、コンセンサスとしてあるのは、ムスリムの最高のロールモデル、最良の模範は、あくまでも預言者ムハンマドであるという点なんです。新しいムスリムが、入信当日から、預言者ムハンマドのことを自分の人生の大先生として、誰よりも近しく、誰よりも尊敬・敬愛して止まない先生だと実感して、信徒としての一步を歩み始めるのは、至難の業です。よっぽど特別な例外的な人でないと、難しいでしょう。普通は、より身近の中から、「ああ、このムスリムのお兄さん、とても良い性格でかっこいいな」「このムスリムのお姉さん、きれいでやさしくていいな」そういった近いところか、あこがれ、ロールモデルというのを見出していくものだと思います。ですからこそ、次世代教育を考えた時に、一人でも多くのロールモデルがほしい。その中でも特に、これはナショナリズムでもなんでもありませんが、日本人ムスリムのなかでのロールモデルがほしい。それは、別の言い方をすれば、日本人ムスリムでなくても、日本語に長け、日本社会をよく知るようになった外国出身のムスリムであれですね、どんな形であれ、日本社会で活躍するような、日本社会で上手にうまく、かつムスリムとしても立派にまじめにやっている。といったようなロールモデルがひとりでもほしいわけです。そうでなければ、子どもたちはどうやって、この日本でムスリムにいることの、大切さといいますか、ポジティブな生きがいを見いだせるでしょうかということなわけです。

続きまして、未来のための現在の課題ですが、世代間ギャップ。これについてはディスカッションの時間に詳しくは譲りたいと思いますが、一番最初のお話でレカさんが、生物学の見地からと言いますか、生物界、自然界の見地からものをいわれましたけれども、それから言うと、いつの時代も時と場所を越えて、年長者はあくまでも年少者の事をいつまでもたっても年少者。年少者は年長者のことをいつまでもたってもわかってもらえないなど。どっちもお互いに、わからない、わかってもらえない、といった気持ちを洋の、東西は問わず、日本だからというわけではなく、持っていると思います。ですので、なかなか、そういった、いつまでも「年少者、若者が」という常識のなかでは、私のような若輩者から、何か申しあげるのは非常に、難しい、言ってもなかなか聞いてもらえない土壌がありますので、この世代間ギャップを真剣に、改善していこうと思うならば、その上の方々に、そういった下への思いやりや、慈悲の眼差しを向けていただけると、有難いと思います。

日本人ムスリム間の結束の弱さ、組織力不足、横のつながりが弱いこと、このカッコ書きで書きました、横のつながりが弱いことと言いますのは、先日 3 回組で、日本ムスリム協会の青年部企画として行われたという、大阪の金山ゼーラさんという方が中心となつてされました、ムスリムのための育児座談会、というのがあったそうですが、それは女性の方に特化して行われてものようなんですけれども、その中で一様に出て来た、お子さんを持つ日本人ムスリマのお母さんたちが一様に感じる課題意識で取り上げられたものだと

うです。「横のつながりが弱いこと」。これは女性がそうだったら、男性はどうなんだと、非常に物悲しいものを感じますが、私が見る限り、女性陣は横のつながりは男性陣とは比べ物にならないほど、理想的なよい形になっていると、窺えます。一方男性の方は、悲しいかな、とてもまだまだ弱い。そのひとつの原因として考えられるのが、私たち日本人ムスリムが、入信前ですね、日本人であることの、もちろん日本的な美德というのは、イスラームで語る美德とほとんど変わりません。少しいくつか、数えられる、限られた程度のものがイスラームとは相反しないと云いますか、似ていないところあるわけですけども、その日本社会に残っている、あるいは現代日本社会が抱えているイスラームらしくない、ムスリムらしくない、日本人としての、ネガティブな癖、それをムスリムになってからも、持ち続けているのが現状で、その濃淡、濃い淡いは人によって違うわけですけども、そういったこともあって、日本人ムスリムの、特に男性同士のきずなが弱いのかなと、私は一人で思っております。皆さんご存知の日本社会でも、チームワークの強さは良く褒めたたえられるわけですが、仕事を一旦終えたら、その後の個人的なつながりはあんまりないですとか、隣に住んでいる人がだれかわからないどころか、気にもしないというのが、常識にすらなってしまうようなところが多いですね。私が言う、ネガティブなものというのは。

それから、日本語でイスラームを教えられる人材不足です。これもまた大きな課題かと思っております。ロールモデル不足、これとリンクしておりますけれども、コミュニティ不在、あるいは機能不全、幸いここにいらっしゃいますスレイマン浜中先生がですね、現代社会の非常に大きなメディアのインターネットを利用して、インターネットを活用して、イスラームをよりよく伝えようという活動の先駆者となってくださっておりますので、いわゆるサイバーコミュニティと言いますか、ネットでのコミュニティというのは、小さくもできているような感じはありますけれども、やはり、私たち人間は、お互い会って、直に会うのが、よりよいコミュニケーションの上では一番だというのはみなさん願っていただけだと思いますので、今後のイスラームを考える上でも、やはり実際に皆が寄り集まってですね、コミュニティとしてのコミュニティ、たとえそれがストリートから始まったとしても、やはり大事ではないかと思っております。

そして社会とのつながり不足、これもまた、先程挙げました、日本人ムスリム、女性陣の、お母さんたちの座談会の中で、問題提起されたそうです。社会とのつながり不足、これは彼女らに限らず、私たちも感じていることで、日本人のイスラーム理解不足と云いますか、それを嘆くのは簡単ですが、その責任はやはり私たちムスリム当人にあると思っております。当然、日本で生まれ育ち、日本語を母語とする日本人ムスリムに、その責務大きな形で担わされていると思っております。

4つ目のポイントとして挙げました、「日本人の、日本人による、日本人のためのイスラーム」。これは、私と同世代、私は今年35になるんですけども、同世代の方々であれば、中学生の英語の教科書でリンカーンの名演説として習いました「Government of the people,

by the people, for the people」というやつですね。人民の、人民による、人民のための政治というものを文字って、つくりましたスローガンのものですが、これは下手をすると誤解されてしまいかねません。特に、それを言っている人間が、日本出身のムスリムです。ただ、あくまでもお願いですが、これは国粋主義的な、ナショナリズム的な感じでは、断じてありません。あくまでも、日本人の定義というのは、ここでいう日本人の定義というのはですね、日本語を理解し、母語であればよりベターですが、日本で生きる人です。この「日本人の、日本人による、日本人のためのイスラーム」をスローガンとして、私が自分のささやかな活動のなかでかかっているのは、やはり日本社会のニーズを、日本社会の現状を押さえた、そういうイスラームをよりよく伝えるための活動でなければならないと強く、思ったのです。それは何も私が昨日、一昨日に思いついたことではなく、それこそイスラームが正しく説くものなのですね。クルアーンの中でも、あんまり日本人はクルアーンを引用されても、全然ありがたみを感じないんですけども、「我はただ一人として、使徒を遣わさなかった。その遣わす民の言葉を持って以外は。彼らに使わされた民に、そのイスラームが何たるかをよりわかりやすく、明らかにするために（アラビア語でも朗唱）」ということで、明らかにするために、その土地の、地域の人達の言葉を以ってしてしか、至高のアッラー、唯一の神様は預言者を遣わさなかったという、大きな典拠に基づいての、スローガンなんですね。ここでいう言葉というのは、当然日本語の理解に留まらず、日本文化、日本社会、日本の慣習、日本人のメンタリティー、すべてを含むものなわけですから、そういったことをわかった上で、イスラームをよりよく伝える活動をしていかないと、外国では簡単にできる正しいイスラームの行いも、日本ではそうはいかないということが、多々あるわけですから、ノイズをできるだけ作らないためにも、大事なところかなと思っております。

最後、まとめとしまして、日本教イスラーム派ではなく、スンナ派伝統イスラームによる本流のイスラーム伝播を目指して。理想達成に時間をかけ、段階を踏むことはけっこうですが、目標を現実に合わせてはイスラームではなく、日本教イスラーム派になってしまうと。これはイダヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』の受け売りで、日本教という言葉を使っていますけれども、山本七平（イダヤ・ベンダサンの本名）さんでもいいですが、曰く、私が理解したところでは、日本の歴史を見るかぎり、日本人達というのは、外から来たものを日本の社会、日本人達に合わせてようと、日本人達がやりやすいように合わせていく、そういう傾向がつよくある。実際に様々な外からの宗教というのが、そのようにアレンジされてきたと、言われております。なるほどなと共感するわけですが、イスラームはそうであってはならないと思います。イスラームが日本教イスラーム派になつては、とんでもない。それは、それこそ日本の中では、通用しても、世界で他のイスラームの同胞とは、同じように肩を並べて、語り合えなくなってしまうからです。ですけれども、先程のコメントの中で申し上げましたが、公でイスラームを語る人、日本人ムスリムなり、日本でイスラームを語る人は、自分には厳しくあっても他の人にはとことん優しく、とい



うのは、現実問題として、一朝一夕に、今日、昨日入信した人が、すぐさま1日5回の礼拝を確立できるか、すぐできるようになるかと言ったら、難しいです。もちろんすべきというのが正解なんですけれども、それは教科書の答えであって、現実には即した、生身の人間のリアリティを知った、それに応じた、臨機応変な回答ではないと思います。ヒジャーブの問題、ヒジャーブをつけることがムスリム女性としては望まれている、しかしながら、それはあくまでもゴールであって、今日一足飛びに、すぐみんながみんなできるわけではありません。そこで大事なことは、ステップ・バイ・ステップでいいですね。ステップ・バイ・ステップでその人の境遇に合わせた、ペースにあった形の、成長で全く構わないわけで、困るのは、その自分の、日本人の、日本人ムスリムの現実に、イスラームの教え、イスラームの理想を貶めてしまうこと、だと思います。そうすることで日本教イスラーム派になっていくわけですね。例えばサラリーマン、会社勤めをしているわけですが、礼拝を時間内に幸いさせていただいておりますけれども、何と言いますか階段の、会社から認められているわけではなくて、自分で何とか頑張ってやっているわけですが、例えば様々な境遇で、できない人がいる、できない人にやれと言ったって無理な話なわけですね。だけど、だから、いつかできるように、いつかできるように頑張りましょうと。少なくとも、帰ったら埋め合わせの礼拝をするのですとか。そこで大事なことは、日本では時間内に時間通りに礼拝するのは厳しいから、1日2回とか3回でいいんだ、3回が正しいんだとかですね、そういう試みが、イスラーム史を紐解くと、80年代にちらほらあったと伺っておりますけれども、そうなってしまえば後につないでいけないのではないかと。正しく伝えていけないのではないかと思います。

長くなりましたが、私がお伝えしたいことの最大のメッセージは、ただただ2点です。次世代教育とロールモデルの確保。私たちは預言者ムハンマドの孫弟子にあたるハサン・バスリという学者先生の言葉に「人よ、おまえは幾日かの存在にすぎないのだ。1日が過ぎ去れば、お前の1部が過ぎ去るのに等しいのだ（アラビア語でも朗唱）」といったものがありますが、みなご存知のように、私たちは過ぎ行く存在です。次に来る人たち、次の人達につないでいかないことには、つながらないと思います。以上、雑多なお話でしたが、ご静聴ありがとうございました。

メイモン：

前野さんどうもありがとうございます。非常に興味深い話をさせていただいて、私がまとめる必要もなく、最後にご自分で2点がメインであるとまとめてくださいました。本当に、日本でどこまで調整する必要があるかという課題が、先程の話にもあったし、日本だから調整する、しかし調整しすぎると、やはり日本教ということになってしまう怖れもあるということでした。それから次世代に繋がるための次世代の教育に力を入れなければならぬというようなお話をさせていただきました。

この問題提起していただいた事に関して、みなさんからご意見をいただいて、議論して

いきたいと思います。こちらから振ってもよろしいでしょうか。ではまず浜中さん、お願いします。

浜中：

感心して聞いておりました。素晴らしいと思います。何も反論することがないので他の人に…

メイモン：

誰も何も反応がないから、これで今日の協議は終了ということにしますか。みなさんの意見とか…、はい、では樋口先生お願いします。

樋口：

共感するところも多いのですが、私もムスリムのサラリーマンだったんですね。前野さんと同じ境遇にいて、前野さんはサラリーマンでシェイフを目指すということでしたが、私はサラリーマンでムスリムをめざしていたわけですけれども、同じサラリーマンと言っても、会社の性格によって非常に違うと思うんですね。前野さんの会社は〇〇とって、イスラームが非常に理解された企業という点では、私のいた会社とはまた違ったメリットがあるだろうと私は思うのですが、ちょっと参考までにお聞きしたいのですが、サラリーマンとシェイフ、これの比重ですね。後で、私が共感する発言もありましたので、敢えて突き詰めるわけではありませんが、実感として、どんな比重で考えておられるかということのひとつ。

それから、先輩からのつながりがない、要するに世代のつながりがないというのは、我々に対する率直な批判だと私は思いますし、私は1963年に入信しましたから、ほとんどのみなさんが生まれる前なんですね。47年になりますから、半世紀ムスリムとして生きて来たわけなんですから、入信する環境が今とは全く違うという話なんですね。今はイスラームがいいとか悪いとか、関心は持たれていますが、あの頃は無関心ですから。知らないんですね、イスラームなんて言葉は。そういうところから入ったという環境の違いがありまして、ですから今の我々の世代のムスリムというのは、個人的な問題を抱えて、それを将来的に打破するには何がいいのかと考えるのに、まあ人のやらないことをやろう、じゃあアラビア語をやろうとか、それぞれの理由があったと思うんですね。そういうことで、自分ひとりの問題に生きるので精一杯で、それを次の世代に伝えようという意識はまずなかったと思いますね。それは私の体験の話ですが、ほとんどそうだと思います。ただひとつ理解してもらいたいのは、それまでは日本ムスリム協会、山岡光太郎とか、いろいろ先代はおられましたけど、その人が亡くなったらほとんどその後継者がいない。だけど我々のやってきたのは、組織をつくったということなんです。1952年に日本ムスリム協会が、戦後混乱の中で、お互いの助け合いの精神で生まれました。今でもこんな小さな協会でし

かありませんけれども、しかしながら、おわかりいただきたいのは、組織として、いろいろな体裁を整えてきた。そして大きな仕事は、留学生を送ったということなんですね。60人から70人送っているんですよ。今はもう留学するにも何をするにも、個人ベースで自由ですよ。だけど、我々の頃、海外旅行なんて夢のまた夢です。留学なんてのは夢のまた夢ですよ。これにみんな我々飛びついたわけですね。そういうその国内ではできなかったんだけど、外国のムスリムの人達との人間関係をつくって、次の世代を留学生として派遣していった。これは認めていただきたいと思います。弁解するようで申し訳ないのですが、当時、留学といえばエジプトのアズハル大学しかなかった、それからサウジアラビア、シリア、湾岸諸国。いろいろと多様性ができ、それぞれが勉強して帰ってきますから、日本人のムスリムの中でも、考え方に非常に多様性が出てきているわけです。ですから我々の世代とは全く違った形で、前野さんが言われたように、自分の子どもたちもムスリムの家庭で、日本の社会で通用するような子どもに育てたい。それは素晴らしいことだと思います。私は嬉しく思いました。そして今の発言の中にあつた、日本人ムスリムとして自覚し、実践し、誇りを持つということは大事ですね。またバランスの中で生きるということもありました。日本人としての常識を持った日本人であり、またムスリムであること。この中道とか中庸、これこそまさに私が求めていたことで、非常に前野さんの発言を聞いてうれしいと思いました。そして企業のなかにあつては、日本人ムスリムとして、他の会社の人間と対等に生きる、対等に立って生きる人間にならなければならない、日本社会で活躍できるムスリム。まさにこの世界ができてくればですね、日本のイスラームに対するイメージは物凄く変わると思います。ですから先程申し上げましたように、幼児の教育にしても、ほんとにその偶像崇拜でも、極端にやってはいけないということです。そんな偶像の絵を描いてはいけないと言ったら、学校で先生に「これから絵の時間ですから、ゾウさんを描いてください」と言われた時に、「いやこれは偶像だから描きません」。子どもがかわいそうですね。ですから、そういう議論は本当にうれしい。本当は聞いて感動しています。私も企業の人間として思ったのは、日本は、一応宗教的なものはもっているんだと思いますが、宗教だけでですね、宗教に対するアレルギーはあると思うんですね。これはいろいろと問題があるとおもうのですが。私は仕事は戒律だと思っています。イスラームだって仕事を非常に重要視しています。仕事を無視してイスラームに走る、というのは戒律を破っていると思います。特に日本の風土というのは勤勉さ、学問、仕事、ソニーの創始者である井深さんの言葉ですが、仕事の報酬は何だと思いませんか。仕事の報酬は仕事よ、と。こういう風なことを言われることがありますけれども、日本人が仕事を軽視した生活をやったらイスラームの布教も何も、できませんね。説教じみて申し訳ないのですが、私は今日、非常にある意味では、若い日本人ムスリムの発言を聞いて、非常にうれしく思っています。是非今の考え方を持続していただきたい。こう思っています。ありがとうございました。

メイモン：

ありがとうございます。いろいろと個人的なご意見もあったのですが、主に、前野さんのご意見に対して、反論的な部分もあったので、やはり次世代とのつながりが無いわけではなくて、我々は我々なりに努力してきたということなんですが、そしてあとサラリーマンシェイフについてということですかね。お願いします。

前野：

はい。まず、私の言葉が足りなかったこと、社会人としての未熟さをお詫び申し上げます。もちろん、先輩方がやってきてくださったこと、組織化は非常に大きなことだと思っておりますし、そもそもここまで、樋口さんの場合で言うと46年ですか、半世紀近くにわたって、日本でムスリムとして頑張ってきてくれた、それだけで尊敬しております。加えて、ムスリムの方はご存知の通り、これは日本の美德にも共通することですが、年長者を敬うべしということからも、十分尊敬しておりますし、評価していないことなど毛頭ございません。

まず、ひとつ質問がありました。サラリーマンであることと、シェイフであろうとするものの比重はどうかと。これはノーコメントとさせていただいてもいいですか。もし言ってしまったら、サラリーマンでやっていけなくなってしまうかもしれませんので。まあほぼ週末なしで、いろんなことをやらせていただいておりますので、推して知るべしと言いますか。

メイモン：

それはまたプライベートのことですので。  
ということですが、よろしいですか、樋口さん。

前野：

ひとつこれは、樋口さんが本音を打ち明けてくださいましたので、私も本音でお返しするならば、特に樋口さんは本を書いています。『日本人ムスリムとして生きる』という本です。その多くは共感することばかりなわけですが、最後にひとつ、若い世代への懸念が述べられておまして、それが若者たちへとひとくくりに言われていることもあってですね、翻って、私個人の将来、インシャッラー、もし命あらばですけども、年終えた時の気持ちはこうありたいという話からさせていただきますけども、私としても当然、例えば理想のシェイフとしては、サラリーマン生活を送っている以上、本分を全うできないことは多々あるわけで、不完全なところはずっとあり続けると思います。そんな中で、次の人につないでいく時に、私はこれだけしかできなかったから、君たちにはがんばってもらいたい、と言いたいなど。私はできなかった、だから君たちもほどほどにしておきなさいじゃなくて、というのが本音でございます。懸念されるお気持ちはよくわかりまして、一部の若い世代の中からはですね、先程仕事の大切さを言われておりましたけれども、全

くおっしゃる通りです。仕事としてイマームにつく、これはこれでそれを全うすれば、誠実な気持ちで取り組めば、大事なことなわけですが、中には、仕事をしないでという人もいます。新しくムスリムになった。日本人がムスリムになったということは、みなさんご存知の方もいると思いますが、外から来るムスリムにすると、すごく大きな喜びのようなんですね。みんながみんな、一様に入信物語を聞きたがります。それぐらい感動的なことのように、日本人が、日本社会で、モノの力から言えば世界 2 位とされるような国で育った人たちが、どうやってムスリムになったのだろうと、みんな興味津々で、そんな中でムスリムになった人ですから、期待されるべきは、本来は、イスラーム世界の、ムスリム世界の助けに、貢献を期待されるわけなんですけれども、それが中には、おんぶに抱っこで終わってしまうケースもありますので、そのご懸念はよくわかります。もちろんそうであってはならない、仕事も立派な信仰行為のひとつだと、教えてくれるのがイスラームですので、改めてのご教授ありがとうございます。

メイモン：

二人だけになってしまうといけないので、他の方に聞きますが、先程の前野さんのお話の中で、第 2 世代への教育の問題、ジェネレーションギャップとか、つながりの問題もありましたし、日本人としての部分とムスリムとしての部分のバランスのお話だと、いろいろあったのですが、皆さんはそれについて、ご意見や反論、賛成どちらでもいいのですが、是非皆さん一人一人に伺いたいのですが。

オバリ：

前野さんがおっしゃった、ムスリムと日本人とのバランスのお話に感心していたのですが、アルハムドゥリッラー、アッラーのおかげで、イスラームのルールや、イスラームの教えは本当に柔らかさがあります。ある程度の柔らかさがありますので、昔の学者も言っていたのですが、アラビア語で言うと、「どの社会でも、どの時間でも、どの国でも、イスラームは当てはまる（アラビア語でも朗唱）」もちろん完全に当てはまるわけではなくて、優先すべきこと、信仰箇条は変わりません。でもその次、信仰行為の中に、しなければならぬこともあるし、これは時々やめてもいいということもあります。そして、した方がいい、でもしなくてもいいということもありますから、この中で、バランスが調整できるのではないかと思います。前野さんにまた聞きたいと思いますが、イスラームのどこで調整できますか。バランスをとろうと思ったら、どこで調整が必要ですか。イスラームのルールや教えの中で。

メイモン：

どうしてもやらなければいけないものと、まあ日本社会だからやらなくてもいいというラインをどこに引くかということですね。

前野：

それについてはですね、イスラームの教えの中で、何が義務とされるほど大事で、譲れないもので、何が薦められていることで、何がやってもやらなくてもどっちでもよいもので、何ができれば避けた方がよいもので、何がなんとしてもさけるべきだとされているか、といった信仰行為として従うべき、指針がはっきりと、優先順位がはっきりと示されている。それを基準に、まずのこの日本では、どうしても譲れないということに重点をおいてですね、それを守る、それをきちんとこなしていくことを目標にして行きたいと。例えば、髭ということもありますが、私は、会社の性格によりけりということもたしかにそうなのですが、実は私が勤めている会社は、私で日本人ムスリムが6人目だそうです。もう50年以上ある会社なのですが。とはいえ、時代の趨勢的な流れからもあったようでして、先輩方は会社で礼拝を敢えてしなかったりですとか、そういったほどほどにしておきなさいという慣例をつくってしてくれたようなのです。なので、私は入社時に、もちろんムスリムとわかっていただいて、いわゆるアラビストとして、イスラーム、アラブ圏、中東の専門家として、雇っていただきましたので、ムスリムであることはわかってもらっていたわけですが、あくまでもイスラームの色は出さないようにと、釘を刺されて入社しております。ですので、あえて会社の方から礼拝の場を提供してもらったりとか、そういったことはありません。話がそれてしまいましたが、礼拝、例えばそれは譲れない、ただ髭、これも学者先生によって見解は分かれますが、一般的な見方としては、あくまでもスンナとされる推奨行為なんですね。ですので、境遇的に難しいのなら、別にそれをがんばって保持して、仕事を失ったり、まともに働けなかったり、それこそおんぶに抱っこで他の人のお世話になってしまったり、というのは本末転倒なお話であって、優先順位をはき違えているということになるわけで、あるいは、他の具体例が少し出てきませんが、ヒジャーブの問題ひとつにしても、それは理想、目標です。それは忘れないでいただきたいが、すぐにはできない、構いません。すぐにはできないのだから、ステップ・バイ・ステップで結構です。だからと言って、それがあから、わからないから、自分にはできないから、イスラームは辞めた、というのでは、それこそイスラームの信仰を守るという優先順位を見誤ったものになってしまうわけですね。というので、何が一番大事とされていて譲れないか、まずそれを守っていくこと大切ではないか、ですからイスラームをよく勉強することですと言う答えになるわけですが、それを基準にということだとも思います。

メイモン：

つまり義務は絶対譲れないけど、推薦されていることは場合によってということですね。

前野：

私はシリアで学んだ時に、最初に通わせていただいた学校が、今はシェイフアフマド学院

と言っていますが、当時はアブーヌラフィンと言ってたんですが、全シリアのグランドムフティ、シリアのイスラームの最高法官の方、グフタード先生と言ったんですが、その先生に私もその髭で、他のムスリムの同胞から、色々、はっきり言って悪口ですね、その髭を生やしてないからダメなムスリムですとか、悲しいことですが、そう言ったことを聞いて悩まされていたので、先生に尋ねたところ、「私の鬚はここにあると言いなさい」そういった回答をいただきました。

メイモン：

はい、ありがとうございます。ハールーンさんは何か、お話についてご意見があればよろしくお願いします。

ハールーン：

先ほど、前野さんがおっしゃったように、テイクケアがですね、とても大切に、今はそれが足りてないんですね。ムスリム中で、やっとな女性たちの中では少し活動がありますけれども、ムスリム協会もそうですし、大塚モスクやそれからイスラミックセンターとかも女性たちの集まりがあって、新しいムスリマが学習すると、シスターたちがかなり面倒を見てくれまして、テイクケアができるんですね。残念ながら、今のところ男性についてはムスリム協会ですらいろいろとやっているようではすけれども、大塚モスクの方で言えば、あまりそういうことができてないんですね。結構シャハーダする人、改宗する人は男性でもいるんですけども、その後どうすればいいか、もちろんその時もムスリム協会のことを紹介したり、そこはたくさんあのムスリムなんているからそこを訪ねてくださいってそういう紹介はしますけれど、結果的にテイクケアできてないんですね。そこはもうちょっと力を入れなければならないかと思います。

メイモン：

はい、須見さんは北海道の状況はどうでしょうか。やはり他のムスリムたちとの横のつながりとか、新しくムスリムになったり人の事後のケアという面でそちらの状況をお話していただければと思います。

須見：

はい、日本におけるイスラームで、僕的に一番欲しているもの、足りないものはですね、前野さんのような正しい知識を日本語で説明してくれる方が非常に少ないということですね。僕自身もこんな格好はしてますけど、全く知識は全然乏しくてですね、そういう日本語にされてる本は読んでるんですけど、それ以上に知識を求めたくなると、もう壁がでちゃうんですね。私みたいに日本語しかできない日本人からするとね。そんな時に、大学などに行ってアラビア語ができたり、正しい知識をきちっと回答してくれるような日本人

がいれば、非常に助かりますし、また今言われたように、僕より若いムスリムの人にも僕なりにケアとかはしてますけど、やっぱり知識のなさで質問ができない時は、前野さんにこそっとメールしたり、電話をしたりして、正しいことを伝えるようにする努力はしております。札幌ではですね、マシジドがありますので週に1回、日本語による勉強会っていうのをですね、3年くらい続けてまして、これはムスリムの方が、ノンムスリム方やイスラームに興味があるっていうような方が毎週来てくれております。はい。

メイモン：

みなさんの話にもありますが、自分がもう日本で生活しているムスリムとして感じることは、やはり日本語で、次の世代とか他の新しくムスリムになってくる人たちのために日本語でいろいろ説明すること自体がとても少ない。やはり前野さんがたぶん積極的だと思うんですが、自分からいろいろそのイスラーム教育を受けるとかいうのは、でもそうでない、やっぱりシャイな日本人を導くシステムが、やっぱり必要ですよ。それにはもう日本語ができる日本人ムスリムと、あるいは外国人の方でも日本語ができてやっぱり心の中まで通じないという部分はあると思いますね。ですからそっち側の方がもっと難しくなってしまうですね。レカさんはどうですかね？そちらで、名古屋でそう言うムスリム、新しくムスリムになった人のケアのことで問題を感じられるとかいう、そういうことがおありでしょうか？

レカ：

さっきも言いましたように、名古屋でも他の地域と同じように、新しくムスリムになった方々はほとんど女性の方が多いですから、彼女たちの場合に週1、2回くらいは、モスクの2階、たぶん2階だと思いますが、そこで勉強会があってそういう教育をしているんですが、ただ男性の場合は、残念なことに全くそのアフターケアのようなことは細かくありません。それから人数的にも男性は非常に少ないですから、前野さんのみたいにこう自力で、すべてを勉強しているすごい立派なムスリムになった方は非常に少ないですから、私の方からもかなり期待をしているんですが前野さんの方から将来のために、その基盤作りだとか、それから次の世代でそれを使えるような、やっぱり彼が、そのさっき彼の話にあったように、そのモデルみたいな方ですから、それは是非その道を生かして、次の世代に残すために、次の、これからムスリムになる人たちのために、その道を作って、その基盤を作って、これは私の方からも、他の方々からもたぶんそういう期待があると思いますから、是非がんばってほしい。

メイモン：

レカさんの話にもあったように、やはり数の問題もあるんですよ。特に男性ムスリムは数自体が少ない。ですからどうしても今あるモスクでは外国人ムスリムが多いから特に



その地域では、例えばある地域ではアラビア系が多い、ある地域ではパキスタン系が多い。そうするとこう言葉とか説教とか、やはりそちらの言葉のほうにどうしてもなりがちなんですよね。で、よく話があるには、それは我々外国人ムスリムが、日本人ムスリムが出てくることを、その何て言うんですか、邪魔になっているんでしょうか、それとも日本人ムスリム側に問題があってなかなか出てこないのかというのがよく出てくるんですよね。ただちょっと数で言うと、ちゃんとしたことは分からないんですが、四国では特にインドネシア人女性たちと結婚されたりする、日本人男性ムスリムがたくさんいらっしゃるという風に聞いていますが、そちらではどうでしょうかね。状況がちょっと違うんでしょうか？ 浜中さん。

浜中：

はい、なんかパキスタン人の方は、あの女性が日本人であるみたいなんですけれども、四国では逆にあってまして、インドネシア人ムスリムと男性が日本人なんですよね。ただ、やっぱりなかなか難しいのは、女性の方たちはもともとネイティブなムスリムなんで僕たちの話もわかるし、すぐ集まってくれるんですけど、日本人の男性がなかなか masjid に集まって来てくれないのも 1 つの問題で、かなり敷居を低くして受け入れないと、とりあえず来てもらわないと話が始まらないので、ただ単に食事会をやってるような形でやっています。来週他にも集まりがあるんですけど、それはインドネシア人の集まりなんですけれども、やっぱり大半が女性がインドネシア人で男性が日本人という形なんですけれども、やっぱりいかにしてその男性の日本人にイスラームを理解してもらうか、いや今までもイスラームにちゃんとなっているんですけど、そこまでというか、ですね。それからちょっと上手にこちら側としても集めて、とにかく集めたらじわじわとこう出していけるような形でいかないといけないですかね。四国には結構インドネシア人が、中小企業とかに技能研修という形で入ってきているんですけど、その日本の社会に埋もれてしまって、あんまりイスラームに興味を持ってない人が多いというのはよくあります。ちゃんと masjid という看板は出しているんですけど、人づてに聞いてたまに来ることがあって、で、雑談なんかするんですけど、礼拝時間がきたら、「あ、礼拝しよ」とかいうと、「ああ自分もうちょっと何か月も礼拝してなくて」と言うのと、でもその人と何回も一緒に礼拝したりすると感激して、1 回礼拝しながら涙を流しているインドネシア人がいたんですけど、これからいつ日本に来て礼拝一緒にしましょうみたいな感じで結構うれしかったんですけど、四国はそんな感じで、インドネシア人であれ、インドネシア人と結婚した日本人であれ、何とかして masjid に足を運んでもらって、彼らの状況を見ながらこう時間をかけて、イスラームに行ってもらいたいと考えています。

メイモン：

つまり四国もまあ関東とかだいたい同じような状況ということですね。なかなか、日本

人男性が、ムスリムでありながら出てこない。でもそれがもしかしたら前野さんがさきほどおっしゃったように、そのバランスの問題ではないでしょうか。やっぱりイスラームと日本人の間のあまりにも自分が日本人である、日本人スタイルを重視して仕事のあとの同僚とのつながりとかそっちの方を重視してしまっているという風にちょっと思うんですが、前野さんはどうお考えでしょうか。

前野：

私は、出張講義等で、全国行脚ではないですけども、回らせていただいているなかで感じるのは、そうでもなくて、むしろ普通に忙しいからではないんですかと思います。週5日仕事をしてですね、休みは良くて週2日ですね。最近では景気の部分もあって土曜日の出勤とかもあるでしょうし、そんな中、私もその各地でいろいろと授業をさせていただいているわけですが、ほとんど9割方が日本人の姉妹、シスターの方々です。本当に日本人ムスリマ、女性の方が多いです。1人でも2人でも日本人の男性の同胞がいてくれると飛び上がるようにうれしいわけですけども、そこまでの意識に、そのモチベーションに至っていないのはなぜかっていうのを、私はある同胞にどうしてだと思っただか、参考に聞いてみましたところ、やはり一番に挙げたのが、忙しいからでした。ですので、大抵はもし2日休みがあればですね、1日は完全な休養に取りたいというのが、一般の人の現状だろうと、もう1日は自分の趣味ですか、趣味の時間ですね。ですからそこでそのイスラームを学ぶというところまでいかない。もう1日あったらいいのになんていう気持ちなんですけれども、これが現状なんだろうなという思いです。ですからそのためにもモチベーションのアップのですね試みとしてはやはり、浜中さんも言われていましたように、まず会って「ムスリムといるのが楽しい」、「ああこの人と一緒にいると心が安らぐ、いいな」という感覚づくりから始めるしかなんじゃないかなと思っております。

メイモン：

やはり単純に忙しいということであっても結局は、やはり学んでいただいたり、イスラームにもっと関心をもつていただかないと、結局は前野さんのおっしゃった次の世代へのつながりが、お互いに奥さんがいろいろ教えていても、なかなか子どもの教育はお母さんだけ、お父さんがどうも頼りにならないという問題にもなってしまうですね。ですから、やはりきっかけ作りが必要ですよね。忙しいとか何とか理由はあるんだろうけど、何とかして来ていただくしかないという風に私が思うんですが、先ほど浜中さんが仰ったように、そういう食事でもいいから、取り組みを作ったり呼んだりする以外にも方法とかあるでしょうか。

浜中：

前野さんが先ほどおっしゃっていた忙しいから来れないというのは、確かにそういう人た

ちもいるかと思うんですけれども、僕が言っていたインドネシア人と結婚した男性はもうちょっと違う感じの人が、信仰を持っているのかなっていう、そういうレベルの人たちなんですよ。そういう人たちにどうやって信仰を付けていこうかという、前野さんがおっしゃっているようないわゆるその忙しいから来れないという人たちはしっかり信仰を持っていて来れないというかな、それか言い訳として言っているのか、ちょっとそのあたりはわからないのですが、それと少々忙しくっても気持ちさえあれば出てくることだと思うんですよ。例えば前野さんなんて仕事をずっとやっても土日はずっといつも masjid で説教してますから、そういうやる気のある人たちっていうのはなんぼでも来るでしょうし、そのあたりは信仰の強さ、やる気のある人はイスラームを何とかしてやろうという気持ちがある、それだけの違いだとおもいますけどね。

メイモン：

はい、ハールーンさん。

ハールーン：

そうですね、残念ながら結婚のために入信して、その後はあまり・・・それは入信しないと結婚できないから入信したことにしたんですね。私は樋口先生にお聞きしたいんですけども、男性、日本人の男性が一番集まるところはたぶん日本ムスリム協会なんだと思うんですけども、masjid を使う人、最近、金曜日のフトゥーフですよ。3年4年前から毎週金曜日に日本語でもやってまして、それは永井先生がやるんですけども、最近、そのフトゥーフに数人ですけどもね、日本人男性同士で残るんですけども、樋口先生の今まで経験としてはどうやって、日本人の特に男性ですよ、もうちょっとイスラームに近付くためにどうすればいいかっていう意見をお伺いしたいんですよ。

メイモン：

樋口先生。masjid ではいろいろなことをやってはいるんで、やはり日本ムスリム協会に話が来たりということですよ。男性が多く関わっているのが日本ムスリム協会ということですね。

樋口：

それがわかれば、問題ないんでしょうけれども・・・。その前にですね、さっき前野さんみたいにイスラームをよく勉強した人が少ないっていうのは、確かに言ってる人は少ないんですけど、結構日本人ムスリムが留学して、勉強して知識の持った人は、それなりにおられるんですよ。ただ、前野さんみたいにこういうところへでてきて話をするような人がいないっていうそういうことがあるわけです。それがなぜかっていうことは、それは一人ひとりの仕事環境とかいろいろの事情があるという関係ですが、そういう我々が送っ

た留学生の中にも、教職に立って教えているという先生もいらっしゃいますし、そういう人たちがもっと表に出てくるようにならんといかんと、そう思うわけです。アズハル大学の出身だと思うんですけど、そういう全く知識を持った日本人ムスリムがいないというわけではないんですよ。だからムスリム協会あたりに講師をやってくれという依頼を出せば、受動的な態度になりますが行ってお話しすることは受けると思いますね。それから日本人ムスリムで金曜日の礼拝とかそういったところに参加できないというのは、これはやはり金曜日の礼拝は仕事の関係がやっぱり大きいと思うんですよ。私が現役の際は金曜日の礼拝はよほどのことがない限り私は行きませんでした。そういうことから考えますと非常に難しいことかなと考えるんですが、ただですね、忙しいということを隠れ蓑にしてね、なんか弁解がましく言ってるように思う時があるんですよ。例えば、年2回の開催でもですね、忙しくて来れないという人がいるんですけど、それはあり得ないことですよ。サラリーマンっていうのは必ず年休っていうものがあるわけですから、イードアルアドハーとイードアルフィトルっていうのは大体いつやるか決まっているわけですから、事前に年休申請することくらい大したことない。中小企業でそういったことができない場合もあるとは思いますが、私はそういう風に対応していましたけれどもね。金曜日のフトゥーフは、東京ジャーミイや大塚モスクは日本語でやっているんですよ。ですからこれは会員の人には知らせた方が良くということで、私たちはムスリム協会の会報には、東京ジャーミイと大塚モスクのフトゥーフは掲載しています。今のところ、そんな形ですね、伝達していつているわけですが、やはり一人ひとりの家庭生活等を考えると土日は自分の生活が欲しいっていう人が多いんじゃないかなとは思いますがね。それはイスラームでは大事なことであると思う。今はね、いろんなところから知識が一般に入って来てね、身動きができなくなっているムスリムがいるような気がするんですよ。各グループで勉強会勉強会ってやっているじゃないですか、そうすると週末はないですよ。プログラムの情報も活発になってきていますから、私自身も選択してそれを受けに行くわけですから。だからやはりその知識をですね、彼らから得た知識をうまく実践できるような話し合いの場、っていうのがむしろ大事でないのかなっていう風に私は考えております。私は知識と、教えられた知識と実際に実践する間にも、いわゆるその板ばさみになったような、悩みというか、方法をどういう風にやればいいのかっていうことを彼らは思っていますから、そういうのをうまく優しく包みとってですね、決してその戒律から行くのではなくてですね。ちょっと、いいですか。長くなって。

メイモン：

はい

樋口：

申し訳ないんですけども、私が生きてきてのことなんですが、神の教えというのはす

ごく重いものだと思うんですよ。でもイスラームとは限らずにですね、他の宗教の教えともすごい厳しいものなんです。イスラームのクルアーンの教えっていうのは、すべての信者が、本来ならば守らなければならない戒律だと思うんですよ。すべて、ただ豚がだめだ、酒がだめだ、ただそういう例えの戒律じゃなくて、クルアーンの詩、そのものでもある意味では導きであると同時に人間に要求されたものだと思うんですよ。しかし、イスラームは本当にいい宗教だと思うんですが、意外に慈悲深いんですよ。神の慈悲で謝ればがゆるされるんですよ。だから、もっと遠慮なくですね、戒律ができなかったら、許しを乞うて謝ればいいと思うんですよ。そうすれば許される。ただ、その後それを償うだけのサダカやら何かやらなければならないとか思うんですけども、そうすると非常にイスラームは寛大でいい宗教だと思うんですよ。そういう風なその神様だって人間が現にできるとは思われてないわけですよ。クルアーンの中にもやはり人間ができないものを押し付けはしないっていうのがあると思うんですけども。私どもが発行した日訳対訳クルアーンを訳された三田先生が言っていた話なんですよ。ご自分も70歳になってから奮起して、立派になって、パキスタンでハーフィズから習って訳したんですけども、それで三田先生がよく言ったこと、アッラーは無理なことを押し付けるのではないと言うようなことを言ったのを思い出したんですけども。そういう風に考えるとイスラームというのは非常に合理的な慈善深きいい宗教だと思いますけれどもね。だからちょっと話がとんでしまいましたけど、じゃあ一応。

メイモン：

はい。日本におけるイスラームという題で今一応議論していただいている訳ですが、特に日本人のムスリム、その中でも特に男性という話になると、なんかみなさんの意見を聞いて、2つのグループがあるという風に伺いますね。1つは、仕事とか何らかの形で忙しいからモスクまで足を運べない。それともう1つが、信仰が薄いからどうも関心を持たないということですが、どちらにしてもやはりムスリムになった以上はなんかしていただかないと、来ていただかないと、なんかただ忙しいからというのはちょっと。でもそれは日本人ムスリムだけではなくて、外国人の我々も多くの方がサラリーマンでありますね。ですからサラリーマンは金曜日の礼拝には行けない。でも夜の礼拝には外国人、もちろん外国人の中でも行く人と行かない人がいるんですが、やはり頑張れる人は頑張れるという風な気がするんですが、どうでしょうかね、前野さん。やっぱり信仰の薄さが問題であるのでしょうか。

前野：

すいません、それには私の補足として、日本人ムスリム男性が伸び悩む理由は、原因は日本人ムスリム側にあるのか、それとも外国から来るムスリムの側に問題があるのかという問題、課題提起がレカさんの方からありましたけれども、私は相互にあると思っています

して、日本人ムスリム側としてはやはりロールモデルがないわけではないですが、まだまだ少ない。新しくなった方、あるいはほとんど気持ちのない方が、信仰があるのかどうかクエッションマークがつくような方でも、一緒にいていい人だとか気持ちが安らぐ人とか、あの人が頑張っているから私も、というような、気持ちを抱けるようなロールモデルが 1 人でも多くなれば、多少は解消されてくるのではないかと思います。一方で、外国から来るムスリムの方々にこれはお願いなんですけれども、みなさんここにいてくださっている方は、このお願いを特に新しく日本に来た方々に伝えていただきたいんですが、みなさんのように在日歴が長い方は問題ないんですが、問題ないというよりむしろ私たち日本人の助けになっていただいているわけですけど、問題は特に地方によっては例えば福岡ですとかその留学生団体ですとかあるいは労働者でも新しく日本に来た方たちがその地域の活動の中心になっているようなところなんです。そういったところでは、日本社会がわからないまま、自分の出身地なり外国の、あるいは一部の国で正解とされているものを、日本でも今日その日にすぐ達成されなければだめだみたいなですね、そういうノイズ、ノイズをたくさんくれるので日本人ムスリム、特になりたてのムスリムとして自信のない人としては、今日まだなつたばかりの人にこれもあれもあれもこれも、まだ例えば信仰すら固まっていない、まずそれから固めるのが順当な優先順位であって、それで行いとして一番大事なものの礼拝、それもまだ確立されるまでに時間がかかるわけです、ステップバイステップでいいわけですよ。ですけれども、そういった人はまだ、そういった人は親切心から自分がしていること全部を教えようとしてくれて、これもあれもやりなさい、これもあれもしなさい、いっぺんに教えようとしてくれてついていけない。これならもう、要するに「ムスリムと関わりを持たない方がいいや」という結論になってしまう。そしてもう自分が持つ気遣いでもう出てこないという状況になっているところもあると思いますから、大体言われているのが、4、5 年日本にいとだんだん自分がどんなに気持ちばかり強くて日本の人に素直に伝えたいと思っても日本のことがわからないとだめだと悟ってくれるようです。これは須見さんが補足してくれた、私も事前に補足したことです。日本人の日本人による日本人のためのイスラームを大事にしていく一方で、在日ムスリムの在日ムスリムによる在日ムスリムのための強化活動といいますか、促進活動と言うものを大事にしていくべきではないかと、そういうことで私も大いに賛成いたします。

メイモン：

いま前野さんのお話から、外国人ムスリムのあなたたちにお願いがあるとされたからちょっとびくっとしちやって、私たちそんな悪いこと言ったかなって思ったんですが、あーよかった。来たばかりの人たちが問題だってだけで。それは別として、そろそろ時間がなくなってきたんですが、レカさんから最後に何かご意見を伺って、このコーナーを終了したいと思います。

レカ：

今その日本人の男性のムスリムの人たちがなぜそういう興味がないのか、信仰がなぜ浅いのかということについて、私の考え方なんです、その問題はおそらく以前ムスリムになった方々、あるいはそのオールドムスリムとか地域に住んでいるムスリムの人たちの責任だと思います。例えば名古屋では週 1 回土曜日に勉強会がありまして、そこにみなさん参加するんですが、ただその、日本人男性の場合は多少恥ずかしさとかいうものがありますが、できれば私たちイスラームの間っていかムスリムの人たちはできるだけ、イスラーム社会から離れないように仲間を作ってどっか固まってやるように活動しましょう、礼拝に参加しましょう。とにかく固まって仲間になりましょうという話がしばしば、そのフトゥファに、金曜日の礼拝にそういう教えが伝えられるのです。新しくなったムスリムの人たちに、声をかけてしつこく何回も何回も、友達になって仲良くしましょうという、1 回目には何か理由があって例えば来れない場合、あきらめずに、とにかく声をかけて呼び寄せるようにするのが一番よい方法ではないかと思いますね。何年も何年経ってももう 1 回声をかけたら、とにかくあきらめないで彼らと呼ばい寄せるようにして、だんだん仲間になれば。例えば名古屋の場合は、私たちは土曜日は食事会を作るんですね、勉強会の後に。勉強は、例えば 8 時から 9 時に終わったら必ず誰かが、あるいはそのモスク自体が、そのモスク自体が食事を準備して 10 人 20 人 30 人くらい参加した場合はみんなそこで一緒に食事をするのが、私たちのルールなのです。そのような機会というか、そういう場を作って新しくムスリムになった日本人たちを、つまり孤立しないで、あるいはどっか離れたところにいるのではなく、自分の仲間だよって私たちが兄弟になりましたよとか、仲間だよという風に声をかけて呼び寄せるのはどうかなってというのが私の考え方なんです。

メイモン：

つまり私たち外国人ムスリムが日本人の新しくなったムスリムに対して善意を持って彼らのためであると思いつながり積極的にやることがかえって彼らの負担になるというような感じですね。みなさん、ご意見ありがとうございます。なかなか日本におけるイスラームをまとめることは難しいんですが、みなさんの今の話から考えたのは、やはりシステムができてないというのが大きいです。日本では、最後に前野さんがおっしゃったように、特に留学生が日本のことがよくわかってないのに、いろんなこういう活動が日本人ムスリムの負担になるとか、そういうのもやはり、日本にシステムができていないからということですね。例えば、今、外国人の留学生がいろんなところでずいぶん積極的にモスクを作っているんですが、もともとその地域にモスクがあれば、その人たちがそこで吸収されるんですよ。でもないから自分たちで積極的に作る。そうすると、やっぱり自分たちがそのリーダーになってしまう。自分たちで自由に運営をするということになってしまうんです。ですから、もともとの我々外国人ムスリム、あるいは日本人ムスリムたち、あるいは何年かたってわかってきた人たちが、一緒になってシステムができていけば、そうい

う新しくなった日本人ムスリムもそうですし、新しく外国から来た人たちにも、吸収のような場合になるというようなことがあればもうちょっとうまくいけるかなってというような気がします。そういうことで第 2 セッションを終わらせていきたいと思います。この後、アスムの礼拝とコーヒブレイクがありまして 3 時半から第 3 セッションを始めたいと思います。

店田：

ありがとうございました。これから 30 分間休憩ですが、後ろの方にお茶、左右にご用意していますので、ご自由に。ハラールフードのおかしも置いてありますので、そちらの方はノンムスリムの方ももちろん食べられますので、どうぞご賞味ください。それではまた、30 分後をお願いいたします。



## セッションⅢ「マスジド・ネットワーク」

メイモン：

今日『ムスリム・ネットワークと日本人ムスリム』という題でセミナーを行っておりますが、セッションⅢ、「マスジド・ネットワーク」という話に移りたいと思います。マスジドネットワークについて、問題提起というか情報提供をしてくださるのが、浜中さん。お話しした後でまた議論をしたいという風に思っております。それでは、浜中さんどうぞ。

浜中：

アッサラーム・アライクム。まず自己紹介からさせていただきます。皆さん多分わかると思いますけれども、私は四国の新居浜に住んでおります。スポーツ用品店を営んでおりまして、全然イスラームを研究する研究者でも何でもないんですけど、若い頃にマレーシアとアラブ諸国で留学をしておりました。25年位前に帰ってきて、それからずっと四国の方で自営をやりながら、アルダアワ活動という形でやっております。2つのセッションで、いろいろと話をしている、どういう風に結論が出てくるか、僕が予め用意してたのどのくらい変わってくるかなと思ったんですけども、大体、僕が準備してたのと結果が同じだったので、そのまま僕が準備していた通りに進めさせていただきます。まず最初に、あの図1というところですね。1935年、マスジドが神戸に竣工してから、75年経ちました。その間、ご覧のように、順調にマスジドの数は増えていっているんですけども、よく見るとですね、これは均等なのではなくて、だいたい35年から60年間ほとんど増えてません。そしてこの辺り、1995年ぐらいから、関東地方でマスジド増え始めております。2000年、この辺りから中部地方でマスジド増えております。で、マスジドが増え始めてから、わずか15年ということになります。

そして、年表を……。1985年、「バブル景気外国人労働者流入」。この時期に外国人労働者の流入が始まったものと思われま。当時、日本は好景気で、仕事の口はいくらでもあったでしょうから、高収入が得られる日本で働くのは魅力的であったに違いありません。もちろん、これら外国人労働者の中には、パキスタン、バングラデシュといったイスラーム諸国からの労働者も含まれておりました。私が留学を終えて帰国したのは、ちょうどその頃です。埼玉に住み、新しくできたアラブ・イスラーム学院礼拝所にジュマーの度に通っておりました。広い礼拝所が満員になっていましたから、大変なムスリムの数で、留学前に行ったことがある、旧東京ジャーミイのジュマーの参加者に比べれば数倍にも膨れ上がっていたと言えます。1988年ですね、「イラン=イラク戦争が終結」。若い兵士達が復員してきたものの、国内の仕事口が十分になかったのでしょう。しばらくしてイラン人が日本に職を求めてやって来ます。外務省の、日本国査証案内に、注4として、「バングラデシュ人、パキスタン人については、1989年1月15日以降、またイラン人については、1992

年4月15日以降、査証免除措置を一時停止します」と記載されております。当時、観光ビザや就学ビザで入国しながら、就労または限度を超えた就労を行う者、あるいは不法残留による就労を行う者が急増したことに対する、抑制策と言えます。図2をご覧ください。これは法務省発行の在留外国人登録者届です。不法滞在者は、これにはカウントされていませんので、1980年代後半から1990年、この辺りまでですけど、実際の数には反映されておりませんが、実際はこの辺りはもっと外国人が居たと思います。次に、このグラフでインドネシアを注目してください。1990年頃から増え始めて、そして、1998年、この辺りでどっと増えます。これは1990年、外国人研修生受け入れ枠を中小企業まで拡大した、1993年、政府によって創立された技能実習制度などを利用して、研修や技能実習で入国する者が増えたことにあります。これらが主要4カ国の在留者の動きです。これが現在のものですが、なんかイメージ的に以前は不法就労とかあった頃って、すごく外国人が居て、その後いろいろ取り締まりがあって減ってくのかなと思ったら、実は外国人ってずーっと増えていって、これから先もどんどん増えていくような勢いなんですよ。つまりムスリムの数も、これを見る限り、これから後もどんどん増えていくというように予測できます。

ムスリムとは、人が集まれば一人で礼拝するよりは集団で礼拝するようになります。ラマダン月には、一緒にイフタルを取り、タラウィークの礼拝をするようになります。つまり、行を行おうと思えば自然に社会を作っていくようになります。そういうこともあり、1980年代後半、ムスリムは誰かの家に集合したり、賃貸の礼拝所ムサッラーに集まったりするようになっていきました。そして1990年、バブル崩壊。バブル崩壊により、一部の者が失業して帰国を余儀なくされるというマイナス面が表れますが、同時に、不動産物件が手頃な価格になり、交流の機会が訪れるというプラスの面も出てきました。そして1991年、タブリーギー・ジャマーアトは、仲間たちから募金を集め、東武伊勢崎線一ノ割駅近くに、彼らの拠点となる待望のマスジドを購入しました。彼らの本部となる一ノ割マスジドです。さらに1992年、イスラミック・サークル・オフ・ジャパンが設立されて、1994年、ジャパン・イスラミック・トラストが設立されました。イスラミック・トラストといったら、ハールーンさんが行っている大塚マスジドです。続いて団体が設立され、マスジド購入に拍車がかかることとなります。少し遅れて1998年、名古屋マスジドが開堂し、外国人労働者が関東に続いて多い東海地方でも、マスジドが増えていくことになるんです。図1の2001年のところですね。ここでは、関東で14、中部で4、近畿で2というような形になっています。中四国、これは松山MICCというムサッラーなので、マスジドとは言えませんので、マスジドというのは23個、この時点でこういう状況です。

そして2001年3月に「富山コーラン破棄事件」というのが起こりまして、中部ムスリムの存在がマスコミで取り上げられるようになったんですが、その後、「9.11事件」が起こります。9.11事件が勃発して、ムスリムが逆風を受けることになりました。公安関係から、マスジドや個人に対する監視が高まり、またマスコミの偏重報道によって周辺住民からも厳しい目で見られるようになったのです。そういう状況にもかかわらず、その後もマスジ

ドの数はコンスタントに増えています。その理由は、計画から開堂までは、一般的に数年の期間を要するからです。例えば、9.11 事件後間もなく開堂した Masjid は、そのずっと以前に計画され、数年に及ぶ募金活動のうち、やっと建設、また物件購入に取り付けたことで、もう後戻りはできないのです。中には、周辺住民の反対に遭い、物件購入を断念した例もあります。2004 年、「岡山 Masjid 建立断念」というのがそれです。結局岡山 Masjid は 2008 年、より好立地の大規模な物件を購入することになりました。その開堂式には、地元自治会、周辺住民、公安関係者を優先的に招待し、混雑による周辺住民への迷惑を避け、ムスリム側からは運営委員数名と世話係数名の参加という気の配りようでした。

2009 年には、北海道小樽 Masjid、九州に福岡 Masjid が開堂することにより、全ての地方に 2 つ以上の Masjid ができた記念すべき年と言えるでしょう。在留外国人数も、増加の一途を辿ることになるでしょうし、今後中央都市に次々と Masjid ができていくことは間違いないのではないかと予測します。そうすると、情報の共有、協同ができるようになるのが理想です。そこで、Masjid ネットワークという考え方が生まれてきます。ここで補足説明をさせていただきますが、外国人労働者の話から始めましたので、ムスリムとは外国人だけという誤解を招きかねません。1969 年、日本ムスリム協会発行の文書には、当時、日本人ムスリムと外国人ムスリムの比率は 1 : 1 であるという記述があり、その頃はほぼ同数で仲良くやっていたのです。その後日本人の入信により、外国人は流入により増えていったものです。流入のスピードが速かったため、現在では日本人対外国人比率では、外国人が圧倒的に多くなっていますが、イスラーム社会、Masjid でも、日本人の役割は重要だと思われま

す。先ほど申しましたが、2009 年は、全ての地方に複数の Masjid が建った記念すべき年です。この辺りで Masjid ネットワークができて、情報交換・相互協力などができれば良いのではないかと考え、2009 年 6 月に開催されたイスラムセンター総会で、Masjid ネットワーク構想を提案させていただきました。その内容は、図 4 です。ポイントを説明しますと、地方を 8 つか 9 つに分けます。そして、拠点 Masjid を選出します。地方間で相互協力・情報交換を行い、拠点 Masjid は地方の情報や問題などを携えて、年 1 回の総会に出席します。関東地方は、全体を束ねる拠点として 1 つ選出しますが、それ以外に、水戸、一ノ割、戸田、大塚、浅草、こういったもともと Masjid ネットワークをすでに持っているところもあります。これは、代表としてこちらに出ていただくというような形です。総会で、選出された役員が運営するような形式になります。もう 1 つは、全国組織の団体、これはネットワークを利用して小冊子を配布したり、情報の配信などに利用し、また地域の要望にも応えて、良い協力関係を作ります。そういった総会にも参加します。こちらの活動も、こういう Masjid ネットワークを使ってどんどんどんどん配信して行って、影響を与え、こっちからも要望をどんどん言える、というような。そしてまた、人が集まってここで総会を行う、このような関係ですね。

次に、民族別ネットワークについて、少し説明をさせていただきます。マレーシア・ム

スリム留学生のネットワーク（IPIJ）をはじめ、留学生のネットワークはたくさんあるようですが、社会人ネットワークとして最近特に目立ってきたのは、在留外国人ムスリム数が最大のインドネシア人たちです。インドネシア人は、技能実習という名目で、中小企業を中心に働いている人たちが日本人女性と結婚している人もかなりの数いるようです。また逆に、インドネシアに転勤、出張、ツアーなどで滞在し、インドネシア人女性と結婚して連れて帰ってくる日本人男性も居ます。どのくらいインドネシア人との国際結婚がいるのか、資料を調べましたが、「日本人の配偶者など」という項目として、配偶者だけではなく子どもたちも含まれた数字となり、国際結婚の数は出てきません。そこで、数はわからなくても、女性が日本人対男性が日本人の比率はどうかという視点で4つの地方で訊いてみました。東京では6：4、福岡では7：3、岐阜で3：7、愛媛で1：9というような結果が出てきました。都会では、インドネシア人男性・日本人女性のカップルが多く、地方では逆に、日本人男性・インドネシア人女性のカップルが多いということです。パキスタン人の場合、ほとんどがパキスタン人男性・日本人女性のカップルであるというのが大きな違いです。とにかく、散在しているインドネシアと日本のカップルや家族が地域単位、地方単位でネットワークを作り始めているのは事実で、その数が多いだけに、これから注目されるべきグループです。

本題に戻ります。この Masjid ネットワーク構想はけっして斬新なアイデアというわけではないのです。すでに、新月委員会、ヒラールコミッティから E メールで、すべての団体・Masjid に、ラマダーン月の断食と明けの情報が流れていますし、イスラミック・サークル・オブ・ジャパンとジャパン・イスラミック・トラスト、タブリーギー・ジャマアトなどは独自の Masjid ネットワークを持っています。私がイメージしたのは新月委員会の拡大版であり、既に存在するネットワーク全てを繋げたものにし、さらに +α が欲しかったのです。Masjid とは、その地域のムスリムを統率している存在であり、現場そのものです。Masjid のレベルアップと弱点補強に役立つネットワークであって欲しいと思います。

ここで、現在の Masjid の状況とイスラーム圏の Masjid の状況を比較してみましょう。私が青年期に学んでいた片田舎の神学校に隣接したごく一般的な Masjid を例にとってみます。イスラームを国教とする Masjid とみんながお金を出し合いやと運営ができてい日本 Masjid を、単純に比較はできないでしょうが、Masjid の在り方を考えるうえで何かの参考になるのではないかと思い、紹介してみました。マレーシアの Masjid は、州イスラム協議会の監督下にあり、金曜の説教は配布されてイマームはそれを読むだけでいいし、あらゆることはマニュアル化されており、わからないことは評議会の指示を仰ぐという具合で、いろんなことが簡単にできるようです。一方、日本の Masjid は、広範囲をカバーし、多民族で構成され、周辺住民に配慮しなければならないという厳しい状況下、金曜日の説教の毎回イマームが作成し、さまざまな事柄に対してマニュアルもなく、できる範囲内で独自に運営しているようです。

マシジドの状況を、項目別にちょっと吟味してみます。マシジドの看板効果ということで、マシジドの存在が知られると、地域に埋もれていたムスリムが訪ねてきて、マシジドを中心としたムスリム社会が大きくなっていくという効果があります。またそれ以外にもさまざまな人が訪問してきます。授業の一環として、中学生や高校生、イスラームに興味がある人、入信希望者など、中には、情緒不安定で心の拠り所を求めて辿り着く人、救いを求めてやって来る人、失業者など、とにかくさまざまな人が突然やって来ます。それから、訪問者に対していかに対応するかは大切なことです。しかし、その時対応する人によって全く違う対応をし、マシジドごとに対応が違っているというのが現状ではないでしょうか。対応のまずさを指摘するような言葉をよく聞くことがあります。誰が対応しても、どのマシジドが対応しても、納得がいくような対応マニュアルを作成しておく必要があるのではないのでしょうか。今述べました訪問客は、例えば、図 3 のようなマシジドリストを頼りに訪問してくるようです。また、同じリストを利用して、業者が商品パンフレットやカタログなどを送りつけてきています。商売での利用は大歓迎です。それによって、ムスリム業者が商売のチャンスを掴めるならば素晴らしいことです。また、国内外の団体から、書籍や情報誌などを送りつけてきます。これも大歓迎です。ここで、全国組織のイスラーム団体の機関誌や有益な情報を会員にだけ送るのではなく、リストに掲載されているマシジドに送れば最高の宣伝効果があることでしょう。どんどん利用することをお勧めします。マシジド側にも、それらの情報は良い刺激となるに違いありません。今はインターネットの時代です。安価に済ませるならばメールで情報を送りつけることも可能だと思います。

次に「指導教育」。これは、将来のイスラーム社会の運命を決定づける最重要課題です。しかし、現状はコーラン塾を開いているのはごく一部のマシジドです。保護者の意識改革、指導者養成、教材確保など、今後取り組まなければならない問題がたくさんあります。セッションでも話されたと思いますけれど、この辺りの、意識とか指導者養成、教材確保をどのようにするかというのを、マシジドネットワークでは真剣に取り組んでいかなければならないと思います。さっきもちょっと触れましたけど、子どもの少ない地方のマシジド、裕福な家庭に対しては、家庭教師の派遣も一つのアイデアだと思います。家庭教師は、アルバイトとして日本人学生または留学生が任に付きますが、指導要綱に従い指導できるように訓練したいものです。ここでマニュアル・指導要綱などの言葉を使っていますが、ダアワは教育に秀でた者を集め、委員会を結成して作成していくというのはどうでしょうか。

「社会人の教育」。民族ごとの勉強会や講演会は盛んに行われており、それぞれ興味のある内容をテーマに実施されています。それはいいとして、ここでは日本人入信者へのサポートを考えてみましょう。入信後、10回の講習会に参加するのを義務付け、イスラーム理解、礼拝実技など、少なくとも一応一人前のムスリムになれるまで面倒を見るべきです。それも、どのマシジドで受講してもいいように、やはりマニュアルと指導要領が必要です。次に「金曜日の説教」。作成委員を構成し、できあがったものを、毎週全国のマシジドに配布するか、またはネット上にストックしていつでも使えるようにしておくこと。誰でも読む

だけで、説教者が務まるようになります。人材養成にも繋がるでしょう。もちろん、独自に説教したい Masjid はそれでもいいです。もう 1 つは、「言語の問題」。今のところ、参加者がもっとも多い民族の言葉、あるいは共通の言葉として、主に英語、アラビア語、ウルドゥー語、インドネシア語のどれかで説教が行われております。稀に日本人参加者のために日本語訳をしている Masjid もあります。しかし、外国人でも長期滞在者は、日本語が堪能ですし、日本人の参加数に関わらず、将来のことを考えて日本語訳を考えてもらいたいものです。あるいは、日本語のみで説教をしていただきたいものです。それは、外国人説教者にとって、とても辛いことかもしれませんが、作成委員が日本語訳も用意していればできるはずで、もしできないとしても、何かの方法でできるはずで、そして、説教の日本語訳をネット上に載せれば、ムスリムに対するダアワにも繋がります。「周辺住民との良好な関係」。これを維持するためには、情報の共有が必要になります。トラブル例を検討したり、いいお手本を学んだり、Masjid ネットワークはここでも活かされるはずで、次、「冠婚葬祭」。冠婚葬祭は、各 Masjid の運営スタッフが知っておかなければならない事柄が多くあります。例えば、死者が出た場合のやり方など、理論だけを知っていてもいざという時には役立ちません。必ず実技講習会を受けておかなければならないでしょう。地方単位で集める実技講習会を行いたいものです。

一部の項目のみをピックアップしていきましても、僕が言いたいのは、Masjid ネットワークを創ることによって、各 Masjid の苦勞が少しでも軽減されて、スムーズかつ実りある運営ができるようにと期待して、考えているんです。実際この Masjid ネットワークについて、提案した後、これは非常に良い考えだということで、イスラミックセンターとか参加者に取り上げてもらって、作っていこうという方向にはなっておりますが、まだ実現はしておりません。いろいろとご意見を伺って、いつの日か実現できればと思っております。僕の方からは問題提起として以上です。

メイモン：

ありがとうございます。2 番目はいろんな制度の数、臨時的なムサッラーも含めて 100 箇所ということになっているんですが、そろそろ Masjid ネットワークが必要となってきたというような話です。たしかに、みんな経験するものが違うから、お互いの経験から、別の場所の人間から学ぶことが結構あるかと思いますが、なにしろそういうネットワークがあれば、お互いの情報を共有したり意見を共有したりはできます。私も前からこういうことには興味があって、いろんなところで提案してきたのですが、問題は、誰が、どういう形でということになるんですね。それが実現されていない、ということは今、浜中さんもおっしゃったのですが、イスラミックセンターも、いろんなところでこういうのがあっていいなあという風にはなっているんですが実現していないというのが、どこが原因でしょうか。それについて皆さんの意見で、どういう形で実現した方が良いか、あるいは浜中さんがおっしゃったポイント以外に、こういうのもこういった Masjid ネットワーク

に含めた方が良いとか、そういう提案があれば、指摘していただきたいと思います。いかがでしょうか。須見さんよろしいでしょうか。それでは、須見さんの方からお願いします。

須見：

浜中さんの意見、非常に賛同いたします。札幌では、先月から金曜の説教は英語で最初言って、ポイントだけ日本語でという形にやっとなってきました。あと、やっぱり、一番は声が上がっている教育問題なんですけれども、僕は知識があまりないんですが、成人向けの研究会をやってますと、やはり、情報が多いのは子どもにも教えたいというのがあるんですが、教える側にとっても、テキストみたいのがあれば、ある程度知識がなくてもですね、日本人であっても同じことが教えられるということで、これは非常に、是非、誰かが声を大にして、主導権を取って進めていってくれないかなと思います。各マスジドもいろんな垣根を越えて、この機会に良い方向に向かえばと切実に願っております。

メイモン：

ハールーンさんお願いします。

ハールーン：

先ほど、浜中さんがおっしゃったように、入信した人に対して、入信の後、10回の技能講習というかコースというか、たしかにマレーシアとかインドネシアとかはそういうのがありますよね。それは必ず受けないと、入信証明書も発行してもらえないという話を聞いたことがあるんですけども、それは非常に良いと思うんですね。日本人のムスリムが、きっかけはいろいろあって、あまり熱心ではないということが、こういう授業があればですね、何回か来て1回来ればラーイラーハと唱えて理論がおっつかないという人に対して、こういう何回かですね、勉強した方がやっぱりいいと思うんですね。そのためには、マレーシアとかインドネシアとかは、資料がいただけるんですね。それを全国のモスクも同じ資料を使って、非常に良いアイデアだと思います。

浜中：

資料をいただけるようなんですけども、まだ作ってないんですよ。これから、特にハールーンさんとか、前野さんとかと、現場で実際に指導している人たちが歩み寄って、こういうマニュアルを作ってこういう指導要領を作ったら、というのを作っていけば。前野さんのお話にもありましたように、指導できる人の絶対数が非常に少ないというのがありますので、そういう能力がある人、限られた人たちしかいないと思うんですが、そういう人を指導要綱に従って、各地のマスジドで使えば、結構高いレベルで的を射た資料ができるんじゃないかなと。まだ全然作っていないんでこういうのがあればなという希望です。

メイモン：

資料ももちろんなんですが、今日初めて、インドネシアにもマレーシアにも制度があるということを初めて知ったので、私も知らなかったから、パッと聞いて今思ったことなんですが、要するに、資料ができる前にまず、日本のイスラーム団体の中で、こういうことをすべきだという、コンセンサスを図らないといけないんじゃないでしょうか。やはりそれがない限り、入信証明書を出さないということに皆賛成してないと、結局は、例えばジャパン・イスラミック・トラストは、10回の講座を受けていない人は出さない、イスラミックセンターは別に1回でも出しちゃうとか、そういうバラつきになると、それがまたちょっと問題になるかなあと、ちょっと今聞いててパッと思ったことなんです。

浜中：

僕が言ったのは、マレーシアとかは、10回技能講習を受けないと入信証明書を出さないとかあると思いますけど、入信証明書をすぐに出して、その後10回のコースというようなのが良いのかなと思うんですよね。いろいろみんな都合があるでしょうから。入信証明はもうその場でも出して良いと思うんですけれど、それから後、例えばそこから教義について、第2回目はフェアティファとその理解についてとか、3回目ぐらいから、ウドゥーのやり方とか礼拝とか、そういうのをずーっと書いた指導要綱を作って、暇な人は毎週来れるでしょうし、時間がない人は月1回その講座を受けて、10個ハンコをもらって、来てる間に masjid に親しんで、masjid の社会の中の一員になれるということをだいたい考えて、書いたんです。

メイモン：

入信証明書が出ないというのは、ハールーンさんの話から私がそういう印象を受けたんで、浜中さんも、そうではなくて、義務づけるのではなくて、一度入信した人にはおすすりめということですね。はい、右側のテーブルの方はいかがでしょうか？それも含めて全体的に masjid ネットワークについて。

前野：

浜中さんが発表してくださいましたご提案すべてにまず賛同いたします。特に、指導要領に関しては、私もすごいその必要性を痛感しているところでして、参考にさせていただきます。そのコンセンサス作りの中で、masjid ネットワークの構築の中でですね、コンセンサス作りで、中心的に音頭をとっていく存在が、垣根を越えて必要だとおっしゃったんですけれども、やはり私としては、外からの眼も考えた上でも、日本ムスリム協会かなど、期待を込めているんです。これは内部告発ではありませんけれども、会員としての権利として言わせていただきますけれども、残念ながら、なんと申しますか、ムスリム協会の動きがですね、13人もいる役員の会議、理事会によってしか動きませんので。日



本のお社と一緒と言いますか、非常に遅々として進まないところが、一会員としては伺えまして、日本ムスリム協会が先頭に立てば、それこそ在日歴が長くてですね、日本人ムスリムを立てていこうという気持ちを持つようになってくださった皆さんのような方々でしたら、それこそ異論なくスムーズにいくんではないかと思うんです。その当の日本ムスリム協会の中心となっている方々の腰が重たいようで、非常に残念だなあと感じております。

メイモン：

ちょっと個人的なことになってしまうかもしれませんが、去年からその、 Masjid ネットワークだとか作るとなった時、日本ムスリム協会がそれを担うべきか、またはイスラミックセンターがやるべきか、というような話が出ていたんですが、やはり今、前野さんがおっしゃったような動きで、イスラミックセンターもなかなか、実際はもう何年も、翻訳とかイスラム本の翻訳とか、いろんなことをやってくださっているんですが、こういうネットワーク作りにはなかなか出てこない。今日はイスラミックセンターの代表がいないからそれについて意見を聞くことはできないんですが、日本ムスリム協会としてはどうでしょうか。

樋口：

私の立場はですね、日本ムスリム協会の運営からは離れているんです。今前野さんから指摘されているように、今日は日本ムスリム協会からは出席していないというのが実情なんですけれども、ムスリム協会の長い歴史の中で見ましてね、はじめは日本人ムスリムだけでは、イスラーム活動はできないということで、協会の中に外国人の理事さんがいたんです。そういうことは日本人のムスリムの先輩には、アラビア語ができる人もいないし、それからイスラームの知識はあまりなくて、結局、外国人のムスリムの留学生を中心とした人たちとの、協同の中でイスラーム活動は可能だったと、いわゆる、そういう相互的な関係があったんです。日本ムスリム協会の中に、イスラームの知識を勉強して帰って来た人たちが出て来る段階になると、やはり日本人ムスリムとしての考え方と外国人ムスリムの考え方を合わせるのは難しくてね。それは私も理解しています。今は日本人を中心とした協会があって、その他の団体とも連携活動が必要な段階になってくるんですが、その連携活動が、今指摘されている日本ムスリム協会の弱いところだと思います。それで浜中さんがイメージされているマニュアルや皆さんがイメージされているマニュアルというのがどういうものか、ちょっと明確ではないんですが、私自身は、イスラームっていうのはマニュアルに馴染まないんじゃないかなっていう、すごく懸念があるんです。みんなそれぞれの背景を持った方々が日本に来てですね、しかも日本の中で結成されているイスラーム団体の中には、自分の国の本国である団体との繋がりの中で活動されるというところがあります。だから、そういう方々と、いかに話し合いの中で産み出していけるか、既成じゃないガイドラインだと思うんですけど、そのガイドラインにしてもですね、自分たちの好

みでやれるということに、皆さんの生きがいを感じてるんじゃないかと思うんですよ。ですから、意見交換や連携は良いんですが、マニュアルを文章化した、さあやろうよといった時にですね、実際にどのようにしようかと、その辺の難しさが、私はあると思うんですよ。

メイモン：

樋口さんは現在の日本ムスリム協会の運営には関わっていないんですが、一番近いというか経験者であるからちょっと振ったんです。ご自分の意見でよろしいかと思いますが。やはりマニュアルに対しては反対という意見もあるでしょうし、賛成の人もいるでしょう。ただ、全体的にはネットワークにはみんなが賛成だと思うんですが、どういう風なネットワークにすれば良いか、そこの意見がみんな違うんでしょうか。はい、前野さん。

前野：

私が挙手したのはマニュアルについてです。いざ出来てからの実践への懸念の気持ちはたしかにお気持ちわかりますけれども、今までの状況というのは、本当にそれぞれがですね、それこそ各家庭段階で、個人段階で、模索状態、試行錯誤を繰り返して来ているという状態ですので、あくまでもガイドライン、参考書としての必要性はすごく大きくあると思うんです。そうじゃなければ、本当に個人レベルで「入信しました。さあ、どうやってムスリムとして成長していこう」といった時に、ガイドブックすらない。たしかに、親はなくても子は育ちますけれども、やはりガイドラインっていうのは最低限必要だと思います。各地域の人が実際に活用するかどうかは、それぞれの好みで構わないわけですから、それこそ強制的なものは一切イスラームにないというのがまさにご存知の通りですので、その中で、あくまで指針として、やはりそういった形は必要かと思います。

メイモン：

例えば、この指針であっても、新しく入信された人に対してどういう対応をとるか、どうやって教育するか、それだけのことでよろしいですか。あるいは、マスのジドの運営のやり方までも含めるべきかとか、もし具体的に何かご意見があればもう少し出していただければと思います。

前野：

それは参考情報として、情報提供の形では役に立つんじゃないでしょうかね。例えば、中部で、レカさんのご友人であるシリア出身の方、私の友人でもありますけれども、彼が作った新しい団体が提供している情報としては、マスのジドの設立方法とかですね、例えば、外国からやって来て、頑張って働いてお金はできた、お金はある、何かイスラームやムスリムに貢献したい気持ちがあった。でも、具体的な法的な手続きですとか地域におけるマ

スジドの設立の仕方がわからないという人に、プロセスのノウハウを知っている人が教えて情報を提供する。そういったことは当然役に立つでしょうから、別に特定化されたものに限らず、全般の参考情報提供のための masjid ネットワーク作りというものなのではないでしょうか。

メイモン：

はい、ちょっと浜中さんに確認したいのですが、浜中さんのイメージでは、masjid ネットワークというのはやはり組織ですか。連盟みたいな、日本 masjid 連盟みたいな組織というイメージですか。それとも、ルーズな情報を共有するだけのネットワークぐらいですか。提案者としてはどうでしょう。

浜中：

どうなるかは流れに任せるしかないのですが、一番 masjid 側としてやって欲しいのは、フトゥワを毎週号送ってきてもらえとか、子どもを教育する場合にはこういうやり方で、というマニュアルを作るとか、そうすると masjid を運営するにあたりすごく楽になるんです。そういうのを作るとして、事務局を作ってその中に、その事務局が人間をこう選んで来て、フトゥファ作成委員会とか、マニュアル作成委員会とか、そういう所に各 masjid から派遣する。また、今はインターネットがありますから、結構離れていてもそういうのができると思います。それほどお金もかからないと思いますし、各 masjid が毎年いくらか出せば運営はできるんじゃないかなと思います。だから、すごい鋼鉄の団体をガーンと立ち上げるというようなイメージは、僕は持ってないです。

メイモン：

ルーズネットワークからたくさんいろんな masjid の代表が集まる、年に1回か何回か集まって、人材育成とか、そういったことですかね。すごいカッコリした組織ではなくて、という意見でよろしいですか。レカさん辺りは、masjid ネットワークについてはどういうお考えでしょうか。

レカ：

この考え方は、私は非常に良い考え方だと思いますが、ただ外から来た muslim の方々にはあまり組織化されることを嫌うという癖があります。ですから、非常に良い考え方だと思うんですが、是非そのリーダーシップを日本の muslim の方々にとって、組織化を進めた方が、他の masjid の方々も多分それに従うと思いますから。私たちがあまり頼らずに、やはり日本人同士でそれを進めた方が、というのが私の考え方です。私たちはどうしてもそういう組織化されたものは、あまり、具体的に誰かがリーダーになって誰かそれを作って、というのを好む方があまりいないものですから。つまり、その islam 社会と

いうのは、いろんな国から、アラブがあってインドネシアがあってマレーシアがあって、中央アジアがあって、パキスタン、インド、とかいろんな方がいます。その結果、考えがまとまらないものですから、日本の場合は、みんな同じ考えですので、それを是非作って、進めた方が、というのが私の考え方です。

メイモン：

レカさんは、日本人が先頭に立つという考え方ですね。ハールーンさんやオバリさんはいかがでしょうか。

前野：

あの、一言だけ良いですか。すいません。ですからこそ、 Masjid ネットワークの基本方針として、日本を理解し、日本で生きる人という意味ではですね、日本人の日本人による日本人のためのイスラームをモットーとしていただければと思います。

ハールーン：

前野先生が今おっしゃったその続きですけれども、私たちの団体、日本イスラーム文化センター、イスラミック・トラストの方針としては、将来、団体の会長、事務局長、理事たちも日本人、それから、イマームも日本人、という、そういう方針で、インシャーアッラー、考えています。何年かかるかわかりませんが、他の団体も同じように、留学に行っている日本人がまた戻って来た時に、そういう場を与えて。そうするとかなり考え方も合いますし、そのネットワークも強くなるんじゃないかと思います。

オバリ：

ネットワークについて 1 点。もし組織、例えば、ただ単純にホームページを作って、このホームページの中にリンクがある。例えばイスラミック・サークル・オブ・ジャパンとか日本のスレイマン浜中さんのイスラミックページとかホームページがある。これがただそれだけでいいんですか？例えば組織のホームページを作る。ホームページを作ってホームページの中にリンクがある。リンクの中に例えば、イスラミックセンター・オブ・ジャパンのリンクもあるし、例えば名古屋モスク、神戸モスク。そして、そのリンクの中にまた、例えば入信した人、それだけでいいと思います。

メイモン：

そういうホームページだけだったら今でも実際あるんですが、ネットワークというのは、もう少しやっぱり何人か集まって一緒になって作らないと、そうじゃないと、私は自分のホームページでいろいろリンクを張る、浜中さんは自分のホームページでそのリンクを貼る。

オバリ :

だからネットワークの機能というか活動はどのようにやりますか。

メイモン :

はい、浜中さん。

浜中 :

まず、ターゲットになるのは地方だと思うんです。例えば、四国だと 4 つのマスジドがあるんですけど、この 4 つのマスジドは近いですから行き来は簡単です。新居浜でイベントをする。こん中でちょっと出てきたのは、ムスリムであるかどうかという方、急に入信するとかそういうことができるわけではないですから、普段やっぱり集まって、また、そういう指導をする、というのがまず 1 つ。地方の中で、地方の結び付きは別にして、今でも大体そうだと思いますけど、四国について話します。時々、オバリさんと呼んで公演をやってみたりとか、そういう形で地方ではやって、で、地方の中でもいろいろ問題が出てくると思うんですけど、それを全体の会議で年に 1 回だけですけど、代表が集まって、その中で話したことをまた持って帰って地方に生かす。そういうのもまた 1 つ大切なことだと思います。

メイモン :

つまり、理事会とかそういう形ではないけど、一応総会に代表たちが集まるというような形ですね。先ほどレカさんが、日本人でということを強調したんですが、今日本人がなかなかムスリムの中でそういう活動に出ていないから問題だ。さっきの 2 つのセッションでもあったんですが、すべて何でも日本人がやるということもまた逆にちょっとバランスがない。バランス的な問題があるんじゃないかと私は懸念します。やはりイスラームは、国籍は関係ないんですから、何でもかんでも、必ず日本だから日本人がやるというのではなくて、もう少しバランス良く一緒になってできないでしょうかというのが、私個人の意見ですがいかがでしょうか。

前野 :

もちろん賛同します。今後のイスラームを考えるうえで、日本人ムスリムの役割と在日ムスリム、その外国出身のムスリムの在り方、存在というのは、両翼だと思っています。2 つの翼。ですから、あるいは両輪でもいいですけど、それぞれやはり仲良く協力し合ってやっていかないとなりません。

ハーレーン :

私が考えているのは、そのバランスというよりは、もちろんイスラームでは能力のある人、能力があればそのポジションに行くわけですね。多くの日本人の若い人たちは、海外に行っていますよね、イスラームの勉強で。戻って来た時に、今までは戻って来て仕事がない、イスラームの仕事がないから一般の会社に入るわけです。そうすると、だんだんだんだん勉強してきたものを忘れてしまう。それからまた忙しくなっちゃう。そうじゃなくて、戻って来てちゃんと、そういうポジションを与えて、能力があればもちろん会長になる、能力があれば人徳者になる、能力があればイマームになるという、そういう風に考えています。

メイモン：

わかりました。ちょっと強調しすぎているような感じを受けましたから。日本人がなることに対しては、反対はもちろんないし私もないし誰もいないと思うんです。あと、もう1つは、次の世代のために、フトゥーフとかいろいろ説教とか教科書とか日本語である必要があるんですが、やはり今の現在の状況、最終的な目標は別として、今の状況では、日本人ムスリムが1万人ぐらい、外国人ムスリムが10万人ぐらいという現状もあるんですから、やっぱり我々外国人のことを考えなければいけないんじゃないでしょうか。特に日本語をできない外国人もたくさんいるし、そこの辺もまた、外国語のものと日本語のもの。外国語でやっている。外国人がメインになっているマスジドと日本人がメインになっているマスジド、そういうのもあって当然だと思うんですが、そこの辺のバランスも必要ではないでしょうか。誰かそれについてのご意見があれば。

ハールーン：

人口についてですね。先ほどのお話にも出たように、日本人のムスリムは何百人しかないという人もいれば、今日は1万人から2万人ぐらいいるという先生から話を聞きましたし、参考までですけれども、フジテレビの番組によれば、日本人のムスリムは5万人から10万人いると、私は聞いています。外国のムスリムは、5万から10万人、日本人のムスリムも5万から10万人います、参考までに。

メイモン：

かなりの差ですね。先ほどのお話にもあったように、やはり外国人だと、イミグレーション、入管からの統計とかで出るんですが、日本人ムスリムの推計では、日本ムスリム協会とか何かの団体でその辺の調査とかそういうのはできないでしょうか。まずニーズが、どうすればいいかわかるために、その現状を把握する必要があるんですね。いかがでしょうか。

樋口：

それこそ、この masjid ネットワークの中でね、ムスリムが管轄されるというかね、日本人ムスリムが何人くらいという予想水準を上げてくれば、いま理解している数字と違ったものが出てくるだろうと思うんです。5 万か 10 万かというのは、ある経緯がありましてね。オイルショックの頃に日本のある団体が、すごく勢い良くですね、彼らは信者っていうんですけれども、信者が増えていたという時代があったんです。その団体が、私たちの信者は 5 万人ぐらいだという、そういう時代がありました。逆に、現実的な結論とえば、今その団体は、宗教法人を取り消されていますし、そこに残っている信者と言える人たちはほとんどおられないです。その何と言いますか、非常に一時的な資金を得るために作り上げたイスラーム団体があった。その数字っていうのはまったく我々は相手にしてないわけです。この数字の出し方っていうのは、それこそネットワークの中でお互いの知りえる範囲内の数字にすれば、もっと確実なものが出てくる。その時も家族単位なのか、家族の子どもたちも含めるのか、それらも含めて出したら、非常におもしろいかなと思います。それから、先ほどマニュアルがイスラームに馴染まないって言ったんですけれども、私自身はこれだけのイスラーム団体がある以上は、前にもありましたように、あるいはアブーバクル・シディキさんをご存知だと思いますけれども、イスラーム団体協議会というのがあったんです。この頃は、関東地域にそれなりの、ムスリム団体があって、やってこられたわけなんです。なぜ今がそれがなくなったかという、その頃は、会則まで作ってやっていたんですね。なぜなくなったかっていうことは、結局中心になっておられた日本人ムスリムが亡くなったということで、この後誰がやるか、その辺でですね、後継者が出てこなかったというわけになるんです。まずマニュアルを作る前に、先ほど、司会者の方から出たように、そういう連絡協議会というものができれば、その中でマニュアルをどうするかの話が出てくると思いますので。そういう連絡協議会ができることは良いことなわけです、非常にイスラームとしての大きな問題が発生した時に、どういう風に対応するかというのは非常に大事なことです。例えば、経験なんですけれども、ムハンマドの風刺画が出た時に、非常に日本でもいろいろと、どういう反対運動を、抗議行動をやるかと。日本では、暴力的なことにはならないと思いますけれども、日本で一般的な考え方はどうなのかと運動でアピールしたいって人たちもいました。そういう時はやはり、関係者の団体が集まって協議して、団体 1 つ 1 つが抗議するんじゃなくて、各団体から代表者を出して、声明文も出して、代表者が大使館に行って話をしましょう。そういう、日本的なアピールの仕方になった経緯があるんです。将来、日本でイスラームとしてどういう風に日本社会に対応するのか、考え方はどうなんだ、といった時に、バラバラの意見が出てきたので、そういう意味では、連絡協議会とかそういったものを組織するのはこれからは重要じゃないかなと思います。そういう時は、やっぱり日本ムスリム協会も、それなりの立場ですね。いずれにしても求められるのは当然だろうと思います。

メイモン：

Masjid ネットワークの話では、連絡協議会の話は出るんだろうとは思っていましたがとうとう出ました。これもやはり、去年、復活の動きはあったんです。でも、復活できなかったというのは、やっぱりみんなまだ興味がない、示してないか、またはそこまで連絡が行き届かなかったか、その辺のところは曖昧ですが、やはり何らかの形でネットワークが必要であるということも重要です。樋口さんがおっしゃったように、風刺画事件の後、やっぱりみんなバラバラの行動をしないで、一緒になってするということ、その時は、1つのグループが結成されたんですが、結局もう1つの団体が日本では増えたということになったんです。ジャパン・ムスリム・ピースサイド・ポジションみたいな感じで、ムスリムに伝えるという、年に1回セミナーを行っております。それと、ジャパン・イスラミック・トラスト結成の時も私も関わっていたんですが、その結成時も、実はそれが1つの団体ではなくて、日本のすべての団体から代表者が来て、それが連絡団体というか中央の組織になるようなことになれば良いというような話があったんです。結果的には、1つの団体になってしまった、ということがあるんです。つまり、2、3回そういうトライが失敗してるような感じがしますが、その辺についての何かお知恵を出していただけませんかでしょうか。どうすれば、連絡協議会またはそういうネットワークができるのか。誰が音頭をとるのか。

樋口：

はい。1つ発言しておきたいのはですね、もう一度再興しようという動きになったんです。私もその時参加しましたがけれども、いわゆる何て言うんですかねえ、団体協議会ですから、団体で参加するのが多いんです。中でやはり、何と言いますかね、発言権という人がですね、個人レベルの人でも参加させようとする動きがあるんです。そうじゃないんだと、これは団体協議会だから、もし個人的に参加したい人は、どこかの団体に所属して、この連絡団体協議会の形にしないと、もう支離滅裂になっちゃいます。ですから、そういった、もしあれば団体協議会、団体で参加する、という風な、一人ひとりのムスリムをそこに取り込んでしまうと、団体のイスラーム日本集会になってしまいます。そういうのは、きちんとやらなければいけないと思いますね。

メイモン：

はい、ありがとうございます。樋口さんは、個人レベルじゃなくて団体レベルでやるんだというご意見です。須見さん、レカさん、前野さんあたり何かご意見ないでしょうか。どういう形で、結成するべきか。あるいは、どういう風に。必要性があるというのは、みんな今大体賛成しているんですが、実現するには、具体的に誰がどういう風なステップを取ればいいのか、ということです。

前野：

先ほど申し上げました通り、日本である以上、日本人ムスリムだから言うんじゃないん



ですけれども、日本の旗印ではありませんが、日本ムスリム協会に期待されるところが大きなわけだと思います。先ほどレカさんも言われておりましたように、他の出身の方がやると、誰が音頭をとるということに関して、いろいろ喧嘩が増えたりすると思います。話は別になりますけれども、先ほどの日本人ムスリムの人口について。一ムスリムの印象、リアリティな印象についてお聞かせしたかったんですけれども、1万人、5万人というのは大きさとわかっただけだと思うんですけれども、1万人、これもリアリティとしては感じられません。ムスリムとしてリアリティを感じるのは、数百人程度かなと、千人いたらいいなという話で。新しく入信したムスリムが、何ヵ月か経つまでは自分が住んでいる町には、県には、自分1人しかムスリム、日本人ムスリムはいないんじゃないかという錯覚に囚われるのが現実です。それから先ほどの、日本人ムスリムを前に立てて頑張っていきたいと言ってくださいました、大塚のところに関わっている方々についてです。司会をするわけじゃないんですが、皆さんのご意見を伺いたいんです。今まで様々な方が課題提起をしていたと思うんですけれども、今回の会の趣旨は、課題意識の共有止まりです。つまり、具体的な解決策としては、ほとんど何も出ていないのかなと。と申しますのは、具体的に解決していくには、綺麗事なしにみんなある程度お金がかかることになると思うんです。私のささやかな、いわゆる布教、イスラームを伝えようという活動は、もちろんサラリーマンですからボランティアでやっております。地方の北海道や福岡等に出張をする際も、交通費の実費だけいただいてすべてボランティアです。しかしながら、みんながみんな留学から帰って来たり、あるいはそういうことができる人材が、そういったペースで、スタンスで、やっていけるわけではないでしょう。やはりバックアップの、資金面でのバックアップの体制も必要になってくると。さまざまな活動を支持していくことも必要だと思いますので、その中での展望と言いますか、ステップのアイデアを是非皆さんに伺いたいと思うんです。

メイモン：

まず、この会議では解決策まで出すかというのは、私は総合司会としては、ある程度のいろんな解決案が出てくれば良いかなという風には思っていたんです。ただし私が主催者ではないんですが、司会に呼ばれただけで。主催者側がどこまで思ってたんでしょうか。店田先生にちょっと伺いたいんですが。

店田：

主催者としては、今、メイモンさんがおっしゃったことと基本的には同じで、ここでは、もちろん、ムスリムの方たちが中心になって参加していただいて、一般の方も含めて、一般のムスリムも含めて、あるいはムスリマの方も含めて、参加者がこういう会をやっております。この場ではあくまでも案を考えるというところまでが、ここでの役割かなと思っておりますので、それ以降、実際にその案をどのような形で実現していくかというより、

突っ込んだ言及は、ムスリムの方、外国人ムスリムの方も日本人ムスリムの方も含めた、これと同じような会になるかはわかりませんが、そこでやはり、もっと腹を割って話していただくというような、いろいろ忌憚ない意見を見ぶつけ合っていないと、実際にはできないのかなと思います。

メイモン：

はい、ありがとうございます。こういうネットワークが必要であるというのは、だいたいみんな感じているんですから。前野さんが言ったみたいに、日本ムスリム協会が中心になるような考えですね。ここでは日本ムスリム協会の現在の担当者とかがいらっしゃらないから、はっきりとそういう気はあるかないかという、ちょっとまあ、伺えないんですが。浜中さんの方はどうですか。なんかやっぱり提案した以上はもう少し頑張って、みんなそういう風なことを呼びかけをしたりとか。どうでしょう。

浜中：

提案しただけで、一応その後、イスラーム連絡協議会という名前で、少しこれに関しては話を始めたみたいなんです。半年以上経ちましたけれども、まだこれといった動向も見えていないんです。日本ムスリム協会が音頭を取ってというのは、ちょっと考えてはなかったことです。そんなにもすごい団体というのは、僕は最初から考えていなかったんで、あのやはり書いてます通り、新月委員会という、新月委員会ヒラール・コミッティっていうのが、イスラミックセンターで、いつもラマダーンの前とラマダーンの終わりに開催されています。ラマダーン、イードの期間の連絡はそこから発信しているんですけども、それをもうちょっと拡大解釈していければ、淡々とできるんじゃないかなというのはあったんです。だから、イスラミックセンターが日本で新月委員会。で、新月委員会は、ラマダーンの決定をやっていますけれども、同じようにその場で、こういうマニュアルを作っていくとか、こういう作業をやっていければ。それを使うのをイスラミックセンターが協力してくれるかどうかポイントなんです。

メイモン：

ちょっと新月委員会の時に話されたんですが、新月委員会も、はっきり申し上げて、ちゃんとした組織ではないんです。イスラミックセンターが、それを新月委員会という名前でみんなに呼びかけているんですが、この団体がメンバーであるとかそういう決まりもないし、ラマダーンの時は、みんな何人か来てくださいねというので何人かは行く。実際、イスラミックセンターの方がチーフになっているんですが、それも組織的なものじゃなくて、ある程度ちょっと流動的なことになってきている。ですから、ちょっと Masjid ネットワークと違うんじゃないかという気が私はします。もう少し、なんか、ネットワークが必要じゃないでしょうか。

ハーレーン：

実際、 Masjid 大塚では、年に1回だけですけれども、ラマダーンになると、関東だけの団体ですけど、ムスリム協会やイスラミックセンター・ジャパンなどを呼んで話をしよう、それで少し活動の話をしよう、それは毎年やっています。今日のディスカッションの結果というか、その話はですね、私個人としては、今度のジャパン・イスラミック・トラストの理事会で話をして、アイデアとしては進めたいと思っております。それから先ほどの議論に戻りますけれども、海外に行っている日本人が戻って来た時の生活について、お金をどこで払えるかという、問題が少しあったんです。もちろんそれは決して簡単ではないんですけれども、でもやろうと思えばできるはずだと、私は思っています。例としては、Masjid 大塚というより、ジャパン・イスラミック・トラストの Masjid 大塚と隣にある幼稚園、インターナショナル・イスラミーヤ・スクール大塚も、イマームも含めてアルバイトも含めて、8人分は給料を払っているんですね。足利支部はまた別ですけども。だから、もちろんやろうと思えば、いろいろ方法が出てくるのではないかと思います。

メイモン：

つまり、個々の団体は素晴らしいことをいろいろやっているんですが、まだネットワークにはなっていないということですね。今日の皆さんの話から伺えるのが、やはりそういうネットワークが必要である、且つ、樋口先生のお話から伺えるのは、やっぱり協議団体等の団体の集まった組織でないと、個人のところに入るとうまくいかない可能性があるというような印象を受けたんですが。それを思って、もう少しやっぱり浜中さんがおっしゃったように、ジャパン・イスラミック・トラストの理事会で話を出して次のステップを取る、あるいは浜中さんがイスラミックセンターと、例えば日本イスラム協会とかとまたお話をさせていただいて、さらにイスラミック・サークルではサークルなりのなにか団体としての提案があれば。つまり、何かやっぱりもう必要になってきているんですね。今日のお話で、やはりそういう Masjid ネットワークを全体的に必要として、そのネットワークが何のために必要かと言うと、情報共有と問題の解決のためのいろいろなことで、経験した部分は他の人たちに共有して、マニュアルなり指導なり、そういうものを作って、あまり経験をしていない Masjid の人たちに役立つというようなことですね。これ以外に何か私が話したことで足りないことがありましたら、是非、追加の意見をお願いします。

岡井：

今メイモンさんから浜中さんに対しまして、ICJ にせよその日本ムスリム協会にせよ働きかけていくというようなお話がありましたけれども、その浜中さんがネットワークの構築が必要だという風にお考えになった時に、活動を実際始めるとした時に、浜中さんはその実感として、その下からそういうムーブメントを作っていくのが良いのか、あるいはその

団体だとかそういったところに直接的に、トップダウンのような方式で構築していくのが良いのか、そのあたり今までの活動のご経験からちょっとお話をいただければという風に思います。

浜中：

日本のイスラームの団体の方の経験で、トップの方で決めてしまっていて今まで良い結果が出たことがないので、まずは、その Masjid を実際に運営している現場の人たちに理解をしてもらうというのが大事かなと思います。それで必要だとわかったら、どうするかという案を考えていかんというわけです。イスラミックセンターを中心にやるか、ムスリム協会と言っていましたけれども、そういったものとはまったく別物で、Masjid ネットワーク事務局という形でやるか。それと、去年の春から、話が出たんですが、イスラーム団体協議会があるんです。こちらの方でこれを取り上げようということ。でも今の樋口さんのお話を伺っていたら、団体が集まって話をする事なんですよ、大体。そういうようにはなっていない。一応ムサーさんが中心になって声をかけて、既に 2 回、あの Masjid の代表が集まっていろいろ意見を言ってもらったんですけども、意見を述べただけで一つも前に進んでないんです。何回もこう全国の Masjid の代表が集まって来るといのは大変なお金がかかることで、遠くから来る人は大変な部分もあるんで、だから東京にいるメンバーで、一応叩き台みたいなのを作って、出来上がったならもう 1 回、メンバーを招集して、そうして決めようよという話に、一応はなったんです。それから、何ヶ月も音沙汰ない状態なんです。下からか上からかなんですけれども、まず下のムードを盛り上げて根回しをして、実は僕、団体運営は、実は愛媛県バトミントン協会を動かしてまして、結構自分なりに団体を動かすのは慣れているつもりなんです。だから、日本のムスリムを見てきた時にそういう活躍する場かなと、思っているんですけども、今の状態ではまず、みんなに理解をしてもらう、根回しを確保するという、特に拠点になる Masjid の人たちには、理解をしてもらって、自分の味方をたくさん作ったうえで、団体という形でやっていく。現在の時点で、「この団体をお願いします。やってください」では、絶対できないと思います。だからちょっと時間かかると思います。手法としては、下からムードを盛り上げていく、自分の中に作っていく、そして賛同者が、拠点の Masjid が全員賛成するようになってから団体というのは興せると思います。

メイモン：

私なりに、まとめると、まずこういうネットワークの必要性は、今ここにいるメンバーたちは大体賛成ですが、すべての Masjid にそういう必要性が感じられているかどうかを確認する必要があるということですね。それで、地方でまず、それぞれの四国なら四国で拠点のモスクを持って、そこなりのネットワークがあって、そういうネットワーク同士が集まって、中央のネットワークになるというような考えのような感じを受けました。他に、

それとは違うというご意見がありましたら。賛成でももちろん良いんですけど。

ハーレーン：

理想的にはですね、例えば 100 のモスクがあって、100 のモスクが入るのが理想的ですけども、実際には多分そこまではいかないと思うんですね。アメリカにしてもヨーロッパにしても、いろいろ意見があるようですね。だから、日本でも、みんな入らなくても、考え方が近い人っていうか、または協力したい人たちが集まって、そういうネットワークを作ればそれでも成功だと思います。

メイモン：

実際、ジャマーアト・イスラミークラスでは担当の集まりをしている。それもひとつのネットワークですね。そういうような時期的にはそっちの方が、まずあって、それからマスジドネットワークという感じですね。話が大体まとまったような感じをしますので、第 3 セッションを終了させていただいて、全体的なフロアからの質問と、全体的な話、議論に入っていきたいと思います。

## 質疑応答

メイモン：

今までの3つのセッションで、午前中、まず第1セッションでは『ムスリムコミュニティの課題』、第2セッションは『日本におけるイスラーム』、第3セッションは『 Masjid ネットワーク』のポイントで議論していただきました。どのセッションについてでもよろしいですが、フロアのみなさんからご意見、質問なりを出していただきたいと思います。

質問者 I：

少しコメントしていいですか。質問ではなくてコメントしていいですか。

メイモン：

はい。大丈夫ですよ。手短によろしくお願ひします。たくさんの方々があとでできるようにしてください。

質問者 I：

いろいろみなさんからの話がございまして、私も非常に勉強になりました。また、早稲田大学の先生方からこういうイスラームのためにここまで心配して下さったのは、私は心から感謝いたしたいと思います。そこで今日はいろいろ代表的な方々が出席しまして、みんながいろいろな団体の代表がいろいろ活動をやっているんだということを教えて下さったのは、私は一つ、30年日本にいても、このような素晴らしい会があんまりないってことは間違いないのですが、今、いろいろな意見がございましたけど、そこに大切な一つのことありましたね、それについて私が……。まず最初にあるところにはね、語学が、日本語が非常に必要であるということが心配だったんですよ。でも私が考えるのはそれは、私は語学を教えるためにイスラームに就いた訳ではないんですよ。イスラームが人間を心の広い人間にするということ。また何々すれば人間の考え方が、またアッラーに近付くことが、とそういうことですから。例えばインドでもパキスタンでもセイロンでも、アフガンでもね、まずアラビアから人びとが来たとき、まず最初に5年間が外語大学を卒業してから、これからイスラームが始まることは絶対ないんですよ。なぜなら、だから語学はあまり心配しないでください。人間のキャラクターがムスリムの人びとがどういう風にマナーを持っているか、どういう風に人びとと仲良しすることができるか、そのために言葉はいらないでしょう。特に日本では最も言葉のない、日本語なくてもいいんですよ。それはなぜかと言うとね、日本人の100%が日本語と英語を読めるんですよ。英語読めなくても日本語は読めるんだよ。だからそのようなリテラチャーがいっぱいあるから、この大学もそうしてるし、また日本ムスリム協会も、またいろんな団体も、そういう勉強のため

に、イスラームがなんであるのか、イスラームがどのような教えであるのか、そういうことが、インターネットとか、そういうところにいっぱいでてから、だからあんまり語学の日本語ができないからイスラームができないということは、まず最初はないと私は思いますが、もちろん日本語ができれば一番いいことですよ。それはマイナスなことではなくて、それはプラスとのバランスのことになります。それが1つ。二番目は、今日は日本の一つ代表的な団体、イスラミックセンター・ジャパンと東京モスクとか、ここに全然参加していない。それはなぜかと、どうしてかとそれを私は知りませんが、それは非常に残念だと思いますよ。なぜかと言いますと、ここに日本ムスリム協会と、すべての団体がこの場に来たいと思っているんですよ。私は、早稲田大学にダメだとかそういうことを言っているのではないですよ。誤解しないでくださいですよ。今言っているのは、ここにいらしてないことはとてもマイナスだと思いますよ。なぜかと、その二つの団体が、非常に力といい、責任というものもありますから。もう一つのことはね、だからイスラームの人びとが、我々イスラームの人びとが、モスク作ると、そこが天国だと考えているから。学校作ると、いや大丈夫だと、だから学校作る。また1つのモスク、また名古屋に3つ、4つ、またもう1つ作ったわけですよ。また、そこに例えば、埼玉に7つのモスクあるから、またそこにもう1つモスクを作っちゃうんですよ。だから礼拝するのは5人か3人だけですよ。だからモスクを作るより、今ね、学校を作ったほうがいいんですよということ。でも、そこにあんまり学生がないからっていうのは、そんなことない。サンタマリア学校は、8人の学生から、20年前に8人の学生から始まったんですよ。サンタマリア、いま300人の学生を。20年前は5000の5000円の学費だったんですよ。今は10万払っても入学できないんですよ。まあそういうことであるから、だから、いまのみなさんの団体のことに、1つの自分の中央に小さいでいいから、それを学校と言ってください。これが土曜日の塾だとかそういう風にしないでください。これがそこにイスラミックスクール、じゃあそこにイスラームじゃなくてもいいから、良いスクールって言ってください。良いスクールと言って、それが日本人のために作ってあげてください。イスラームの子どもたちのためじゃなくて、日本人のために学校作ってあげてください。その中にはイスラームのことも教えてあげてください。そういうことはいろいろございますが、あんまり、メイモンさんが私をおっかない目でみてるから、私はここでやめます。

メイモン：

すみません。司会はそういう仕事なんです。やっぱり、赤信号、あの赤旗もださなくてはいけないのも司会の仕事なもので。コメントはありがとうございます。それで質問のことですが、みなさんイスラミックセンターと日本ムスリム協会がどうしてここにいないのかということとは主催側にきいてください。先生の方でよろしくお願いします。

店田：

今、前にいらっしゃる代表者の方々と同じ時期に案内状といいますか、招聘状を送って、ご参加いただきたいということをお送りしたんですけれども、日本ムスリム協会からは、特に理由は書いてなかったんですけれども、今の会長さんの名前で欠席しますという連絡が来ていたと思われます。それからあと重要なところで、東京ジャーミィと神戸モスク、こちらにも同じような案内状を送っているんですけど、この 2 つの組織からは、こちらからも随分、参加していただきたいと思っていたんですけれども、この 2 つのモスクからは、お返事をいただけませんでした。どのような理由かは、もちろんわかりませんが、でもできるかぎり来年もまたこういう会があれば、重要なアクターでありますので、是非、日本ムスリム協会、あるいは東京ジャーミィ等にも参加していただきたい。

質問者 I :

イスラミックセンターの方はどうなっているの。

メイモン :

イスラミックセンターは。

店田 :

イスラミックセンターの方は、今回は、私の方の考えで、こういうテーマでやりたいということで、今回はイスラミックセンターには公式の代表者としての参加をお願いするという形にはなっておりません。ただし、この会合についてのお知らせについては、当然、報告しておりますので、イスラミックセンター・ジャパンを排除したりとか、そういうことではございませんので、その辺はご承知ください。

質問者 I :

残念だったと言っただけです。

メイモン :

確かにたくさん来ていただいた方が、もちろんもっと有意義なものになったのかと思います。こちらではいろんな制限、リミテーションがあつて、こちらにはいくつかのマスジドの代表者が、いろんな人がすべて参加することができなかつたかもしれませんが、実は今日、みなさんの中で、八潮モスクとか、横浜モスク、あと所沢モスクの方々が来ている。それ以外、ちょっと私が面識のない方もいらっしゃるかもしれませんが、少なくともそれから 3 か所からの方々からお話、コメントをいただきたいと思います。はい、じゃあ八潮モスクの〇〇さん。お花茶屋モスクからも来ているそうです。

質問者 II :



アッサラームアライコム。私は、埼玉県の小瀬モスクから代表としてここへ来ています。今回のこういったセミナーのいろいろな話を聞いて、この前にもセミナーがあったと思うんですけども、残念ながら私が、その時日本にいないで、来られなかったんですけど。みなさま、ネットワークのことでいろいろ考えてもらって、本当に心から感謝しております。すごいありがたいです。ずっと日本に来て、日本に住んでいるんですけど、この日本の中で、ムスリムコミュニティのネットワークのことをずっとしようかなって思っていて、やっと今頃そういう考えの人たちが集まって考えてくれて、みなさまありがとうございます。ただ、こっち側の人間としてお願いしたいのは、このネットワークというのは、必要なのは間違いないものなんです。日本でムスリムネットワークというものは一番必要なものです。それを作るとしたら、誰かいろいろな団体でやってくれるというのも、いっぱい人たちが、いろいろ団体が多くいますので、そういう人たちの代表として、集めてもらうとか参加してもらうという風に、ムスリムネットワークインジャパン、だけでのことで参加してもらった方がたぶんもっと大勢の人が集まるんじゃないでしょうか。それじゃなくて、日本の中でムスリムネットワークを作りたいために、みんなの考え方でその中で、日本の中にあるムスリムの団体とモスクの代表だけを集めてもらうっていうのもあります。その人たちのいろいろな話を聞いて、みんな自分自分とってどういうムスリムのことをやっているか。日本の中でイスラームが日本人のために、どういうことを考えているのか。もしかしたら、イスラームの宗教のことで悩んでいることの中には、大塚の方で考えていたことは足りないこともある。そして自分のところにも何か足りないから、こういうことをこれからしましょう。そういう考えが違うから、日本の中で私の目的っていうのは、日本の中で、イスラームを、宗教を広めるために、考え方として、やった方がいいんじゃないかと思います。私もそういうモスクの方でもパンフレットをもらってるんですけど、『ムスリムネットワークインジャパンアンドジャパニーズ』をつける。大変申し訳ないけど、私も日本で20何年住んで、10何年前に帰化して日本の国籍を持っているんですけど、別にやってみると、日本人と外人の差別のことを考えて言ってるんじゃないけど、ムスリムはムスリムだけだから。ムスリムのなかでは国籍はありません。ですからこのパンフレットを作る時は、『ムスリムネットワークインジャパン』だけにしてもらえれば大変ありがたい。『アンドジャパニーズ』をつけるということは、みんなムスリムはムスリムだから、国籍がありません。すいません、どうもありがとうございました。

メイモン：

はい、貴重な意見ありがとうございます。横浜モスクから〇〇さんが来てくれますから、コメントお願いします。

質問者Ⅲ：

みなさんこんにちは。横浜モスクからきた〇〇と申しますが、イスラーム学校の話がで

ましたので、前野さんが、土曜日と日曜日に行徳で子どもに勉強を教えるということですが、私の提案としては、各モスクはクルアーンの勉強会を開いておりますが、クルアーンの勉強だけでは足りないのです。やっぱり子どもには、これからの子どもは、ほとんどの子どもは日本語をしゃべったり、いろいろな言葉を書いたりしているんですけども、その子どもたちにはイスラームを教えなければいけない。イスラームの何の勉強があるか、それを教えなければいけない。もちろんクルアーンも必要があるし、まず礼拝のやり方も必要なんだけど、イスラームは何なのか、何で自分はムスリムなのか、それを教えなければいけない。さっき須見さんからお話があったけど、そういう知識を持ってない人じゃないと、ちょっとできない。だからそのために、子どものために、前野さんとか日本ムスリム協会とか、日本人がそういう教材を作らなければいけないと思うんです。そういう教材とかイスラームの語りとか、そういうのを作って、それをモスクに流して、それを必ずモスクには、日本人じゃなくても、日本語ができる外国人もいます。その外国人が、日本語で教えることもできます。その教材があれば。それを私の提案とします。

メイモン：

はい、ありがとうございます。つまり、外国人が日本語が結構できて、教材さえあればそれを使って、利用して、うまく子どもの教育に役立てるということですが、どこかそういう中央団体が教科書を作るように力を入れていただきたいということですね。はい、前野さんどうぞ。

前野：

まず、日本の他の方々に、身内の一人としてお詫び申し上げます。ご覧の通り、ムスリムの方々は、みんなとても熱い気持ちを持っていますので、すごく熱い気持ちを表現してくれていると思いますが、八潮から来てくださった人に申し上げますと、今回の『日本におけるムスリムネットワークと日本人ムスリム』と言いますのは、イスラームはこうだという話をしているわけでは全然なくて、イスラームにナショナリズムはないということはむしろみんなわかっていることである話ですから、こういった会議を催してくださった私たちムスリムは感謝すべきで、早稲田大学のこの人間科学学術院のアジア社会論研究室の方々が設定してくださったテーマなだけですから、そんなに誤解なさないでください。教科書の問題につきましては、今後、そういった気持ちのある方で検討していきましょう。

メイモン：

はい、ありがとうございます。ちょっと名前は存じ上げませんが、お花茶屋モスクの方、あ、〇〇さん、お願いします。立ってもらっていいですか。

質問者IV：

意見を求められるとは思わなかったので、考えてないんですけれども、これはあくまでお花茶屋モスクの意見とは考えないでください。私個人の意見なんですけれども、まずネットワークですね。もちろんネットワークはあればいいなど、みなさん思っていると思うんですけれども、今まで何回か、それチャレンジしていて、うまくいってないわけです。ということは、本当にみなさんそうだと思っているのか、ということをお疑問に思います。そして、ナショナリズムはないというお話なんですけれども、それぞれモスクによって、中心となって活躍なさっている国は、みんなバラバラで、本当にまとまることのできるのか、私は心配しております。それから、今まで話題になってました、教育のことなんですけれども、教育は非常に大きな問題だと思います。ただ、1つ私がお伺いしたいのは、みなさんが教育を必要だと考えているのは、もちろんイスラームを教えることを教育の1つとして考えているのか、と思うんです。それ以外にですね、じゃあ日本の教育、日本の教育に問題があるから、例えば、男女が席を同じにしていますよね。こういうことが問題だから、そこから切り離して別の教育をしたいと考えているのかどうか。そこら辺を私はお聞きしたいのです、みなさんに。私の言っていることがわかりますでしょうか。その辺の姿勢をですね、みなさんで決めてかからないと、この問題、すんなりいかないんじゃないかなと思うんですけれども。

メイモン：

はい、ありがとうございます。じゃあどうしようかな。浜中さんの方からよろしく願いします。

浜中：

まず、マスジドネットワークなんですけれども、以前から何回もお話があって失敗しているっていうのがあって、急にまた出たという話で、これからという話なんですよ。はい、まずそれが1つですね。いろいろな外国人、いろいろな民族がいとまとまらないんじゃないかというんですけれども、全体はといたらまとまりにくいかもしれないんですけど、各マスジドで考えると結構まとまりやすいと思うんですよね。マスジド単位で考えれば。みんながそれぞれムスリムとして共通でありますし、それは大丈夫だと思います。これを全部バーっと話をしたら、まとまらないでしょうし、これパキスタン人であり、インドネシア人であったり、マスジドの中だと間違いなくまとまっていると思います。イスラームの教育は、他の人が答えてくれると思いますが、一応、学校は普通どおりの日本の小学校、中学校に行ってもらって、あとクルアーン塾と、ただクルアーンだけを教えるわけじゃないんですけれども、礼拝の仕方、考え方、イスラーム教義、主にイスラーム諸国で勉強している基礎的なイスラーム知識みたいなそういうのもマスジドの方で教えていけば、それでいいんじゃないかなと思います。あとは家庭の教育とかになるとは思いますけど。

ハールーン：

学校についてですけど、私が思っているのは土曜日の学校ではなく、クルアーンだけの学校ではなく、ちゃんとした学校。先ほど私の話のなかにも、いろいろ日本の、失礼な言い方かもしれないけど、日本の学校に行くと、我々自身では納得してないところがあるんですね。だから、ちゃんとした学校を作って、もちろん国語とか算数とかそういうこと、もちろん日本の教科書を使って、その上でイスラームを教えることが、イスラームの環境を与える、それを望んでいるんですね。

メイモン：

ハールーンさんのお話にもあったんですけども、つまりイスラームを教えるための別の学校ではなくて、一般の日本で教えるというものみたいなのは問題はないけど、環境がそれほど好ましくないから、別の学校を作ったほうがいいんじゃないかなっていう意見と、やはりそれは学校に行かせて、子どもたち、土曜日だけは特別だという、2つのタイプがあると思います。あとは・・・、じゃあ前野さん。

前野：

もちろんムスリムのため、子どもたちのため、全員ベストを求めて、イスラームの学校を設立したいということもわかるんですが、これは私が留学しておりましたシリア政府に怒られるかもしれませんが、シリアのダマスカス大学、シリアを代表するダマスカス大学の日本語学科というのが、何年か前に設立されたんですね。急に設立されたようなところで、学校を設立するにあたってはその生徒の将来まで考えてあげないといけない。例えば、その日本語学科の例をとれば就職先まで確保されていないと、卒業したはいいいけれども、働ける場所、活躍する場所がない。そういったように、日本の、この現状のムスリムコミュニティを見る限り、インフラストラクチャが全然できていないわけですから、イスラーム学校ができて、イスラームを教えた、シャリーアをすごくわかるようになったけれども、日本社会でそれをどうやって活かしていくんですかと。それまで考えて、バックアップしてあげてあげないと。その留学組もそうです、人材が足りない、教えられる人が足りないといっても、帰ってきたら、「是非来てください！是非きてください！」と引張りダコになるケースもあるわけですが、それまでは、本当に支援していただけましたか。これはもうみなさん出身国の問題にもなります。指導層が、その質が落ちてきているのは、残念ながらイマーム職という、そのムスリムの子どもたちの最初のクルアーンについてはこうとか、最初の先生になる人たちが、社会的に蔑まれている、社会的に落とされ・・・低く見られているわけですね。成績の良い、できのいい子どもがいたら医者になってもらいたい。その次の人はエンジニア、その次の子はできが悪いからしかたなくイマームに行く。これが残念ながら、厳しい、痛い、苦しい、ムスリム諸国の現状でして、そこから気持ち、みなさんの気持ちを、私たちの気持ちを改めていかないことには、改善に向かっ

ていけないと思います。

メイモン：

はい、大変厳しいご指摘ですが、やはりその通り。多くのイスラーム諸国ではその通りだと思います。この議論だけでもあれですから、次に入りたいのですが。次も名前を存じ上げていないのですが、大阪モスクの方、いらっしゃいますか。

質問者V：

いいです。ノーコメントで。

メイモン：

いいですか、ではノーコメントで。はい、それでは一般的に、そのモスクとか関係なく、質問、ご意見、ご指摘などありましたら、ぜひお願いします。はいどうぞ。

質問者VI：

個人的な意見なんですけれども、先ほど教育の件でハールーンさんからいただいた意見についてですが、学校を設立したいという意見は、何のために学校が必要なのかということ、それぞれ意見が違いますので、例えば前野さんの意見ももちろん将来的に問題になるのではないかと思います。というのは、前野さんの意見ですけれども、たぶんハールーンさんの意見を聞くと、そちらは子どもを育てるので、小さい頃から、ちゃんとした宗教の意識、またはマナーは、教えてあげないと、子どもは15歳、20歳になってからは、帰れなくなります。そういうことは、こちら側の意見ではないか、ということに私は気づきました。それは、何が元なのかということによります。それは私も最初は見ているんですけど、そのメディアのことにちょっとコメントしたいと思ってるんですけれども。

メイモン：

はい。どうぞ。

質問者VI：

アメリカと日本のメディアはそれぞれ、同じ情報を出しているかもしれないけど、違いはですね、アメリカ国民と日本の国民の違いです。日本の国民は得る情報をそのまま信じます。それは、良い悪いじゃなく、アメリカはそれが正しい情報かどうか調べる習慣がついています。でも日本では、そのメディアをもっと私たちが力を入れてメディアに正しい情報が出るようにするのは、私たちの、それぞれの行いとしての、その協会の義務ではないかと思っています。

メイモン：

はい、ありがとうございます。まず学校について言っても、二つの意見があるというのは、それはそのまま受け止めるしかないですね。ここで、今日の会議でなにか結論を出して、「実はこのような形の学校がベストだ！」とか「いや、このような形がベストだ！」とそういうことじゃなくて、両方それぞれの意見があるということで、いろいろ持ち帰ってもらいたいと思います。やはりメディアというものは日本では確かに活字をすごく信じるというか、確かにその違いはあるかもしれませんが。最終的には、我々になりますよね、どういう情報を流すのかということなんです。我々が目指すものではなくて、やはり国際的なイベントとかそれはどうしてもあるんですから、そこをどのような形で流すのか、日本のメディアも少し考えていく必要があるかもしれません。それがなんか、なんらかの形で、メディアで伝えたいんですが、アメリカものをそのまま流すんじゃなくて、いろいろ情報をチェックして、そういうことも必要かもしれません。ただ、ローカルレベルでは、我々がもっと日本の、一般の日本人に対して、我々一人ひとりがメディアですから、どうぞ自分のキャラクターで、日本に伝えるべきだということをよく思います。前野さん。

前野：

何度も恐縮ですけれども、学校でどちらがよいと押し付けるわけではないのですけれども、社会とのつながりが大切だという共通の課題認識に至ったとは思いますが、その意味でもですね、イスラーム学校に特に特化して日本に、また別の外国の学校を作ってもどうなのかなと私は思います。それから、親御さんの職業、親というのはとにかく学校で先生に期待するものなんですが、それは家庭教育が十分にできていないことの裏返しではないかなという気持ちもあってですね、イスラームというのはみなさんご存知の通り、その当初から生涯学習を、その大切さを強く強く謳っているものです。ですからどんなにイスラームを専門的に学んだ人でさえ、学びきったということはありません。常に学びつつ心を清めつつというのがイスラームの、ムスリムの生き方ですから、その辺も私たち各人が大事にしていくべきことかなと、改めて私自身に言い聞かせてみたいと思います。失礼しました。

メイモン：

はい、ありがとうございます。それじゃあまたフロアに戻りますが。じゃあそちらの最年少の今日のメンバー〇〇君が、意見があるということなんです。

質問者Ⅶ：

学校を作るにあたって、イスラームのことだけを教えるんじゃなくて、その普通の学校で習っているようなことを教えて、生活ってものを一緒にやって、普通の授業と、イスラームのことと、礼拝のことを一緒にできるような学校作りというものも必要だと思うんで

すけど。そういうのを建設するんじゃなくて、費用とかもかかるんですけど、日本人とか日本に在住している人だけじゃなくて、外国の政府とかの人に頼っていただければいいなと思っているんですけども。あと、ちょっと話は変わるんですけどなんか最近、なんか漫画とか絵本とかでイスラームのことを教えてるのも増えてきたんですけども、僕が思っているのは、その視野を広げるために、マスコミを通して、その新聞やテレビでイスラームのことを伝えて、とりあえず先に、誤解を解いてほしいんですよ。なんかその、豚肉を食べちゃいけないとか、酒を飲んじゃいけないだけの厳しい宗教だなんていう、考えをとりあえず変えて欲しいんですよ。以上です。

メイモン：

はい、ありがとうございます。ちょっと聞きますが、実際その学校とかでそういう今のところ問題になっているとか、イスラームの厳しい部分だけ誤解されているというそういうのがあるんですか。

質問者Ⅶ：

大体そう思われているんじゃないですか。そういう風に。

メイモン：

はい、ありがとうございます。まず教育のことと、これからお答えしますがどうでしょうか。たぶんここで出た問題のことでも、日本で、まず 1 つの考え方は特別な学校を今作る考えではないから、普通の学校に行ってもらって、あとは土曜日とか日曜日はクルアーンを勉強する。で、一方特別な学校を作るという考えでは、最初からハールーンさんもおっしゃったと思うんですが、やっぱり日本の一般的に学校で教えているカリキュラムを全て教えて、プラスイスラームのことを教える。それで間違いないと思うんですが、あとは外国に頼るとい話が出てますが、どうでしょうか。ハールーンさん。

ハールーン：

イスラミックセンターが、これ参考までですけど、イスラミックセンターが今学校を作ろうとしているんですね。その内容は私もわかりませんが、もう建設も始まっているんですね。たぶん来年とかには学校が実際できると思います。参考までに。

メイモン：

それでは最後、時間も少ないんで。最後、手を挙げていた。

浜中：

いや、僕も一言いいですか。

メイモン：  
はいどうぞ。

浜中：

2つ意見があって、まったくのイスラーム学校を作るという、ハールーンさんの意見があったんですけど。これはものすごく大変なことで資金もいるし、スタッフもそろえなければいけないという、今の現時点ではほとんど不可能に近いのではないかなというのがあったんで、まったく相手にしなかったんですけど、現実的なのは、前野さんが言っていたのもそうなんですけれども、これもしもその海外からの支援があって、実際できるのだしたら、本当にしっかりと指導して、その学校の中で、普通の日本の国語、社会とか教科もしっかり教えて、例えばそこの学校をできればエリートコースが歩めるとか、有名大学、例えば早稲田とか東大とかに、半分以上の人が行ってますとか、そういう実績が出てくれば、一番マスコミに訴えられる力があると思うんで、あのまったく成績が出なければだめなんですけれども、そこのイスラーム中学校を出ましたと、そしたら高校はどこかの進学校に行行って、みなさん有名大学を出てますというような結果を出していけばいいと思うんですね。そうすれば、少し世の中は変わるし、イスラームへの考えも変わっていくと考えます。

質問者Ⅷ：

浜中さんがおっしゃられたような Masjid ネットワークについての意見と感想になるんですけど、まず、日本にモスクの数が増えてきて、こういうネットワークが必要になってきたという考えを抱いています。それでまず、期待と不安を両方持っているんですけども。期待はまず、日本全体で私自身はタブリーグの活動をやっているんですけども、日本全体でムスリムのどういう団体があるのか、全体像が掴めてないんですね。それで普段は他の団体があること自体はもちろん知っているんですけども、わかんないというか、普段は自分の入っている団体の人しか意識できていないんです。そういうネットワークがあると、もう少し他のことも、他の日本の、普段は意識、何も具体的にはわからないけれど、それは、一種の理解していないかもしれないかと思います。ただ、どうやってまとめるかみたいな不安ももっていますが、もし日本全国の団体が集まって何を成すとか、もっとテーマ自体を目標にするのか、難しいという感想を思っています。ただこれがもし実現したら、教育とかダアワのそういう議論が深まることを期待したいです。資金の面でもうまく収まって、もっと日本のためにダアワが進むのが、そういう風に期待しております。

メイモン：

はい、ありがとうございます。時間も実は 2、3 分オーバーしてしまっているんですが、で、まあ今日このセミナーで、3 つセッションで問題提起をさせていただいて、セッション



していただいて、そして最後にみなさんからのご意見を伺って、とても貴重な体験が出来たと思います。今日の、先ほどもお話があったんですが、今日このセミナーの目的は、何かを解決、はっきりとした解決を出すということではなくて、それぞれのいろんな意見を共有して、こういう解決案であるということくらいで、持ち帰って、またそれを何かに利用するというそういったことでよろしいかと思います。あと最後に、私、素朴な司会でうまくいってないところも多々あったと思いますが、ご了承いただきたいと思います。それでは主催側に預けます。

岡井：

樋口先生からですね、お知らせが 1 点ありますので、主催者側にマイクを戻す前に樋口先生にマイクを送りたいと思います。

樋口：

すいません、セッションは終わりなんですけど、今日出た日本人ムスリムのいろいろな面で、問題視といいますかね、期待されている部分なんですけど、確かにこう日本人ムスリムって姿が見えないと、少し何を考え、どういう生き方をしているかっていうそういうテーマがあるんですけど。新しい試みとしてですね、4月からなんですけど、これはチラシの原稿なんですけど、『イスラーム信仰叢書』っていう、正味 10 冊なんですけど、執筆者はムスリムだけです。それで、年齢的にはですね、我々の世代から、これは前野さんにも執筆をお願いしているんですけど、若い世代までで執筆しようと進めているものです。いずれわかることだと思いますが、その辺を兼ねてですね、ちょっとこんな形で、日本人ムスリムとしての、これまで体験したこととか勉強したこととか考えていることとかっていうものを、最近非常にあの学者の方なんか、イスラームについてのいいものはたくさん出ているんですけど、実際イスラームというのは、信者としての実践を書いている。どうなっているのかっていうのが、いろいろあると思うんで、そういう体系的な醍醐味もありますけど、それまでになかったムスリム信仰『イスラーム信仰叢書』ということで、みなさんの、近々みなさんのお耳に届くと思いますので、誠意をもってご紹介させていただきます。

岡井：

樋口先生、どうもありがとうございました。では店田の方に送ります。

店田：

みなさんありがとうございました。昨年に続き第 2 回のモスク代表者会議ということで、今回企画をしましたが、非常にいろんな議論がありました。昨年のもを引き継いだことももちろんありましたけれども、いろいろ新しい話題というかテーマで、深まった議論ができたかと思います。もちろんここで結論を出すということではないことは、先ほど

も申し上げた通りで、またこの後、どのような形で、具体的に Masjid ネットワークなり、あるいはイスラーム教育面がどういう風を実現されていくかというのは、ムスリムの方たちに、委ねられていることは言うまでもないわけです。ですから、私たちの、こういった会議を主催する側の役割は、このようないろんな議論の場をムスリムの方だけではなくて、一般の方々も参加した、こういう場でやるというようなことだろうという風に考えています。また来年やるのかやらないのかは、こういった議論を踏まえてまた、私たちの方も考えてみたいと思っています。ご参加してくださったみなさん。特にムスリムの皆さん方も、それぞれお考えいただいて、また、いろいろなご意見も私たちの方へ送っていただければと思います。今日は本当に、モスク代表者の方々、それから、一般の方々、各地のモスクからわざわざいらっしゃっていただいた方々、誤って所沢の方の大学に行かれた方もいるとあったんですけど、来年もやるとしたら必ず、こちらの東京の都内の校舎の方でやりますので、是非、その際は間違えないでこちらへ直接来ていただければと思います。また、一般の方々にもたくさん参加していただきましたので、実りのある議論ができたのではないかと思います。それでは、これで第2回モスク代表者会議をお開きにしたいと思います。ありがとうございました。

## 参考資料：会議への招聘状

拝啓

寒冷の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

私ども早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室による滞日ムスリム調査においては、調査研究にご協力いただきありがとうございます。本年2月11日には、第1回全国モスク代表者会議を開催し、多くの方々の参加を得て、一定の成果を上げることができました。この会議では、「各マスジドや団体が個別に問題と向き合っており、情報の共有や協働があまり活発ではない状況がある」との意見も示され、第2・第3世代ムスリムのムスリムとしてのアイデンティティ形成、地域社会におけるマスジドの役割のあり方、日本人ムスリムの状況、全国レベルでのマスジド・ネットワーク、日本の地域社会との相互理解・協働など、重要な問題が取り扱われ、これら諸問題を解決していく方向性についても議論が及びました。

そこで、改めて、全国各地のムスリムの方々が抱える課題や対応について議論を深化させ、望ましい「ムスリム・コミュニティのあり方」について忌憚なく話し合い、日本と滞日ムスリム社会との交流拡大に寄与することを目的として、2010年春をめどに第2回全国モスク代表者会議「日本におけるムスリム・ネットワークと日本人ムスリム（仮題）」の開催を企画しました。前回とは異なり、この会議では、何人かの代表者の方々にあらかじめテーマを決めて発表いただくシンポジウムを行い、その後、コメンテーターを含めて、パネルディスカッションを行うという形式で企画することにしました。是非、皆様方にご賛同いただいた上で、この会議にご参加いただきたく、ご案内申し上げる次第です。なお、その他の参加者は、研究者や一般参加者を主とし、会議での議論は報告書とする予定です。

開催の決定と日程につきましては、皆様方のご都合をお伺いして決定させていただきますので、別紙の日程についてご都合をお知らせいただければ幸いです。調整後、日程や会場については、お知らせいたしますので、どうぞよろしく申し上げます。

なお、大学の規定に従って、会場（東京都新宿区の早稲田大学を予定）までの交通費実費と遠方の方には宿泊料に相当する金額を負担させていただく予定ですが、具体的には開催が決定した段階でお知らせします。以上の趣旨をご理解いただき、この会議にご参加いただければ幸いに存じます。

末筆ながら、皆様方のますますのご発展をお祈り申し上げます。

敬具

2009年12月22日

Waseda University, Faculty of Human Sciences, 早稲田大学人間科学学術院

TANADA Hirofumi

店田廣文

## 参加者一覧

モスク代表者など		オブザーバー参加者
樋口 美作	モスク代表者など	研究者・団体関係者
クレイシ・ハルーン	モスク代表者など	研究者・団体関係者
シェル・アフザル・レカ	モスク代表者など	研究者・団体関係者
浜中 彰	モスク代表者など	
前野 直樹	モスク代表者など	
須見 啓司	モスク代表者など	
モハम्मド・アンワル・メイモン	モスク代表者など	
オバリ・アブドゥル・カーデル	モスク代表者など	
ムスリム参加者		
外国人ムスリム	日本人ムスリム	ジャーナリスト
日本人ムスリム	日本人ムスリム	ジャーナリスト
外国人ムスリム	外国人ムスリム	その他一般
外国人ムスリム	外国人ムスリム	その他一般
外国人ムスリム	外国人ムスリム	その他一般
外国人ムスリム	外国人ムスリム	その他一般
外国人ムスリム	外国人ムスリム	その他一般
外国人ムスリム	日本人ムスリム	その他一般
日本人ムスリム	日本人ムスリム	その他一般
日本人ムスリム		大学院生
		大学院生
		大学院生
<b>早稲田大学関係者(主催者・開催時点の所属)</b>		大学院生
店田廣文	主催者側メンバー・教員	大学教員
小島宏	主催者側メンバー・教員	大学教員
岡井宏文	主催者側メンバー・客員研究員	大学教員
石川基樹	主催者側メンバー・院生	大学教員
手塚智之	主催者側メンバー・院生	大学教員
沼田彩誉子	主催者側メンバー・院生	大学教員
山縣敦	主催者側メンバー・院生	
劉 泰佑	主催者側メンバー・院生	その他オブザーバー参加数名

## 編者・会議録作成者・会議運営者一覧

### 編者

店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院教授
岡井 宏文	早稲田大学多民族多世代社会研究所客員研究員 早稲田大学人間科学学術院非常勤講師

### 会議録作成者

手塚 智之	早稲田大学人間科学研究科修士課程
山縣 敦	早稲田大学人間科学研究科修士課程

### 会議運営者

店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院教授
小島 宏	早稲田大学社会科学総合学術院教授
石川 基樹	早稲田大学人間総合研究センター客員研究員
岡井 宏文	早稲田大学多民族多世代社会研究所客員研究員 早稲田大学人間科学学術院非常勤講師
劉 泰佑	早稲田大学人間科学研究科博士後期課程
手塚 智之	早稲田大学人間科学研究科修士課程
沼田 彩誉子	早稲田大学人間科学研究科修士課程
山縣 敦	早稲田大学人間科学研究科修士課程

付記：

本報告書は、平成 21~23 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤 C）による調査研究「滞日ムスリムの生活世界における多文化政策の影響と評価」（課題番号 21530567）による研究成果の一部である。